
G i r l s M e m o r y (Dear Girl続編)

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Girls Memory (Dear Girl 続編)

【Nコード】

N3009B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

FtM—GID…性同一性障害に苦しみながらも元気な高校生活を送る刑部真夕。ある晴れた日曜日、カートのサンデーレースに参加したマユは多重のアクシデントに巻き込まれてしまう。意識を失い病院に運ばれたマユが数日後に目覚めた時、その思いのほか軽い怪我とは裏腹に、周囲の人々は困惑した：友情と愛情が交錯する新たな展開で進む、Dear Girlの続編的ストーリー。

プロローグ ― 第一章【1】目覚め（前書き）

〈前回まで〉心と身体の性の不一致。それによって引き起こる恋愛
感の相違：思春期を迎えたマユの苦悩は一層つのるばかり：それで
もマユは人との関わりを拒まずに自分に正直に歩んでゆく。お待た
せいたしました。Dear Girl 続編です。といっても、前作
とはかなり違った趣向で描いているので「続編的」と受け止めて下
されば幸いです。ここから読んでもそれなりに楽しめるとは思いま
すが、主な登場人物の詳細は是非Dear Girlにてご覧下さ
い。

プロローグ ― 第二章【1】目覚め

【プロローグ】

スタートで出遅れた。

やっぱりうまい奴はスタートから違う。

10月中旬の日曜日。見上げれば蒼い虚空が果てしなく広がり、雲など何処にも見つからない。太陽の陽射しが熱く白く、眩しいほどに降り注いでいた。

ギャラリー台に群がる人の山。低い柵越しに飛ぶ歓声。何時もは雑草しか無い殺風景な1コーナーの先の敷地にも、金網越しに人の頭がごろごろと見える。

それはまるで、スモールワールドのアトラクション内を早回しで過ぎるような感覚で、スモークシールドで遮られた僕の視界に入り込んで来た。

カートレース100CC一般の部。午前中の予選で決まった僕のスタートグリッドは5番目だった。参加者30名ほどのレースは、二組に分かれて予選、決勝が行われ、決勝に進めるのは予選タイム上位12名ずつとなる。そしてその後、双方3位までの者が本当の決勝ファイナルラウンドへと進む方式だ。

しかし午後の予選ラウンド決勝スタート直後、1コーナーを抜けて、僕の前には3、4、5、……7、8台いる。12台中9番手だ。

ローリングスタートは、フォーメーションラップとしてコースを1周した後、そのままスタートが切られる為、加速するタイミングのコツがあるようだ。バカ正直にスタートライン手前から加速した僕は、大きく出遅れてしまった。

「マユ、アクセル踏んで！」

最終コーナーの立ち上がりで、千夏の声が聞こえた時にはもう既

に遅かった……

それでも、オープニングラップを終えて1コーナーを再び抜けた時、自分の前にいるのは4台。5番手まで上がって自分の位置を取り戻した。

コーナーでは負けていない。

しかし、あのトップを走るカートはストレートが異常に速いようだ。

2番以下が離される。

僕は少しだけ焦っていた。

前にいる車より、僕の方が速い。それは確かだ。しかし、なかなか抜けない。

技術的なものか、経験の差なのか……彼はコーナーの入り口で強かにイン側をブロックする。

全10週のうち半分を過ぎて、順位は変わらなかった。

6週目の1コーナーで、トップの車がコースアウトしそうになって失速し、2位以下との差がグッと近づいた。

僕はどうしても前の車が抜けないでいたが、執拗にプッシュしていたプレッシャーが効いたのか、この周のヘアピンで外に膨らんだ前走車のインに、やっと滑り込む事ができた。僕の車のリヤタイヤと彼のフロントタイヤが一瞬フレンチキスをする。

2個目のヘアピンでインを絞めて完全に前に出る。

体重の軽さが役に立って、バックストレートの加速で更に3位の車に並べそうだった。

今日のバックストレートは、普段より10メートル長いロングコースにセットされている。1000CCのエンジンのトップスピードが充分に生きる距離だ。

1位から5位までほとんど差が無く、数珠繋ぎになっていた。しかし、ストレートエンドで若干1位の車に、それ以下が引き離される。

僕は、ブレーキを遅らせて、3位の車に仕掛ける準備をしていた。

コンマ数秒、遅れてブレーキを踏む。

左の茂みから、一片の落ち葉がヒラヒラと舞い落ちてくるのが視界の上方に映った。

風に舞って落ちてきたその木の葉は、僕たちが切り裂いた風に弾かれて、宙でバウンドするように跳ね上がって後ろへ飛んでいった。その時ストレートエンドの右コーナーに進入した1位の車が、オーバースピードをカバーしようとテールが大きく流れて車が横を向くのが見えた。

道幅は充分在る。2位の車は簡単にかわすだろうと思った。しかし、2位の車は1位の車を避けきれずに接触して、2台ともスピンをした。

その時すでに、3位の車と4位の僕はコーナーの進入手前、横並びになっていた。

目の前で2台のカー트가コースを塞いだ。行き場が無い……僕はイン側にいた為、よりインへ逃げるしかなかった。

大丈夫だ、かわせる。落ち着け。

前方の障害物の動きが、スローモーションで見えた。これから横切ろうとしている縁せきのゼブラ模様の、赤と白の境目に多少の滲みがあった。そんなもの見えた事も無いのに、その時の僕には見えたのだ。

ブレーキを小刻みにコントロールしながらダートを横切る。

パツと、弾けるように土煙があがり、縁せきをカットした車体が跳ね、ハンドルが取られて左右に小さく車が揺れた。

これで僕はトップに踊り出る事が出来た。僕はこの瞬間、自分はラッキーだと思った。

アウト側にいた3位の車は、前の2台をうまく避ける事ができずにまともに突っ込んだようだ。それは、ヘルメット越しに、視界の隅に僅かに捕らえていた。

反動で、3台のカー트가ビリヤードの玉のように大きく弾かれて、突っ込んだカー트는車速があった為、勢い余って横っ飛びにジャン

プした。

もちろん、その時、自分の目の前に何が降って来たのかなど、僕には全く判らなかった。

視界の上の方に大きな黒い影が見えたと思った瞬間、ガツンッという大きな衝撃と共に、僕は意識が飛んでしまったのだ。

衝突の反動で跳ね上がったカートが、その横を通り過ぎた僕の頭上へ、あまりにもタイミングよく降ってきたのだ。

意識は無いはずなのに、エンジンストールした静寂の中で、周囲の異常とも言える、ざわめきとどよめきが聞こえていた。

身体が揺れている。

何処だろう。凄い音だ。

サイレン…… サイレンの音がやたらと大きく聞こえる。

大きなサイレンの音が、耳の中で何重にも重なり合って響き渡っていた。

頭が重い…… 頭の中で暗闇がグルグルと回って、自分がどういう状態なのか全くわからない。

何処か近くで事故か？

違う、僕が揺られているコレがサイレンを発しているのだ。

人の声が聞こえる。風呂場で話しているような声。でも何を話しているのか理解出来なかった。

誰かが僕の腕をつかんで、何かをしている。身体中が軋むように痛い。

目が開かない。

口に当てられている、何かが苦しい……

身体が揺れる……

何処へ、行くのかな……

……

.....

第1章

【1】目覚め

小さな虹色の光の玉が幾つも集まって一つなると、大きな渦を造って目の前で弾けた。

暖かな空気が身体を柔らかく包んでいるような気がした。

風の匂いを、嗅覚ではなく全身の肌で感じて、車の行き交う微かな音が、何処か遠くから鳴り響く音楽のように心地よく聞こえて来た。

刑部真夕は細く目を開けて、白い天井を見上げていた。

見たことも無い天井。同じ白でも、自分の部屋ではない。

ここは何処だろう……

どうしてあたしは、こんな所に？

自分がベッドの上に寝ているのだという事は直ぐに判った。

ベッドの中に自分が溶け込んでしまったかのように、身体が重くてだるかった。左腕が何かで固定されて自由には動かない。

真夕は、辺りを見回した。頭をちょっと枕から持ち上げて動かすだけで、鈍い痛みが頭の芯から響いて、目に映る景色が微かに歪んだ。

右腕は、少し間接が痛い、自由に動く。しかし、そこから伸びた透明の細いチューブ。それを頭上へ辿ると、液体の入ったパックが吊るされているのが見えた。

病室だ……

どうして怪我をしたんだろう…… 交通事故にでも遭ったのだろうか。

足元に突っ伏して眠っている人がいる。それが、自分の母親だと

言う事は、真夕にもすぐに判ったが、どうして自分がここに寝ているのか、まったく思い出す事ができなかった。

「マユ……意識が戻ったのね」

真夕の気配に気付いて目を覚ました母親は、微笑みながら静かに涙ぐんでいた。

それは、とても疲れきった様子の中で歓喜に満ちていた。

「お母さん……あたし……」

「カートのレースで、事故に遭ったのよ。覚えてる？」

母親は、そう言いながら立ち上がると「待ってて、看護婦さん呼ぶから」

かーとのれえす？って……なんだろう。

れーす？あたしが何のレース？

今の真夕には、母の言った言葉の意味が判らなかった。

何だか、考えるのもおっくうで、ただ静かにゆっくりと、枕に頭を委ねた。

「よう、元気そうだな」

その日の夕方、病室に和弥が訪れた。

和弥は小さい頃から真夕の家の近所に住み、二人は共に育った仲間だった。

幼稚園の頃は、真夕の方が少しだけ背が高くて、何時も和弥を先導していた。

小学校高学年になると、和弥の背は急激に伸び始めて、気が付くと真夕よりも20センチ以上高くなっていた。

真夕はベッドに上体を起こせるようになっていたが、立ち上がるうとしたり頭を大きく動かすと、脳が揺さぶられるように眩暈がして頭痛がした。

「びっくりしたぜ。事故の事覚えてないんだって？」

真夕は和弥の言葉に、小さく肯いた

「カートをやってたって、お母さんに聞いて、なんかびっくり」

真夕はそう言って笑った。

「じゃあ、カートをやってた事自体、覚えてないのか？」

「うん。今、秋でしょ。夏の暑かった記憶は何となくあるけど、どう過ごしたのかはさっぱり」

真夕は人事のように、わざと明るく言った。

「お医者さんは、なんて？」

「一過性の、記憶の喪失だって。日常には支障が無いって言ってたわ」

そう言って、戸惑いの笑みを浮かべる真夕を見て、和弥は不に落ちなかった。

自分と二人きりで喋る時は、性自認している男性口調で喋っていた真夕が、あまりにも自然に女性の口調で喋っている。

表情がとても穏やかで、女性らしい。

確かに真夕の身体は女性そのものだが、所々に感じた男らしいと言うか、ヤンチャな部分が全く無いのだ。

もちろんそれは、付き合いの長い和弥だから気付く微かな変化なのだが、この時は事故の軽い後遺症だろうと思った。

母親の小夜子でさえそう思ったのだから、しかたない。

「じゃあ、秀雄やチカさんの事は覚えてる？」

「秀雄は判るよ」

真夕は笑ってから、「あれ？和弥、秀雄の事知ってたっけ？」

和弥は、顔を曇らせた。心の中で、不安だけが急激に膨らんだ。

「チカさんは？覚えてないのか？」

「なんとなく、名前は聞き覚えあるけど……」

和弥は言葉を失った。

記憶が無い。この夏の、記憶が……

彼は、背すじから腰を通して、身体を中心の力が一瞬で抜けていくのを感じていた。頭の中を白くて冷たい何かが通り過ぎたような

気がして、こめかみが震えた。身体が揺らめくを感じて、和弥は慌てて正気を取り戻した。

「どうしたの？ あたし、そんなに大切な事忘れてる？」

和弥の反応に、真夕も不安げな表情を隠せなかった。

和弥は何時に無く、優しい笑顔で

「大丈夫、心配ないよ」と言った。

【2】消失

「やはり、かなりの頻度でここ数ヶ月の記憶が消失しているようですね」

真夕の担当医師は言った。

母親である小夜子は、和弥と共に真夕の意識が快復して3日後、別室で検査の結果を聞いていた。

記憶の検査に使う質問は、和弥にも協力してもらって作った。交友関係などは、小夜子にはわからない事もある。

そして、医師は続けた。

「それと、G I Dの症状は今の段階では、見られません。専門の詳しい検査も、念のために必要だとは思いますが」

それを聞いた小夜子は、何だか頭の中が漠然として、その事に喜んでいいのか悲しんでいいのか判らなかった。

今まで長い間、女性の身体を持った男の子として育ててきて、いきなり純粋な女の子になったのだ。

いや、これは喜ぶべきなのか。何より、身体と心が同調したのだから。

どちらの性別であっても、身体と心が一致している方がいいに決まっている。いやまて、しかし、それと同時に真夕は記憶の欠損を起こしている…… 小夜子の中で、沢山の思いが一気に湧きあがって絡みあった。

「昔の記憶があるのに、G I Dと言う記憶がないんですか？」

「そのようです。しっかりと女性の性自認をしています」

小夜子の問いかけに、医師は応えた後

「人の脳は、時に苦痛や苦悩の記憶を消して、その周囲の記憶を都合よく組替えてしまう事があるんです」

そう付け加えた。

「逃避…ですか？」

小夜子が言うのと医師は小さく頷いて

「今回の事故が、その引き金になったのでしよう」

和弥は、ただ無言のまま二人の会話を聞いていた。

小夜子に比べ、彼の気持ちはもっと複雑だった。

一度は好きでたまらなくて、真夕の女らしい身体に惹かれ、しかし結局は、男同士としての友情を和弥は選んだのだ。

それは、自分の心を押し殺して、真夕という一人の人間を尊重した結果だった。

それが、いまさら完全な女性になったと言われても、はいそうですかと言うわけにはいかない。

それじゃあ、男同士の友情はどこへ……

「記憶が戻ると、G I Dの症状も戻ってしまうのでしょうか？」

和弥が医師に訊いた。

母親の小夜子はハッとして和弥を見た。

記憶の一部と引き換えに真夕のG I Dの症状は消えたのだ。

「それはなんとも……」

医師は、検査結果の書類のページをめくりながら「今までにこう言ったケースの事例もないし、もどって見ないことには全く判りません」

そう言った後、二人の不安げな表情を察して

「とにかく、日常の生活にはあまり支障はないはずです……」

「もしもし、チカさんですか」

和弥はその夜、千夏に電話をかけた。真夕の意識が戻って直ぐに連絡しようと思ったが、彼女の様子を見て、それをためらっていたのだ。

天野千夏^{チカ}は、真夕が通っていたカート場で働いている。彼女は真夕が記憶を失う以前、F t M－G I Dである真夕を受け入れて、男

女としての付き合いをしていたのだ。

ほんの束の間の甘い関係。それがいかに果かない関係であるかは、きつと二人が一番よく理解していた事だろう。しかし、そんな事には関係なく二人の心と身体が引き合ったのは事実なのだ。

そして今回の場合、二人を引き離す状況はまったく思いもよらない所からやって来た。

本人の思いとは関係なく、二人の関係は突然誰も意図しないまま、一方的にリセットされてしまったのだ。まるで、ゲームの途中で、間違っリセットボタンを押してしまったかのように……

千夏に今の真夕の状況を話していいものか、和弥は迷った。

しかし、彼女が直接真夕に会って、いきなり自分を知らないと言われたら大きなショックを受けるだろうと思った。

だから、事前に千夏に話を伝え、その上で彼女がどう行動するかを自分で判断すべきだと思ったのだ。

「マユの事なんです……」

和弥は余計な話はせず、早々に切り出した。

「マユの容態はどうなの？ まさか……」

千夏は心配そうに訊いた。

「いや、3日前に、意識が快復しました」

「本当に……よかった。よかったわ。じゃあ、お見舞いに行かなくちゃね」

電話の向こうで千夏の声が急に弾んで、大きな喜びと安堵が伝わって来た。

真夕が病院に運ばれた時、当然千夏も一緒に救急車に乗った。その後も数回見舞いに行ったが、なかなか真夕は目覚めなかった。

元気な姿にもう会えないかもしれない。千夏の心の中で、そんな恐怖と不安が広がって、右も左も判らない暗闇に一人佇んでいるような気持ちだった。

この10日余りの日々が、彼女にとってどれだけ長い時間を感じた事だろう。

和弥は、彼女の喜びに満ちた声を聞いて、その先を切り出すのに躊躇した。

でも…… しかし、言わなければならない。

「ただ……」

「どうしたの？」

「記憶が、一部無いんです」

「事故の記憶？」

「いえ。ええ、事故もそうなのですが……」

「ひどいの？」

「ここ数ヶ月の記憶が曖昧らしくて……」

和弥は言葉を濁した。

「どう言う事……？」

「チカさんの事も…… 名前に聞き覚えはあるそうなのですが……」

「うそ……」

「……すみません…… 本当なんです」

「そんな……」

彼女は息を吞んで「そんな事って……」

それでも千夏は

「身体は、身体は大丈夫なの？」

「ええ、意外と元気です」

和弥が明るい声でそう応えようと「じゃあ、よかった……」

千夏の言葉が途切れて、息が漏れてくる。

沈黙が続いた。いや、咽ぶ声…… 涙に息を殺しているのが和弥

には伝わってきた。

「もしもし、大丈夫ですか？チカさん？」

少しの間があった。和弥は携帯を握り締めたまま、咽ぶ声が止むのを静かに待った。

心苦しく、悲哀に満ちた心の奥底から染み出るようなその音を、和弥は出来るだけ頭の中を素通りさせた。その嗟嘆が自分の心に積もらないように、部屋のカーテンを開けて、無心で星の瞬きを見つ

めていた。

和弥はその後で、秀雄と香織にも真夕の容態を伝えなければなら
ない。

もちろん、以前のバイト仲間と言う記憶しか、今の真夕には無い
のだ。

【2】消失（後書き）

※一口メモ…GIDとはGender Identity Disorderの略で、性同一性障害の事です。FtMはFemale to Maleの略でFtM-GIDは女性の身体で男性の性自認をするケースです。反対のケースをMale to Female MtF-GIDと言います。

【3】ひとみの奥

真夕は事故に遭ってから1週間、意識が無かった。

大きな外傷は、左腕の骨折のみで、首のムチ打ちはあったが頭部はヘルメットが守ってくれた。

それでも記憶障害を起こすほどの衝撃が彼女の頭部を襲ったのだ。ヘルメットは二度と使用できる状態では無かった。

彼女が病院のベッドで横たわっている間に、窓から見える銀杏や楓の木は、あっという間に紅や黄色に葉の色を変えていった。

窓から入る風もだいぶ秋めいて、やけに早い夕暮れを過ぎると、それは冷たく乾いていた。

「元気？」

病室の入り口から、ノックの音と共に声が聞こえた。

それが香織だと言う事は、真夕にも判った。一緒に、秀雄の姿もあった。

「香織、秀雄。なんか、久しぶり」

「なに、呑気な事言ってるんだか」

香織が笑って、「はい、差し入れ」

そう言ってお菓子とジュースの入ったコンビニ袋を差し出した。

「元氣そうで、安心したよ」

秀雄が言った。

「バイクで来たの？」

真夕の質問に、秀雄は少し驚いて「あ、ああ」

「あれ？あたし、秀雄がバイクに乗ってるって、知ってたっけ？」

秀雄と香織はちよつと顔を見合わせて

「うん、知っていいんだよ」と声を揃えて応えた。

こんな具合に、所々の記憶が無意識に出る場合がある。

「そう、よかった」

真夕は笑って「香織、雰囲気変わったね」

今の真夕には、バッチリと目の周りに気合の入った香織の記憶しかない。

秀雄と付き合うようになって、あまり化粧をしなくなった香織の印象は、真夕には新鮮に映るのだ。

「イメチェンだよ」

香織は、何時もと変わり無い笑顔を見せて笑った。

細かい事を気にせず、人と付き合えるのは彼女の一種の長所だ。勿論、それが結果として短所になる場合もある。

しかし秀雄には、その様子がなんだか寂しいものに映るのだった。あれだけ色々な事があった夏。そこで自分と真夕は和弥に負けないくらいの信頼関係を築き上げたと思った。

香織にしても、畑違いの知り合いに過ぎなかった二人は、何時の間にか親友に変わっていた。

それが全て無かった事になるのだ。

元々社交的な真夕の事だから、親しさを取り戻すのは容易いだろう。しかし、その先にあった信頼関係は取り戻せるのだろうか。

秀雄は和弥からの電話で、真夕のG I Dの症状が消えた事を聞かされていた。

ここに居るのは、正真証明女性の真夕……

香織と笑いあう少女の姿を、秀雄は不安と戸惑いの思考の中で何時の間にか見入っていた。

再び軽いノックの後に、病室の扉が開いた。

「あ、チカさん。久しぶりい」

香織が手を振り、秀雄が小さく頭を下げた。

この人が千夏さん…… 和弥が言っていた人だ。

「こ、こんにちは」

真夕は、できる限りの笑顔を見せた。

しかし、困惑した笑みには変わりは無かった。

顔には何となく見覚えがある。しかし、親しかった記憶が無いの

だ。

「いいのよ。はじめまして。でも」

千夏が冗談っぽく笑って「はい、差し入れ」

と、ケーキを差し出した。

4人で姦しいくらいに話が弾んで、ワイワイとケーキを一緒に食べた。

秀雄の誘いで、千夏は時間を合わせて見舞いに来たのだ。人が集まれば、きつとこんな風に賑わうだろうと思った。

真夕の記憶の無い事など忘れてしまいそうなほど、4人は親しく話しこんだ。

しかし、千夏の心の中は複雑だった。

真夕は、彼女はもともと女の子なんだから、これでいいのかもしれない。そうよ、かえって良かったんだわ。そう自分に言い聞かせても、特別な感情が急に消えて無くなるわけではなかった。

ただ、千夏の心が揺れ動いた時に感じた、真夕の瞳の奥に在った何かは、もう感じる事は無かった。

千夏から見ても、真夕は普通の少女に過ぎなかったのだ。

私の好きになった、彼女。いえ、刑部真夕という「彼」は、もう何処にもいない。私の愛した彼は、まるで幻影のようにこの世から消えてしまったのだ。

千夏は、心の中を見透かされないように、何時もより大げさに笑って見せた。

【4】彼女の事情

辺りの草木がすっかり秋色に変わった頃、真夕は二週間ほどで病院を退院し、3日間の自宅療養を過ごした後、学校にも通えるようになった。

久しぶりの自転車。左腕を庇って、右手だけでハンドルを操りながら小気味よくペダルを踏んで、高速の高架橋の下を抜けると右側に小さな丘が見える。薄く雲のかかった青い空をバックに聳えるその丘を見つめていると、近くに蚊が飛ぶような音が聞こえて、真夕は一瞬頭を振った。

何かのエンジン音のようだった。しかしもう一度丘を見上げた時、それはもう聞こえなかった。

学校の正門をくぐる行為が、とても懐かしくて、まるで何ヶ月ぶりかで学校へ来たような、奇妙な錯覚を感じた。

「マユ〜！」

加奈が後から走って来て真夕に抱きついた。

「もう、学校来れるんだ」

「うん。まだ、あちこち痛いけど」

そう言って真夕は苦笑しながら「だから、抱きつかないでね」

「あ、ごめんね。つい」

加奈は、小さく舌をだした。

加奈は高校に入って以来の一番の友人で、病院にも他の友達と何度かお見舞いに来た。

学校関係については、無くした記憶もほとんど支障は無かった。クラスのみんなの事も忘れていないし、もちろん、周りのみんなは真夕の事を忘れたりはしていない。

どう言う訳か、勉強した事もほとんど覚えていた。

まあ、覚えているといっても、もともと試験の為以外には、あまり身を入れていない勉強ではあるが。

「大変だったね、マユ」

教室へ入ると、晴香が声を掛けて来た。

彼女も、加奈同様、学校では比較的一緒に過ごす時間が多い。G
IDだった真夕は身体的同性である女生徒達とも、少し距離を置いていた。確かに表面的にはみんなと仲良くしていたが、心の異性が
何処かで線引きをしていたのだ。

「まあね」

真夕は軽く返事を返す。

大変だったと言われても、確かに左腕はギブスが取れたただけで
まだ完全には使えないし、入院中も退屈で死にそうだった。

しかし、事故の記憶は無い為、その恐怖感などはまったく感じ
ないのだ。

だから、事故の状況を話のネタにしようにも、真夕には話すこ
とができないのだ。

「どうなったか、わかんないでしょ」

晴香は真夕の前の席に腰掛けながら「ごめんね、お見舞い行け
なくて」

「いいよ、すぐ退院だったし」

「事故の事、誰かに聞いたの？」

「うん。その場にいた友達には聞いたけど、実感ないのよね」

真夕が、呆気らかんと笑って見せたので、晴香も思わず笑って
しまった。

「あんた、無事だったから笑ってられるけど……」

加奈が隣の机に来て座った。

「凄かったの？」

やはり晴香は、その事に興味があるようだ。

「他の人の乗ったゴーカートがジャンプして、マユの頭にぶつか
ったんだって」

加奈は、大げさに身を乗り出して晴香に言った。

彼女は自分で見たわけではないが、和弥に一部始終を聞いていたのだ。

「ゴーカートじゃなくてカートだよ」

真夕が訂正した。

「でもあんた、乗ってた事すら覚えてないんでしょ」

加奈にそう言われると、真夕も「まあね」

そんな感じで、今日はいろんな人にあれこれ質問攻めになって、その度に加奈が説明役を引き受けるのだった。

和弥は既に、真夕が入院した翌日から、あちこちから質問を受けていた。

真夕を気にかける男子生徒がこんなにいたのかと、彼自身びっくりしたほどだった。

一番初めにその事で声を掛けて来たのは、橘圭吾だった。

彼は、香織との待ち合わせをした真夕をその喫茶店まで自転車で送って行った事がある、香織いわくアツシーくんだった。

「刑部が怪我で入院って、本当か？」

和弥は、彼の勢いに押されながら「えっ、あ、ああ。ちよっとな」

和弥は、言いよどんだが、しつこく迫られて、事故の経緯を話した。

すると、次から次へと、名前も知らない奴や、終いには先輩や後輩にも呼び止められた。

「マユ先輩って、何気に人気あるのよ」

たまたまその様子を見ていた朋子が寄ってきて言った。

「ああ、もう、何度も同じ事を言わされたよ」

和弥はそう言って肩をすくめた。

「でも、良かったね。よくなって」

朋子の笑顔に、和弥は少し素っ気無く「ああ…」

よかった……か。真夕は完全な女になってしまった。

もちろんそれは、この学校の誰も知らない事だ。みんなにとっては、ずっと以前から、真夕は女の子なのだから。

それを素直に喜ぶべきなのか、和弥の気持ちは相変わらず複雑だった。

千夏に和弥、そして秀雄。実の母親も含めて、真夕のG I Dを知っていた者は現状に困惑するばかりだった。

【5】亜希子

「こんにちは、先輩」

肩にかかった艶やかな黒髪が、軽やかに風に揺れていた。

放課後の昇降口で、彼女は笑って真夕に近づくと「退院おめでとう御座います」

「あなた、確か…… 朋子さんよね」

真夕は自分の記憶を、頭の引出しから引きずり出すかのように探って言い当てた。

「記憶が少し無くなってるって」

「ええ、少しね。でも、あなたは覚えてるわよ。和弥の彼女よね」

「ハイ。覚えていてくれて嬉しいです」

朋子はそう言って、真夕に笑顔を返した。

「えっと……そちらは……」

真夕は朋子の隣にいるショートカットの似合う娘を見て言った。

「ああ、彼女は先週神奈川から転校してきたんです。だから、先輩が知らなくて当然ですよ」

「ああ、そう」

真夕はまったく心当たりのないその娘を見て安心したように微笑んだ。

その娘は、真夕の笑顔にペコリと頭を下げた。

「身体、もういいんですか？」

朋子が言った。

「えっ？ ええ」

隣の娘に気を取られていた真夕は「元気が取り得だしね」

「じゃあ、あたしと一緒にですね」

そう言った朋子は、いかにも可愛らしい笑顔のまま

「それじゃ、マユ先輩」

と、手を振って行ってしまった。

隣の娘も会釈をして、朋子についていった。

開けっぴろげな朋子の笑顔に、真夕は何となく呆氣に取られてそれを見送った。

朋子と一緒にいた娘は、歩きながらさりげなく手を繋いだ。

真夕はその姿を目にしてハッとした。

女の子同士が手を繋ぐ事は、日常でごく当り前の事だ。しかし、

真夕は誰かと手を繋いだ記憶がないような気がした。

「どうしたの、マユ」

加奈が後から来て声を掛けた。

「手……」

真夕は無意識に呟いた。

「手？」

加奈は真夕の視線の先にある光景を見つめた。

「あたし達も繋ぐ？」

加奈は冗談っぽくそう言って、真夕の手を取った。

冷たいけど、あったかい……

「あれ？真夕、前は手繋ぐの嫌がってたのに……」

加奈はそう言って、笑った。

「そ、そうなの？」

「行こ」

二人は駐輪場までの少しの間、子供のように繋いだ手を振って歩いた。

手のひらで感じる人の温もりは、穏やかで、優しかった。

朝の駐輪場は大変だ。早く来た順に、みな昇降口に近い位地に停める為、比較的ギリギリに来る真夕はけっこう遠い位置に停める羽目になる。しかし、わざわざその為に早く来ようとは思わないのは、以前の彼女と変りなかった。

「おはようございます」

翌朝、学校の駐輪場で、真夕はいきなり声を掛けられて振り返った。

カラーリングなのか天然なのか、陽の光が当たると栗色に光る短い髪。

「あ……あなた、確か」

「三田村亜希子です」

昨日の帰り、朋子と一緒にいたショートカットが爽やかな娘だった。

「お、おはよう……」

いきなり声をかけられた真夕は、なんだか間の抜けた声で、挨拶を返した。

「入院してたとか」

「ええ、ちよつとね」

駐輪場から、真夕と亜希子と一緒に校舎へ向かっていた。

その少し馴れ馴れしい亜希子の行動に、真夕は戸惑いながらも、仕方なく一緒に歩いた。

背丈は真夕とちょうど同じくらいだが手足が細く、横から見た腰はやけに薄っぺらで、今にも折れてしまいそうな見るからに華奢な身体つきだ。真夕は横目で彼女の胸を盗み見して、ちよつと勝ったかも。などと空しい優越感を抱いた。

「先輩は部活どうしてるんですか？」

「えっ？」

なんだか、突然の妙な質問に「あ、あたしは……確か写真部だったような……」

真夕はそう言って、曖昧な笑みを浮かべた。

真夕は確かに写真部に所属していた。しかし、放課後はバイトに明け暮れていた為ほとんど顔を出していない。と、いうか、写真部自体が普段はほとんど活動をしていないのだ。

確かに一部の写真に熱中する連中は、何かイベントがある度に、

気合を入れて自慢の一眼レフを手し、急に活き活きとして現場へ乗り出す。

しかし、真夕も写真が嫌いではないものの、他の事に忙しく、作品としての写真は久しく撮っていない。

Dear Girlの作中には登場していないが、秋の文化祭でも、部の展示で出品したのは、去年撮ってパネルにしたものを、そのまま今年も使ったくらいだ。

「写真部かあ。あたしも写真部にしようかなあ」

亜希子は少し遠い景色を眺めるように言った。

「はあ？」

真夕は、そんな亜希子を見て思わず声が出た。

亜希子は、フツツと意味深に笑って

「それじゃあ、せ・ん・ぱ・い」

そう言っただけの下駄箱の方へ跳ねるように歩いていった。

真夕は何だか判らない不安を抱きながら、彼女を見送るのだった。

【6】丘の上

真夕は自分に対して、僅かな違和感を抱いていた。

自分であるはずの自分が、まるで自分で無いような……… それ
は、言葉にはうまく言い表せないような微かな違和感だった。

何故自分は、女だてらにマウンテンバイクなどに乗っているのだ
ろう。

そんな事ひとつにも、妙な疑問が沸き起こる。

以前からマウンテンバイクに乗っていた事は覚えている。しかし、
どうしてそれが気に入って買ったのかはまったく判らなかった。

スピードも出るし、普段ジーパン姿で乗り回すには重宝する。し
かし、スカートではどう考えても乗りにくい。

以前は、そんな事を考えなかったのだろうか……

そして、どうして、カートなどを始めたのだろう。

女性のドライバーも確かにいるのだろうが、何故自分がそれに興
味を抱いたのか、今の真夕には判らなかった。

自分が無くしたのは、記憶の一部分。それが、ただ事では無いよ
うな、そんな気がするのだった。

「ねえ、お母さん。あたし、なんで、マウンテンバイクなんか買った
のかな」

真夕が怪我をしてから、母親の小夜子は少し早めに帰宅するよう
になった。

娘の事が、少しは心配なのだろう。

「どうしたの、今頃。あんた、中学の時からああいう自転車が好き
だったのよ」

母親はダイニングテーブルに食事を並べながら言った。

「そうなんだ」

真夕は、それを眺めながら、怪訝な表情で言った。

「あんた、前から少し変ってたからね」

母親は、何食わぬ顔で言う。

「それは認めるけど…… なあんか、シツクリこないのよね」

「何が？」

「ううん…… よくわかんない」

真夕はそう言って肩をすくめて笑った。

母親には何となくわかっていた。

真夕が男の心無くした為に、微妙なバランスが崩れて、自分の持ち物や無意識な行動に違和感を抱くのだと。

しかし、真夕にはG I Dだった記憶そのものが欠損しているのだ。しかも、彼女自身の過去の記憶は、G I Dだった真夕を回避するかの様に彼女の中では辻褄をあわせて再構築されている。それは、眼球にある盲点を脳が自動的に補正して、それを意識させない事に似ている。

だから、本人には、何故言い様も無い違和感を自分に抱くのか、まったく判らないのだ。

11月に入ると、風はもう真冬のように冷たかった。

高く抜けるような空には、平らなウロコ雲が波状に浮かんでいた。さらに、その遙か彼方には定規で引いたような細い飛行機雲が一筋描かれている。

真夕は左腕もほぼ全快した事もあり、カート場へ行ってみる事にした。両腕でしっかりとハンドルを握ったマウンテンバイクで、緩くカーブした勾配を駆け上がる。

枯れ葉色の丘越しに、青い空を見上げる。上り口から、既に微かなエンジン音が聞こえていた。

その音に導かれるように、久しぶりに上がったであろう坂道と丘越しに見る青空は、やはり、何となくだが見覚えがあった。

鬱蒼と茂る草木はすっかり秋の彩りに変っているが、何度も通っ

た道だろうと言う事が微かな記憶の欠片の、その残像ほどには感じる事ができた。

しかしその記憶は、誰かに教えてもらわなければ、日常誰にでも感じるデジャヴーほどに微かなものだ。

坂の頂上から聞こえるエンジン音は次第に大きくなってゆく。

これが、カートの音か。確かに、蚊の飛ぶ音にも似ているが、微かに懐かしい響きだった。

それが、自分はここでカートに乗っていたのだと確信するのには充分だったが、それは、記憶が蘇えったのとは違っていた。自分の中に沸き起こる「懐かしい」と言う感情から彼女が推測したに過ぎないのだ。

大きな駐車場を横切って、プレハブ小屋のドアを開ける。

「あら、いらっしゃい」

カウンターで微笑む千夏の姿があった。少しの驚きと嬉しさが混濁した笑みだった。

「こんにちはあ」

真夕は、少し他人行儀に会釈をする。

「おお、マユちゃん、久しぶり」

声を掛けて来たツナギの男。

それは、真夕が初めてここへ来た時、最初に声を掛けてくれた佐々木だった。しかし、今の真夕には、ただの「ツナギの男」だった。

「少し、見学していいですか？」

真夕が千夏に訊くと

「どうぞ」と彼女は微笑んだ。

「なんなら、久しぶりに乗るかい？」

佐々木の言葉に、真夕は困惑した笑みを浮かべた。

すかさず、佐々木のわき腹を強く突く千夏の姿を見て、真夕は思わず吹き出した。

コース内は、3台のカートが走っていた。風を切って走る姿は確かに気持ち良さそうだが、特に乗ってみたいとは思わない。

焼けたオイルとコンパウンドの匂いが、辺りに漂っていた。

彼女は得体の知れない懐かしさだけが込み上げて来て、目の奥が熱くなるのを感じた。

「ねえ、今晚暇だったら、一緒にご飯でも食べない？」

千夏が声を掛けて来た。

「ご飯ですか？」

真夕は慌てて下の瞼に溜まった雫を拭った。

「ええ、退院祝いにおごるわよ」

千夏の笑顔につられた真夕は「はい」と応えた。

「あ、いいね。飯」

佐々木が後ろで声を上げたが

「ダメ。今日は女同士なの」

千夏は笑ってそう言った。

その様子を見て、真夕も声を出して笑った。

【7】涙の理由（わけ）

「あたし、チカさんとはよく一緒に食事とかしたんですか？」

その日の夜、国道沿いのステーキレストランに真夕と千夏の二人は入った。ファミレスでは味気ないからと、千夏が選んだ店だった。店員が可愛いチロリアン風のドレスを着てオーダーを取りに来た。

千夏はひと通りオーダーを済ますと

「ええ、かなり頻繁に」と、言って笑った。

彼女は、和弥から電話を受けた時、和弥と小夜子は真夕のG I Dの事は、本人が思い出すまであえて言わない事にしたと聞かされた。母親にしてみれば、G I Dで苦しむ我が子が正常な娘になったのだから無理も無い。

千夏にしてみても、未来が決して安泰ではない真夕との恋愛には、潮時だったのだと思うようになっていた。いや、無理やりそう思うようにしたのだ。

だから、これからは再び女同士。もともとそこから始まったのだから、大丈夫。

彼女は真夕の意識がなかなか戻らなかった時、もう元気な真夕には会えないかもしれないとさえ思った。もう、あの弾けるような笑い声も聞けないのではないかと思った。

その時の恐怖と張り裂けそうな胸の苦しみに比べれば、今はこうして再び真夕の笑顔を間近で見たいられる。

これからも、変わらずに彼女の元気な姿を見ていられる。

千夏は自分の心にそう言い聞かせるのだった。

真夕は、千夏が笑顔のまま俯いた時、テーブルに雫が零れ落ちるのを見た。

「ごめんなさい、ちょっとコンタクトが……」

千夏は席を立て、化粧室へ駆け込んだ。

真夕は、訳がわからず、ただそれを目で追うことしか出来なかった。

稲刈りの終えた田んぼは何も無い。その広大で遮るものが何も無い地面を、這うような北風が何処までも吹き荒ぶ。

畦道や歩道の端に茂った枯れ葉色の雑草は、バサバサと音をたてながら大きく折れ曲がるほどに靡いていた。

その風向きに逆らって、真夕は自転車を走らせていた。

中学の頃は徒歩通学だったので、稲刈り後の田んぼを、よく対角線状にショートカットして行ったものだが、自転車ではそう言うわけにもいかない。

何時もは学校まで約20分。しかし、田んぼを吹き抜ける向い風が邪魔をして、今日はなかなか前に進まなかった。視界の隅に何かが飛んできたので、真夕は慌てて身を屈めたが、白いコンビニ袋が風で舞って来ただけだった。

「ムギー！ムカツク。何よこの風、あたしの登校を妨害する気」

風圧で頬が歪み、もはや、強風で捲くれるスカートを気にする余裕もない。

前方には、同じく風に逆らって必死で自転車を走らせる同じ学校の生徒の姿が数人見えた。

真夕はムキになって、ギヤをあげた。

「やってやろうじゃないの」

教室に入った真夕はくたくただった。髪の毛はもしやくしゃで、ブラシがなかなか通らずに、梳かすのにも苦労した。

見かねた加奈がブラッシングを手伝ってくれた。

加奈が通学する方向は追い風で、しかも風の影響を受け難い建物が建ち並ぶ国道側から来る。だから、教室に入って来た真夕の異常

に乱れた身形を見て、ケラケラと笑っていた。

「あいたたたた…加奈引っ張りすぎ」

「あ、ごめん。あんまり頑固に絡んでるから」

加奈は笑いながら「枝毛増えちゃうね」

1限目はお陰で上の空。

しかし、理由は他にもあった。

この前の千夏の涙は、あれはなんだろう。あたしと千夏の間には
いったい何があったのか……

真夕にはまったく検討がつかなかった。

放課後、和弥を捕まえた。休み時間に千夏の事を聞いてみたが、
知らないの一点張り。

何年付き合ってると思ってるの？アイツ、絶対何か知ってる。

真夕はそう確信していた。

「ねえ、和弥。あたし、記憶を無くす前って、今と違ってた？」

男っぽさが全く無くなった真夕に、和弥自身戸惑っていたのは事
実だ。女性ホルモンに支配されたような、その奥底から湧き出るよ
な女らしさ。

何年付き合ってると思ってるんだ…… 今更本当の女になりやがっ
て。

和弥の言い分もあったが、それを口に出すわけにもいかない。

「いや、そんなに違いは無いと思うけど」

「うそだ。和弥、何か隠してる。チカさんの事だって変だよ」

「どうしたんだよ、急に。チカさんとどうかしたのか？」

「それがさあ……」

真夕は千夏と夕食を一緒に食べに行った時のことを話して聞かせ
た。

和弥は何も言葉が出なかった。

彼女と真夕がどんな付き合い方していたのか、正直和弥は知ら
ない。しかし、少なくとも一般的な男女で在るかのような関係では
あったはずだ。

真夕の心が女性になったからと言って、そう簡単に割り切れるものではないだろう。

何と言っても、外観が以前とはまったく変わり無く、そのままなのだから。

「マユ……」

和弥は迷った。迷った挙句

「チカさんの事は俺にも判らない。俺は殆どカート場にも出入りしてないし……」

和弥は真夕の目を見て「お前は、お前だよ」

「本当に？」

「ああ」

和弥は何とか笑顔を作って「俺、部活行かなくちゃ」

「引き止めてごめん」

和弥は笑って手を上げると「そんなのいいって」

真夕にはわかっていた。何かある。しかし、和弥の苦悩する笑顔が不憫で、それ以上追求する事を止めたのだ。

何か違う方向から探って行こう。真夕はそう思ったのだ。

【8】ラブレター

真夕が昇降口へ廊下を歩いて来た時、一人の男子生徒が辺りを奇妙に覗いながら、靴箱を開けているのが見えた。

男の子がいる場所は、妙に自分に馴染みのある場所だった。それもそのはず、どう見ても自分の靴を入れている場所だと真夕は気付いた。

男の子は何かを靴箱に入れると、そそくさと外へ出て行った為、真夕は訳が判らず呼び止める事が出来なかった。

何?…何なの

男の子の姿が完全に見えなくなってから、真夕は恐々と、自分の靴箱の扉に手をかけた。そして靴箱を開けて、彼女は驚いた。

「よっ、刑部」

真夕は後ろから声を掛けられて再び驚いて、危なく飛び上がるところだった。

「なんだ、橘か… ビックリさせないで」

真夕が慌てて靴箱の扉を閉めて振り返ると、橘圭吾が立っていた。「今帰り?」

「うん。橘は?」

「これから、ランニングさ」

橘は陸上部に所属して、800メートルと言う、イマイちマイナーな種目を得意としている。

真夕は、橘の事は覚えている。しかし、あくまでもクラスメイトの一人として覚えているだけで、彼の自転車の後ろに乗った事は覚えていない。

橘は、それを真夕が覚えているか、忘れているかは問題ではなかった。

自転車の後ろに乗せて、彼女の手が自分の肩にかかった感触は忘れられない。揺らめく髪の毛から近距離で漂うムースの香りが忘れ

られなかった。

ただそれだけの事なのに、普段あまり女の子と接触しない彼にとって、真夕はとても近い距離に感じていた。

「大丈夫？ 顔色悪いけど……」

「えっ？ ああ、うん。平気。何でも無いよ」

真夕は少し不自然なくらいに笑みを返して「部活、頑張ってね」

彼が外へ出て行くのを見送って、真夕は再び自分の靴箱を開けた。見間違いではなかった……

そこには手紙がひとつ入っていたのだ。

それが、果たし状では無い事くらい、彼女にも見て直ぐにわかった。

『 刑部真夕さま

僕は、入学した時からあなたが好きでした。

入院中はとても心配で、無事退院してとても嬉しく思います。

最近ますます魅力的になってゆくあなたを見て、どうしてもこの思いを伝えたくなったのです。

年下の男は嫌いですか？

僕はいつも真夕さんを見ています。

近藤 淳 』

それは、白地にニューヨークの摩天楼が印刷された封筒に入った、水色の便せんに、まあ綺麗とはいえないが丁寧に書いた文字で綴られていて、ちゃんと下にはもう一枚の便せんが添えられていた。

手紙などあまりやり取りした事が無い真夕だったが、一枚綴りの手紙でも、便せんを2枚入れるのがエチケットだと何かで聞いた事がある。

真夕はその短い手紙を読んで、思わず深い溜息をついた。

「そう言われてもネエ……」

机に頬杖をついて、手紙を眺めた。

そう言えば、昔もこんなものを貰った記憶がある。

何時だったかしら……

真夕は中学2年の時に、初めてラブレターを貰い、その後も何度かそう言った手紙を貰った事がある。しかし、その時の真夕はもろん心が男性の性自認をしていたわけで、困るというよりも寧ろ嫌悪の気持ちに似ていた。それでも、通常の女生徒を演じていた真夕は、それを一切口に出す事は出来なかった。

今の真夕にしてみれば、そんな物凄く困った記憶はあるが、それが何時だったのか、うまく思い出せなかった。

真夕は、庭先に母親の車の音が聞こえて来たので、部屋を出て階段を降りて行った。

【9】下級生と上級生

翌日、真夕はなんだか一日中そわそわしていた。

昨日の手紙の男の子が、気にならないわけが無い。といっても、決してそれを喜んでいるわけでは無い。

年下と言う事は、1年生だろう。まったく交流のない1年生に、一方的に手紙をよこされても、何となく対応に困ってしまうのだ。いきなり目の前に現れて「手紙の返事を聞かせてくれ」とか言われるんじゃないかと思うと、何だか学校の何処にいても落ち着かなかった。

「いつも見ています」と、言われても、なんと返せばいいのか。

「あんまり見ないで」と言うのも変だし「どうぞ…」と言うのもなんだかふてぶてしい。

だいたい彼はどういう人なのかも知らない。これを機にストーキングに走られるとも限らない。

真夕は昇降口や校庭に彼の姿を探した。先に見つければ、さりげなく遠ざかって回避できると思ったからだ。

しかし、そんな時に限って、見つからないものだ。こうして自分が彼の姿を探している間にも、もしかしたら彼は自分を何処かで見ているのかもしれない。そう思うと尚更落ち着かず、友達と話しているもどこか上の空だった。

（もう…… 何だか、物凄くどうでもいいような余計な悩み……）

そんな事ばかり考えているうちに、一日が過ぎて行った。

放課後、真夕は昇降口の近くで、部活に向かう加奈と別れた。

少しの間教室でおしゃべりなんかをしていると、バタバタと部活に向かう者、帰宅する者たちの雑踏は消え、廊下は閑散としていた。

「刑部さん」

真夕は後ろから声を掛けられてドキリとした。

き、来た…… 彼かしら……

しかし、彼女がゆっくり振り返ってみると、そこには全然別の男が立っていた。

「刑部真夕さん、だよね」

何処かで見覚えのある男。誰だっけ……

「俺、影山巧ってんだ」

彼女は思い出した。和弥と同じサッカー部の先輩だ。しかも、確かキャプテン。

「サッカー部の？」

「ああ。俺の事、知ってた？」

長髪の多いサッカー部の中で、スポーツ刈りがよく似合う長身の彼は、一部の女子に絶大な人気があった。

真夕も噂には聞いていたし、和弥の練習を見たときに、彼がグラウンドの中で、みんなに指示を飛ばしている姿を見た記憶がある。

「えっ、ええ。和弥の先輩ですよ」

彼は、そう言われて、はにかんだ苦笑いを浮かべると「三浦伝いか……」

「な、何か、あたしに？」

「あっ、ああ。この前は、入院して大変だったね」

彼もまた、真夕が入院した時、和弥に経緯を根掘り葉掘り聞いた者の一人だった。

しかし真夕は、面式の無い彼からそう言われて、なんだか変な気持ちだった。

「あ…… はあ」

だから、妙に気の抜けた返事しか出来なかった。

「もう、帰り？」

「えっ？そうですけど」

いったいこの人は、何を目的で自分に声を掛けて来たのか、真夕には判らなかった。

あたしに何か、頼み事？和弥の事だろうか……

真夕は、怪訝な思いができるだけ顔に出ないように、彼を見つめ

た。

「3年は、もう部活が無くてさ」

「ああ、残念でしたね」

冬の高校サッカー大会の選抜試合で、和弥たちは準決勝まで上り詰めたが、ついこの前敗退してしまったのだ。3年生は、それで部活を終える事になる。

しかし、彼はそんな事をあたしに言っ、何の意味があるのだろう…… 真夕は正直そう思った。

影山は、モジモジと頭をかいて見せて

「夢中なってたものが終わって、なんだか気が抜けちゃってさ。それで、以前から気になってた事に打ち込んでみようかと思うんだけど…… どう思う？」

それは、さっそうとグラウンドを駆ける彼とは、かけ離れた仕草だった。

どう思うと聞かれても、真夕にも答えようがなかった。

だから、どうしてそんな事をいちいちあたしに訊くのよ……

「はあ…… いいんじゃないでしょうか」

真夕は、何だか判らないがそう言っ、笑って見せると「夢中になるって、素敵ですよ」

「そう思うかい？」

影山の瞳が微かに輝きを取り戻した。

「えっ？…… ええ」

「じゃあ、一緒に帰ろうか」

「はあ？」

真夕は、何だかおちよくられているような気持ちで、背の高い彼を見上げた。

「いや…… だから、以前から気なってるってのは…… つまり、キミの事で……」

【10】高鳴り

真夕は何だか、日に日に悩みが増していくような気がしていた。それは、困惑と言う文字で埋もれた泥沼に、自分の身体がずぶずぶと落ちていくような気持ちだ。

「いったい、どうなってるの……」

影山巧。彼は、突然真夕の前に現れて、彼女に交際を申し込んできた。

それは、近藤淳の手紙の比ではない。ハッキリと口頭で申し出されたのだから。

「あ、あの…… 大学受験とか控えてこれから大変なんじゃ」

真夕は勉強の邪魔になる事を理由に断ろうとした。しかし

「ああ、俺、推薦が決まってるんだ。気楽なもんだろ」

だ、だめだ……

告白の後の影山は、何かが吹っ切れたのかやたらと明るくて、爽やかな笑顔を真夕に向け続けた。

「三浦とは、幼なじみなんだって？」

「ええ、まあ」

「でも、アイツには朋子ちゃんがいる」

真夕は影山の顔を見上げた。

「少しだけリサーチさせてもらったよ。ま、朋子ちゃんは、何時も練習や試合を見に来るしね」

影山は終始穏やかに、明るい声でハキハキと話す人だった。

笑うと目は途端に細くなって目尻に細いシワができ、左頬には小さなえくぼがでる。

真夕は彼の笑顔と会話を交わしてみて、何となく人気の理由が判ったような気がした。

正門を出て、最初の交差点まで彼と自転車を押しながら並んで歩いた。

真夕は何だか無性に心臓がドキドキしていた。誰かと一緒にいる事でこんなに胸が高鳴るのは初めてだった。

ただ並んで歩いているだけなのに、どうしてこんなに胸が高鳴るのか、真夕は焦りにも似た不思議な感覚で、手には薄っすらと汗をかいていた。

「マウンテンバイク……」

彼が、唐突に言った。

「えっ？」

「いや、スカートで乗り辛くないのかなって思って」

「でも、スピード出るし、坂道もラクだから」

影山の問いに、真夕は笑って応えた。

「三浦を見失わない為かと思った……」

「えっ？」

一瞬その意味は、彼女には判らなかった。

「いや、冗談だよ」

影山はそう言って、笑っていた。

「あの…… さっきの事、しばらく考えてもいいですか」

仕方なく、返事を待ってもらうことにして、彼女は彼と別れた。

「じゃあね」

そう言って、以前からの友達みたいに手を振って走り去る影山の姿を、真夕は少しの間眺めていた。

「もう…… どうすればいいの。こんな事が知れたら、きっと親衛隊に殺されるわ……」

真夕は、何だか無性に息苦しさを感じると同時に、並んで歩いただけで胸が高鳴る思いを初めて経験した余韻が、一度引いた波のように何度も押し寄せるのだった。

その夜、真夕の携帯電話が鳴った。
液晶表示は和弥だった。

「今日、影山先輩が行かなかった？」

「和弥知ってたの？」

「いや、今日部活に顔を出した先輩がさ、ちらっとそんな話をして
いたんだ」

和弥は、少しの間を開けて真夕の反応を探ると「来たのか」

「帰りに昇降口で捕まった」

「何だって？」

「それが……」

真夕は少し迷っていたが、他に相談できる相手はいそうもない。
大まかな経緯だけを話した。

「どおりでな」

「なによ、どおりで。って」

「俺、影山先輩に随分とお前の事訊かれたよ」

和弥は、以前から真夕の事を、影山に訊かれていたと言う。和弥
も、あまり適当な事は言えないから、それなりに真夕の事を話して
いた。勿論、入院の時の経緯も含めて。

そもそも和弥は他の部員に比べても、1年の頃から影山に可愛が
られていた。

真夕は再び大きな溜息を漏らした。

「そんな嫌なのか」

和弥が小さく笑いながら言った。

「嫌って言うのとは違うけど……」

「影山先輩って、スゲー人気あるんだぜ」

「だから、困るのよ」

真夕は、まるで人事として楽しんでいる様子の和弥に、少し口を
尖らせ

「それに、どんな人かも知らないのに、付き合うだなんて」

「影山先輩は、いい人だよ」

「人事だと思っ」

しかし、電話を握る和弥の心情は穏やかではなかった。心の中を押し殺して、それを真夕に悟られないように、必死で芝居をした。直接あ会ってこんな話を話せば、必ずボロがでる。動揺が隠し切れないだろうと思った。

だから、翌日の学校ではなく、電話をかけたのだ。

影山は、真面目に考えていい人だ。それが、和弥には怖かった。運動神経、学力、ボキャブラリーのどれをとっても自分に勝ち目がないような気がした。

和弥とて、運動神経や学力には多少の自信がある。校内でも男として人気のある方だ。

しかし、高校へ入り今のサッカー部に入った時、影山の存在を知り上には上があるものだと思い知らされたのだ。

影山巧が高校へ入学した年、サッカー部は問題を起こして2年間の休部からようやく復帰したばかりだった。

それを挽回するかのよう、彼らの代である部員たちは、普通以上に頑張ったらしい。他の部に入った友人には、上級生がいなくて羨ましいとからかわれた。しかし、学校側や父兄のサッカー部を見る目は、常に風当たりの強いものだった。

影山は学年で10番以内の成績を維持し続けた。それに引っ張られるかのように、他の部員も無茶な事はせず、タバコすら吸う者はいなかった。そして、サッカー部イコール厄介者の集まり。と言う図式が次第に崩れたのだと言う。

もしも、影山の人柄に真夕が引かれたら……キャプテンを勤め上げた彼に、包容力と男気ではとうてい勝てないだろうと、和弥は思った。

男の性自認をしていた真夕が女性と付き合いだした時は、素直に喜び、僅かながら応援する気持ちもあった。それは、あくまで真夕が男として誰かと付き合っていたからなのだ。

彼女の性自認が女性になった時に和弥が感じた不安の中には、お

そらく今の状況も含まれていたのだ。それは、女性である真夕が他の男と自分以上の関係を持つ怖さなのだ。

そして、今の自分にそんな嫉妬めいた感情を彼女に持つ資格が無い事も充分に判っている。

和弥は朋子と付き合っている自分が、まるで鎖で繋がれた飼犬のようで、とてつもない不自由さを感じた。

「で、どうするか決めたの？」

和弥が言った。

「そんなの判んないよ…… とりあえず、考えさせて。って言った」
真夕の言葉に、和弥はホッと息をつきたかったが、その感情が表に出ないように

「ま、ゆっくり考えるんだな」

【11】二人の距離

「よう！」

と、真夕は背中をポンツと叩かれた。

昼休みの学食に、加奈と晴香と連れ立って飲み物を買いに来ていたのだ。

この時間の学食は物凄い混み様で、一年生のうちはまず来る事はできない。上級生を掻き分けて欲しいものを手にする勇気があれば別だが、ほとんどは2年生になってから来るのがここの仕来りなのだ。

影山は、飛び上がるほど驚いた真夕に声を掛けると、混み合う入り口付近をすり抜けて、食券の自販機へと歩いて行った。

「あれ、影山先輩じゃん。真夕、何時から仲良くなったの？」

加奈が、目をパチパチと丸くさせながら言った。

「そんな……仲良しなわけじゃないよ」

「そうだよ。なんかさ、前に1年生の誰かが彼にコクったらしいけど、その娘、その後入院したんだって」

晴香が言った。

「どう言うこと？」加奈が訊いた。

「先輩の女子にシメられたらしいよ」

晴香の言葉に、真夕はぞっとして、てんぷら蕎麦をすすする影山の姿を遠くから盗み見た。

「ねえ、土曜日空いてる？」

その日の帰り、昇降口で真夕は再び影山に声をかけられた。

「いや……あの……」

「いや、別に空いてなきゃいいんだけど。映画でもどうかと思ってさ」

影山は無邪気な笑みを向けて言った。

この人、B型かしら…… 真夕はそんな事を思いながら

「あのう…… あたし、まだお付き合いするとは言ってませんよね……」

「でも、映画くらいなら、いいだろ。お互いに知り合えるし」

影山の笑顔は一向に消える様子は無かった。

「でも……」

真夕は少し遠慮気味に「前に、告白した娘が、先輩たちに怪我させられて入院したって」

それを聞いた影山は、途端に大きな声を上げて笑った。

「ああ、ごめんごめん。そんな噂、信じてる人がいるなんて」

彼は、笑いを呑み込むようにして

「そんな事、実際にあるわけないだろう。部活の最中に友達が冗談で後輩に言った事だよ」

「ただの噂なんですか？」

「ああ。確かに俺の所に来た直後に入院した娘はいるけど、彼女は盲腸で入院したんだよ」

真夕は、呆気にとられて影山を見つめていたが

「じゃあ、彼女とはどうして付き合っていないんですか？」

影山は、後頭部をボリボリとかきながら

「彼女、病院で中学時代のクラスメイトかなんかと再会して、そっちと付き合ってるのさ」

彼は、そう言って笑うと「俺だって、言われるほどモテないぜ」

真夕は、なんだか拍子抜けした気分になった。

「それで、デートの約束したんだ」

和弥が電話越しに言った。

「デートじゃないよ。ただの映画」

「ふううん」

「何よ」

「別に」

そう、真夕は、影山の誘いを結局断りきれなかった。

映画ぐらい……　そう言われてみれば、和弥とだって買い物や映画にも行く。

だから、それぐらいならいいかな。と、思ったのだ。

でも……　付き合うって、どう言う事なんだろう。

真夕は、和弥との電話を切ってから、ベッドにひっくり返ったまま何となくそんな事を、今更ながらにマジマジと考えてみた。

彼氏と彼女と呼び合うのは、ただ付き合うという宣言をしているか、していないかだけなのだろうか。

影山はいい人だ。それは、何度か話をして真夕も感じた。

でも、どうして付き合う気になれないのだろうか。もっと、彼を知れば、違う感情が沸き起こるのだろうか。

和弥は朋子と付き合っている。

でも、もしあたしも誰かと付き合ったら、和弥とはもう気軽に二人では会えないような気がする。

きっと、今の距離ではいられないような気がする。

それが怖いのか？

あたしは、和弥との距離が離れるのが怖いのだろうか……

『三浦を見失わない為かと思った……』

ふと真夕は、影山が冗談と言った、あの言葉を思い出していた。

和弥と距離が離れないように、何時でも一緒に走れるように、あたしはマウンテンバイクを買ったのかな……

真夕は、カーテンの隙間から細く見えるガラス越しの暗闇に目を止めた。

あの真っ黒な細いスジの向こうには、ここからは見えない闇が、ずっとずっと何処までも広がっている。自分の心の隙間の向こうにも、そんなふうに広い闇が荒涼として存在するのだろうか。

真夕は、無くした記憶が急に恋しくなった。

【12】Female to Male

その身体は俺のモノだ。

「だれ？」

俺は刑部真夕さ。

「うそ。真夕はあたしよ」

もともとは、俺の身体だったんだ。

「意味が判らないわ。だって、あたしは女よ」

それでも、その身体は俺の身体だった。

「うそよ。そんなはずないわ。あたしは生まれた時から真夕よ」

じゃあ、どうして私服にスカートがひとつもないんだ

「それは…… そんな、あるわ。ジーパンが好きなだけ。動き易いじゃない」

ふっ、それはどうかな……

真夕はほの暗い薄明かりの中で目を開けた。暑いわけでもないのに身体中に寝汗をかいていた。

朝の光がカーテンを僅かに通り抜けて部屋の中を照らしていた。少しの間頭の中がもうろうとして、天上を見つめていた真夕は、突然ベッドから起き上がるとクローゼットを開けて身体を突っ込んだ。

カーハートのカバーオール・オシコシのペインターパンツ・アルファのカーゴパンツ・リーバイスやリーのデニムがゴロゴロと出て来る。

ハンギングの洋服を掻き分け、普段は開けない一番下の引き出しまで確認する。

「あるじゃない。スカートだってちゃんとある」

それは、以前長岡が買ってくれたスカートやワンピースだった。一度も着ていない真ツサラなスカートたちを、真夕はひとつひとつ

つ、着てみるのだった。

「はい、ドンドン食べてね」

その夜は、和弥が真夕の家に来て夕食を共にしていた。

和弥の父親が会社で怪我をして入院し、母親が病院に付き添っているのだ。

「悪いな、俺は別にコンビニ弁当でいいって言ったんだけど」

和弥がカレーを頬張って言った。

「いいじゃない。たまにはこうして一緒に食べるのもさ」

和弥は真夕が昔のようにパクパクと食事をする様子を見ていた。

「何？じつと見ちゃって」

「いや、別に…… 私服のスカートなんて持ってたんだね」

「えっ、うん。あたりまえじゃん」

「そうだな……」

和弥はそう言って笑うと、再び自分のカレーを頬張り始めた。

「じゃあ、ご馳走様」

「もう帰っちゃうの？」

コーヒーを飲み終えて、立ち上がる和弥に真夕が言った。

真夕は、久しぶりに家に来た和弥が、少しだけ名残惜しかった。

「ああ、今模型の戦艦を造ってるんだ」

「へえ、凄いいじゃん。ねえ、じゃあ見に行ってもいい？」

「えっ？いい、いいけど……」

和弥は本当の事を言うと、彼女と離れたかった。

日に日に真夕への思いが募って、自分の中で膨れ上がるのだ。影山が真夕に接近を始めてからと言うものの、なおさら焦りにも似た感情が沸き起こる。

それでも彼女の顔は見たいから、会わないようにしようとは思わない。真夕の顔をみると、まだ誰のものでもない彼女に、自分勝手にホッとするのだ。

ただ、危険信号が自分の中で発すると、できるだけ距離を置いて気持ちをクールダウンさせる。そうでもしなければ、気持ちが先走りして、自分が再び真夕に対して取り返しのつかない事をしてしまいそうで怖かった。

中学時代の、今よりももっと早熟だった彼女の身体の感触は、今でも和弥の記憶に残って消えないのだ。

彼にとって、今の刑部真夕の存在は、あまりにも近いのかも知れない。

真夕が、完全な女性になってしまった時、和弥との友情で仕切られた強固でかつ曖昧な壁は無くなってしまった。

それは、どうやっても届かなかった、異性としての親密さを可能にする距離なのだ。

「ちょっと待ってて、上着取ってくる」

真夕が階段を跳ねるように上がっていく姿を見て、和弥は頬を紅潮させた。

踊るミニスカートの陰からパンツが一瞬見えただけで、今更心臓が波打って、脈拍数が跳ね上がるのだった。

【13】男と女

和弥の家は、真夕の家から3軒離れて細い路地を一つ挟み、4軒目にある。距離にすると100メートル弱ほどだ。住宅街の始まる通りの前には、田んぼが広がっていて、辛うじて和弥の家の前に2軒ほどの民家が並ぶ。

その代わり、後ろには300メートル四方にわたって路地が張りめぐり、住宅が建ち並んでいるのだ。

二人が小さい頃は、真夕と和弥の家の間には1軒の家があるだけで、その周囲も含めほとんどが空き地だった。新興住宅地だったこの場所には、当時、他にはほとんど同じ年の子供が居らず、必然的に真夕と和弥は一緒に遊ぶ事が多かった。

和弥は、子供ながらに女のはずの真夕と、やたらと気が合う事を不思議に思いつながらその心地よさに何時も一緒にいることを自然に感じていた。

一度、自転車に乗って駅まで行った事がある。小学校2年生の二人にはかなりの冒険の距離だった。当時はまだ寂れた無人駅で、単線の為に昔使ったのであろう古い引き込み線用の線路がホームの反対側にあった。

勿論、本来は立ち入り禁止なのだが、注意を促す者などだれもない。しかも、既に使用されていない引込み線なのだから、その線路上には絶対に電車は進入して来ない。

子供は何故か線路が好きだ。電車だけが走れるその場所は、本来立ち入る事の出来ない禁断の聖域に感じるのだろう。

真夕と和弥はしばらく引き込み線で遊んでいたが、その間に何か通る電車を見ているうちに、本線に魅了されてしまう。

これが、子供の好奇心の恐ろしい所だ。

二人はホームの一番先端から回って本線に足を踏み入れた。そして、反対側の端まで歩いてみようと言う事になって、真夕と和弥は

枕木から枕木へ飛び移るようにして歩いた。

禁断の地を歩く優越感で、二人の気持ちは高揚していた。

ちょうど、駅のホームの中ほどまで来た時、駅に一番近い踏み切りが突然鳴りだした。

二人はその音を聞いた瞬間、身体が硬直した。その音が何を意味するのか一瞬で理解した二人はとてつもない恐怖に襲われたのだ。

小学2年生の二人に、ホームによじ登る身長は無かった。

林で覆われた正面の緩いカーブから、電車の姿が見えた。

やばい、やばい、やばい、やばい、やばい…… 和弥の思考は止め処なく回転していた。

真夕は前後、どちらに走れば間に合うか迷っていた。しかし、もう、どちらに走っても間に合う距離ではなかった。快速急行の電車のスピードがあまりにも速かったからだ。

物凄い音の警笛が、青空を切り裂くほどに鳴り響いた。

走っても間に合わない…… 和弥は真夕の身体を抱えて、ホームの小さな窪みに転がり込んだ。補線工事などの作業員が緊急退避する為のくぼみだった。

電車が通過する瞬間、物凄い振動で地面が揺れ、大気が震えて風圧を浴びた。和弥は自分の小さな身体で、真夕の身体を包み込んでそれを遮った。

電車が過ぎ去った時、世界は静寂に包まれていた。全てが無音で、何の音も聞こえない。

真夕と和弥は、その静寂の中、恐怖で引き攣った顔のままお互いを見つめると、大声で笑った。命の危機に直面してそれを乗り切った事で緊張が一気に緩むと、何故か異常に笑いが込み上げて来たのだ。

それが、和弥が初めて真夕の全てを抱きしめた日だった。

「バカ、それはまだ触っちゃだめだよ」

「えっ、ごめん」

模型と言えども船体だけでも60センチはある戦艦武蔵。甲板部分は前方部、艦橋部、後方部と3分割になっていて、その前方甲板部分に付いていた主砲がポロリと落ちて床の上に転がった。

真夕は和弥の部屋で彼の横に座り様子を眺めていたが、持前の好奇心が沸き起こり彼が次の作業に入った隙に、組上げたばかりの部品について手を出してしまったのだ。

「昔、一緒にガンプラ造ったとは思えないよ」

和弥が思わず肩をすくめて笑うと、取れた主砲の部品を戦艦の甲板に付け直す。

「そう言えば、昔はよく一緒に造ったよね」

真夕は和弥の仕草を眺めると、自分の曖昧な記憶を引き出しながら、そう言って笑った。

「何か久しぶりに来たなあ、和弥の部屋」

彼女は床から立ち上がってベッドの上に腰をおろすと、後に手を着いて身体を仰け反るようにして部屋を見渡した。

男臭いその部屋が、なんだかとても懐かしく感じた。実際真夕は、高校へ入ってから彼の部屋にはほとんど来ていない。

作業の手を止めて、ふと顔を上げた和弥は

「ま、マユ。もう少しそっちに座ったら？」

「へ？なんで？」

真夕は首だけ起こして、和弥を見た。

彼のチラリと見た視線は、真夕の座っている高さそのものだったのだ。

和弥の泳いだ視線は、彼女の下半身を横切った。

それに気が付いた真夕は、ベッドの縁から浮いた太腿を慌てて閉じると、恥ずかしそうに

「見えた？」

「ちよっとな」

2人は一緒になって、頬を赤く染め、そして同時に笑った。

なんだ、何なんだ。これじゃあ、完全に普通の男女の仲だ。しかも、そこにいる自分がやたらと初々しくて、そんな俺自身に赤面してしまう……

和弥は、自分がずっと望んでいたかも知れない状況にいざ立たされると、例えようの無い不安と戸惑いを感じて、まるで中学生のように鼓動が高鳴るのだった。

それは、あまりにも純粋な真夕に自分の心が同調するからだ、彼は知っている。

彼女の朗らかな性格が、和弥の心を浄化するのだ。

もう真夕の中には男の欠片も存在しないのか…… この笑顔の瞳に宿る魂が、一瞬、一瞬の仕草全てが17歳の女の子そのものののだ。

和弥は笑顔の中で、それが表に出ないように再び困惑していた。

【14】予兆

「うう…」

「どうしたの？加奈」

朝教室へ入ると、加奈が自分の席で唸り声を上げているのを見て、真夕が声をかけた。

「加奈、今日旗日でさ」

スグ横にいた晴香が言った。

加奈はお腹を抱えて弱々しく「今日、しんどいんだよね」

「薬は？」

「今朝飲んだんだけど、あたし効かないのよ」

「あたしのあげようか？」

真夕はそう言いながら、加奈に近寄って、妙な臭いに気がついた。

「加奈…：薬って、何飲んだ？」

真夕は、嗅いだ覚えのある微かな臭いに怪訝そうに尋ねた。

「えっ、お腹痛の薬だよ」

「まさか、それって…：」

「正露丸」と、加奈が言った。

真夕と一緒に、横にいた晴香も思わず口を開けた。

「あんた…：生理痛に正露丸は効かないんじゃない…：」

晴香が言った。

「ええっ、だって、お腹痛には正露丸でしょ」

加奈は当り前のように言う。

それを聞いた真夕と晴香は、一瞬言葉が出なかった。

「ねえ、もしかしていつも正露丸を飲んでたわけ？」

「うん…」

加奈は相変わらず苦しい表情で、それでも平然と頷いた。

「あのねえ、加奈。同じお腹痛でも、原因が全然違うから、正露丸じゃ生理痛は止まらないんだよ」

「ええええっ？じゃあ、何を飲むの？」

「普通は頭痛薬でしょ」

「お腹痛いのに頭痛薬飲むの？」

真夕の言葉に、加奈は目を丸くしている。どうやら本気で驚いているらしい……

隣で晴香が大きいため息をついて、思わず笑いながら

「バカねえ。頭痛薬って言うけど、鎮痛剤なのよ。正露丸は整腸剤なの。だから、生理痛はお腹をこわして痛いわけじゃないんだから、鎮痛剤を飲むのよ」

「だってあたし、お腹が下る時もあるよ」

「それは……」

晴香が言葉に詰まった。

「それは、体調を崩してるからで、痛いのは鎮痛剤で止めるの」

晴香に代わって真夕がそう言いながら「ほら」

と、自分のポーチから鎮痛剤を差し出した。

加奈はポカンと口をあけてそれを眺めていたが、やがて薬を手にとると、いそいそと洗面所へ向かった。

30分もすると、加奈はケロリとして、次の休み時間には

「勉強になっちゃった」と、笑っていた。

真夕と晴香は、顔を見合わせてほのぼのと笑った。

秋の澄んだ空に夕映えが広がり、連なるウロコ雲が焼けるように茜かった。紅い陽光が沈みきると、辺りは一時の夕間暮れに包まれて周囲で動く人影はみんな黒い塊になる。

「ねえ、今日あたしん家に来ない？」

部活が終わった金曜日の夕方、朋子に誘われるまま、和弥は彼女の家にいた。庭には青い芝が敷かれ、家の壁は地中海の建物のように白かった。

日が暮れると、あちこちに小さな光が灯って植木や壁面をライトアップする。

「日曜まで両親は旅行なんだ」

朋子はそう言いながら、あどけない笑顔で和弥に紅茶を出すと

「ちょっと、着替えてくる」

そう言って、和弥をリビングに残したまま、部屋を出て行った。

和弥が朋子の家に来たのは、何度目かになるが、ここへ入るのは初めてだった。

彼はよその家のリビングに一人取り残され、あまり居心地がよいとは感じなくて、深く沈む革張りのソファに腰掛けたまま、やたらと大きな液晶テレビの横に置かれたブロンズ像をなんとなく眺めていた。

朋子は淡いブルーのミニスカートの白いモールのセーターに着替えてリビングに戻ると

「なんか、リビングに一緒にいると夫婦みたいだね」

そう言って、和弥の横に腰を沈めて、わざと身体を触れさせた。

朋子は、和弥が最近少しずつ自分と距離を置きたがっている事に気付いていた。だから、余計に積極的になってしまうのだ。

抱き合ったのは一度きりではない。何度も身体を寄せ合い、彼女が彼の身体に触れることは全く自然な事だった。

「こんな所じゃ、まずいだろ」

腕を掴んで身体をスリ寄せる彼女に、和弥が言った。

「あら、今日は誰も帰って来ないわよ」

「妹さんは？」

朋子には2つ歳の離れた妹がいる。

「祖母の家に泊まりに行ったわ」

そう言って、朋子は和弥の顔に唇を近づけた。

「でも、ほら。ここは、キミら家族の場所だから」

和弥はスルリと朋子から逃れるようにソファから抜け出して

「この液晶テレビでかいよなあ」

朋子は小さく肩をすくめて「液晶じゃなく、プラズマだってさ」

「ねえ、じゃあ、あたしの部屋行こう」

彼女は和弥の手を引っ張った。

朋子の部屋は壁に大きなディズニーキャラクターのジグソウパズルが飾ってあったり、ピンクのベッドカバーだったり、一見していかにも女の子らしかった。

部屋に入ると直ぐに、朋子は和弥にキスをした。しかし、彼の気持ちはここには無かった。

何処か遠い場所を見つめるような和弥の心が、朋子の身体に直接伝わってきた。それはあまりにも空虚なもので、彼女は突然大きな不安に押し潰されそうになり、それを振り払うかのように強引に和弥をベッドへ押し倒した。

押し倒された彼の身体がベッドの上で弾んで、その上に朋子は覆い被さった。

身体を繋げる事で、彼の心を繋ぎ止めたかったのだ。

「ごめん…… ちょっと、練習で疲れててさ」

和弥の優しい声に、朋子はそれ以上強引には出来なかった。それほど経験もなければ傲慢でもない。

「ううん、いいよ。あたしの方こそごめんなさい……」

そう言って起き上がったとした朋子を和弥は抱きしめた。ただ、抱きしめただけだった。それが、彼女への償いでもあるかのように、強く朋子の身体に腕を回していた。

朋子はその腕の中で、静かに、しかし確実に何かが瓦解していく予兆を感じていた。

【15】復活

「いらっしゃいませ！」

真夕は、約一ヶ月ぶりにスタンドのバイトに復帰した。

理由がハッキリしているとは言え、プライベートでの事故である。一ヶ月もの間休ませてもらえたのも、彼女の人柄のお陰と言えるだろう。

彼女がスタンドのバイトを始めたのは夏休み間近である。それ以前の記憶も沢山無くしているにも関わらず、真夕はここでアルバイトをしていた事を覚えていた。

勿論、細かな事まで全て覚えているわけではない。理子やスタンドの従業員は覚えているが、理子の彼氏の事などは覚えていない。

「でもよかった。マユが元気になって」

理子がそう言いながら、スタッドレスタイヤの発注用紙をめくった。

「もう。カートはやらないの？」

「うん。わかんない。やりたくなれば乗るかも」

「一回事故にあったら怖くならない？」

「事故の記憶は全然ないのよ」

真夕は笑って「それ以前に、カートが楽しいって記憶もどっかいっちゃって」

「そうなの……」

理子は気の毒そうに真夕を見つめた。

「でも、たいがいの事は支障ないからさ」

彼女はそう言って明るく笑うと、

「いらっしゃいませ」

と、来場した車に駆けて行った。

続いて、太い排気音と共に、赤い大型バイクが入って来た。

「秀雄」

真夕は何故かそれが秀雄のバイクだと覚えていた。
もちろん、そのタンデムシートに乗った事は覚えていない。

秀雄のバイクには理子がついた。彼はシールドを上げて隣のレーンで給油作業をする真夕に、片手を上げてみせた。

真夕の給油した車がスタンドを出て行くと、秀雄は彼女に声を掛けた。

「バイト再開したって聞いてさ」

「うん。今週から入ってる。シフトは少なめだけど」

真夕は笑って「仕事は覚えてるもんだね」

「なあ、復帰祝いに、飯でもどう？」

「えっ？」

「あれ？もしかして、俺と飯食った記憶ない？」

秀雄は困惑した顔の真夕を見て言った。

「ごめん……」

真夕は悩ましげに微笑んで「でも、いいよ。ご飯」

真夕は、以前から交流のあった人とは積極的に接した。接していると、何となくその人に関わる記憶の断片が思い出せる時があるのだ。

もともと社交的な彼女は、G I Dだった頃のコンプレックスが無い為か、より素直な人付き合いが出来た。それは、潜在的に心地よいものだった。

「バイクはだんだん寒くなって来たんじゃない？」

夜のファミレス。真夕は約束通り、秀雄と夕飯を共にしていた。

「まあね、でも寒さを堪えて乗るのもまたバイクなのさ」

秀雄は笑って言った。

「日曜日、バイクで何処か出かけないか？日中ならそんなに寒くないし」

「ごめん、日曜日は和弥と出かけるのよ」

「そっか」

「秀雄は香織と付き合ってるんでしょ？」

「うん……まあ、そうなのかな」

秀雄は少し複雑な笑みを浮かべると「和弥も朋子がいるよ」

「うん。判ってるよ」

真夕は肯いて、オレンジダーズを飲んだ。

「でも…… アイツ、朋子とは別れるかもな」

秀雄の言葉に真夕は驚いた顔を見せた。

「どうして、って顔だね」

秀雄の言葉に、真夕は彼を見つめた。

秀雄も真夕の目をしっかりと見て「判るだろう。和弥は……」

秀雄は言葉を一端呑み込んで、窓の外に視線を逸らすと

「いや…… アイツが彼女と別れたら、俺も香織とは別れるかもな」

真夕にはその意味不明な話に、怪訝な笑みを浮かべて

「どうして？」

秀雄は何処となく晴れやかに微笑んで

「アイツと俺はライバルだからさ」

真夕には何の事やら判らないままだったが、とりあえず秀雄につられて一緒に笑った。

【16】思い…

「秀ちゃん。また、真夕に会ってたでしょ」

秀雄は最近香織からの電話が時々鬱陶しくなる時がある。

真夕の事をいちいち訊かれる時がそれだ。

秀雄は頻繁に真夕の働くガソリンスタンドへ行った。もちろんその度に食事に誘い、真夕も、特に予定が無ければそれに応じた。

「別にいいだろ。スタンドにガソリン入れに行くだけだよ」

「スタンドなら他にも沢山あるでしょ」

香織の声は元々キンキンと響くので、大声を出されると、つい電話を遠ざけたくなる。

秀雄にとって、香織は確かに彼女だ。自分でもそう思っている。

しかし、真夕は、彼女は以前の手の届かない存在ではない。

見たままの、女の子なのだ。

秀雄は香織とキスをしていても、時々真夕と交わした、あの一度きりのキスを思い出すことがある。

暖かくて柔らかい唇は、リップクリームの匂いがした。

実際それは、香織の唇も同じなのだが、秀雄の中の微かな記憶と幻想が、真夕だけに特別なものを抱かせるのだ。

香織は最近、秀雄との関係に不安を抱いていた。

秀雄の真夕を見つめる視線。

そう、何かに気付いたのはあの時。病院のベッドの上にいる彼女を見る秀雄の視線の違い。真夕本人にも気付かれないように、彼女の視線が逸れた隙に仔細ずみのように、小刻みに見つめるそれは、ただの友達を見る瞳ではなかった。

香織が彼と今のように親しくなったとき、秀雄は真夕をあんな目

で見ただろうか……

確かに、バイト時代、秀雄は真夕に気があった。それは、香織も知っていた。

しかし、何が原因かは判らないが、彼は真夕に対しての思いを吹っ切ったように思えた。それなのに、まるで燻っていた火の粉が再び燃え上がったかのように、その思いは復活してしまったかに見えるのだ。

思い違いであって欲しい。

いくら心の中でそう呟いても、少し冴えた女のカンがそれを否定するのだ。微かな危険信号を心の中に灯して、針金で引っ掻いたような、鋭い疼きを胸の奥に感じるのだ。

「あたしって、意外と嫉妬深いのかな……」

香織はそう呟いて、携帯電話を折り畳んだ。

「面白かったね」

「ああ、何度も心臓が止まりそうだった」

日曜日、真夕と和弥は隣町の大きな映画館へ来ていた。

「朋子ちゃん、大丈夫？」

「アイツはホラー映画なんて観ないから」

和弥はそう言って笑った。

………

「ねえ、和弥。映画行かない？」

「はあ？このあいだ、影山先輩と行ったんだろ」

「あれは、ほら。日本の恋愛もの」

「ああ、あれかぁ。影山先輩も何考えてるんだか」

和弥が電話の向こうで軽く溜息をついたのを聞いて、真夕も思わ

ず笑いながら

「意外と面白かったけどね」

真夕はもとも洋画の方が好きなのだ。その好みは、どうやら今でも同じらしい。

「まさか、ホラー映画が観たいなんて言えなくてさ……」

「しかたねえな、付き合ってやるか」

「土曜と日曜どっちがイイ？」

「日曜日だな。部活が休みだから」

……………

「ねえ、買い物していったいい？」

「ああ、ついでだから、何でも付き合うよ」

和弥の言葉に真夕は悪戯っぽく笑って「下着売り場も？」

映画館は最近よくある造りで、大きなショッピングモールと隣接していた。

和弥は、レディースショップで衣類を物色する真夕の姿を、不思議な気持ちで見ていた。

少し前までシーンズしか履かなかった彼女が、今は私服でもスカートを履き、こうして女性用の衣類を物色しているのだ。

もしかしたら、真夕はこのまま、女性のままかもしれない。

元が女性なのだから、搔き消された男性の自認が再び蘇えらなくとも不思議ではない。

それとも、ほんとうは男性だから、何れは自然に男性の自認が蘇えるのだろうか。

彼女はどの辺りまで記憶があって、どの部分がないのだろうか。

もし、また以前のように、真夕にFtM－GIDの症状が出れば、影山のアプローチなど何の意味もなくなる。男の真夕は、絶対に影山とは付き合わないだろうから。

和弥は、時折こんな事を何度も考えては、ノートを破り捨てるよ

うに、揉み消すのだった。

真夕の記憶が戻って欲しい反面、G I Dだけは永遠に消えて欲しい。

ショッピングモールの高い天井からは、眩い照明が通路を照らしていた。

店舗の入り口で待つ和弥は、自分の姿を確認するように時々振り返って微笑む彼女を見つめて、ただ笑みを返すのだった。

2人が買い物を終えて外へ出ると、西の山並みに夕日が落ちかけて、空は山吹色に染まっていた。

【17】着信

和弥は悩んでいた。それは、真夕に対する気持ちよりも、朋子からもたらされるプレッシャーに対してだった。

彼女は知っている。

真夕が以前にも増して、女性としての魅力が増した事を。

その理由までは当然判らないはずだが、どうやら和弥と真夕の間に何かがあったと思っっているらしい。

男と女に起こる必然的な出来事。それが、真夕の魅力に磨きをかけてのだと思っっているのだ。

最近の学校では、休み時間になるたびに朋子は和弥の教室へ来る。完全に真夕との関係を疑っている。と言うより、もはや少しでも自分以外の女性と接触させまいとしているのだ。

和弥自身、真夕への思いが在る以上、朋子が勘ぐる気持ちを否定できない。

それよりも寧ろ、和弥はこの先朋子に別れを告げる際、どうしたらいいかと言う事に悩んでいるのだ。

和弥の気持ちは既に、朋子のもものではなくなっていた。

和弥の父親は未だに入院したままで、度々真夕が夕飯を作っている。

父親が入院して1週間もすると、母親も手が空くようになり食事の仕度をするようになったのだが、和弥の母親が少しでも休めるようにと、時々真夕が夕飯に招いた。

「悪いわね、マユちゃん。あなた、お料理上手だから、きっといいお嫁さんになるわね」

和弥の母親は、真夕がG I Dによって男性の性自認を持っていた

事を知らない。

母親が留守がちな真夕は、それなりに料理が出来るのは以前からだったが、まるで押し殺されていた母性本能が湧き出るように、和弥の面倒を見た。

明らかに女性ホルモンが活性化しているのだ。その証しに、胸が少しだけ大きくなって、下着を買い換えたりしている。

「和弥も大変だね」

夕食の時、真夕が言った。

「そんな事もないよ。お前こそ、俺の分まで飯作ったりするの、面倒じゃないのか？」

「どうかな？ 別に、一人分も2人分も変わらないでしょ」

真夕はそう言いながら笑って「それに、大変の意味が違ってる」「えっ？」

和弥はポカンとした顔で、真夕を見た。

「学校でさ。朋子ちゃんに完全監視されてるでしょ」

「ああ、その事か」

和弥が小さく笑って肩をすくめたその時、彼の携帯電話が鳴った。

「ほら来た」

真夕が笑うと、和弥は携帯の液晶モニターの表示を確認して

「シッ」

と、口到人差し指をあてるジェスチャーをして「もしもし」

勿論、電話の相手は朋子だ。

「もしもし、今何してたの？」

「晩飯だよ」

「お母さん、お父さんの病院に行ってるんでしょ」

「いや、もう夜は帰ってくるんだ」

「そうなんだ」

和弥が電話に応える姿を、真夕は悪戯っぽい笑顔で見つめながら、ご飯を口に運んだ。

すると、今度は真夕の携帯が鳴って、慌ててキッチンから出て行

く。

「今の音、何？」

朋子が言った。電話の向こうに真夕の携帯の着信音が聞こえたのだろう。

「ああ、お袋の携帯が鳴ったんだ。病院からかな……」

「随分今時の着メロなのね」

「お、俺が設定してるからだよ」

和弥は何とか言い逃れるのだった。

「もしもし」

「ああ、俺。今どうしてた？」

みんな同じ事を訊くのね…… 真夕は和弥に意味も無くそんな事を訊いた事がないので、何だかおかしく思った。

「今、夕食よ」

「ねえ、今度の土曜日、バイクで出かけないか？」

「香織は？」

「彼女は関係ないよ」

「そうもいかないでしょ」

「もう少し寒くなると、バイクじゃあまり出かけられないし。少しだけ、いいだろ」

「でもねえ……」

真夕は考えながら、キッチンで朋子と話す和弥をチラリと見た。

何かに笑っている。彼女が盗み見した電話越しに笑う和弥のその姿は、なんだか楽しそうに見えた。

「いいわ。ちよつとなら」

真夕は秀雄に向かってそう言った。

待ち合わせ場所と時間を決めて電話を切ると、和弥が、廊下に顔を出して

「誰から？」

「うん…… 秀雄」

真夕はそう言いながら少しだけ笑みを浮かべて、携帯を折り畳んだ。

【18】答

放課後、真夕は駐輪場から自転車を取り出して乗りかけたその時、一人の男子生徒が声を掛けて来た。

「マユ先輩」

この前、真夕の下駄箱に手紙を入れた男の子だった。

「すみません。俺……………」

「近藤アツシくん？」

言葉の詰まった男の子に、真夕は笑って言った。

「あっ、そうです。どうして俺だって」

「あたしの靴箱に手紙入れたでしょ、あの時、ちらっと見たの」

「そうなんすか」

アツシは頭をかきながらテレ笑いを浮かべた。

一つしか歳が違わないと言うのに、目をキラキラさせて笑うその姿がやけに初々しく映った。

「ごめんね。アツシくん。あたし、後輩の人とはちょっと」

「そうですよね。三浦先輩、カッコイイし」

「えっ？」

「ああ、三浦先輩は朋子と付き合ってるけど、本命はマユ先輩だって。俺らの間じゃあ密かに有名なんです」

真夕は呆気にとられてアツシを見つめた。

「だから、俺のしたことは凄い無謀な事で……でも、こうして直に話が出来ただけでも、メチャクチャ嬉しいっす」

「あ、あのね、あたしと和弥は別に……」

「それじゃあ、お邪魔しました」

アツシは自分の言いたい事だけ言うと、ぺこりと頭を下げて走って行ってしまった。

真夕はポカンとしてその姿を見送り、一人で肩をすくめた。

「マユ先輩」

またかと思い、びっくりとして振り返ると今度は朋子がいた。

「どうしたんですか？後輩に頭下げられて」

朋子は楽しそうに笑って言った。

「別に、なんでもないわ」

「あれ、ウチのクラスの近藤ですけど、何か悪さでもしたんですか？」

「ああ、朋子ちゃんと同じクラスなのね」

その時、真夕の携帯電話の着メロが鳴った。

「あ、ごめんね」

真夕は朋子にそう言って、鞆から取り出した電話にでる。

朋子はその着メロに聞き覚えがあった。

この前、和弥に電話している時に聞こえたものと同じそのメロデ
イーに。

真夕は朋子に向かって手を振ると、電話で話しながら自転車を押
して校門へ向かった。

学校の敷地内で携帯を使っているところを教師にでも見つかった
ら、うるさく言われるのだ。

朋子も笑顔で手を振ったが、その心の中は疑惑に満ちていた。

真夕がバイトをするスタンドに程近いコンビニの前で、影山は待
っていた。彼女が学校を出る時に電話を掛けて来たのは影山だった。

「悪いね、これからバイト？」

「ええ」

「俺も、バイトでもしようかな」

影山は、そう言って暖かい缶コーヒーを真夕に手渡した。

「いろんな人と知り合えて、意外と楽しいですよ」

彼は小さく笑って「キミらしいな」

二人はなんとなく行き交う車などを眺めて、少しの沈黙があった。

葉を落としきった裸の銀杏の樹が、寒々と歩道に立ち並んでいる。

「冬休み、スキーにでも行かないか」

影山が不意に言って「スノボでもいいけど」

確かに今日も呼び出してきたのは影山の方だったが、真夕はそろそろ返事をしなくてはいけないと思っていた。

何時までも返事を先延ばしにして思わせ振りの言動は止めておこうと思った。

「あの……」

真夕は小さい声で切り出した。

「あたし…… やっぱり影山先輩のご期待にそえる事は……」

真夕は、自分に好意を持ってくれる人に対して、こんな事を言うのがとても気が引けて、途中で言葉を切って俯いてしまった。

影山はそんな彼女に、爽やかともとれる苦笑いを浮かべ

「まあ、なんだね。何となく結果はわかってたけど」

そう言われた真夕は、顔を上げて影山を見た。

「判ってたけど、言わずにはいられなかったんだ。何もしないで、うじうじ考えるのは、俺の性分じゃないからね」

「すみません……」

真夕は小さく言って、再び俯いた。

「キミの中では、和弥の存在が引っ掛っっているんだろ」

「解かりません…… 自分でも判らないんです」

真夕はそう言って、俯いたまま首を振った。

影山には、そんな年下の彼女が可愛くも、愛しくも思えた。

「でもほら。俺にしてみれば、こうして知り合いになれたし」

影山は、相変わらず笑って「本当は、ちょっと仲良くなればラッキー、なんて思ってたんだ」

それが、真夕を傷付けまいという彼の配慮なのかどうかは定かではなかった。もしかして、それが本心なのかもしれない。

ずいぶん前向きな人なんだな。真夕は、彼の笑顔を見てそう思った。

「そろそろ、バイトの時間だろ」

「あっ、はい。コーヒーごちそう様でした」

「じゃあ、また」

影山はそう言って自転車に乗ると、軽く手を上げて走り去った。

「えっ？またって……」

ほんと、前向きな人…… 真夕は、自分の意志が本当に伝わったのだろうか、少し不安な気持ちで影山を見送った。

【19】静思

学校帰りの大型ショッピングセンターで真夕は今晚のおかずを物色していた。

「うーん。あたしのレパートリーは出尽くしちゃったし、何を作ろうか……」

真夕は食材を眺めながら、一人ぶつぶつと呟いていた。

「こんにちは」

死角から声を掛けられて、真夕は慌てて振り返った。

「あ、チカさん」

「どう？ 身体の調子は」

「ええ、もう何でも無いくらいです」

真夕は片腕で力こぶを作るポーズをとったかと思うと、笑った顔を少しだけ曇らして

「すみません。ぜんぜん顔出さなくて」

「いいのよ。あなたが元気なら」

千夏はそう言って優しく笑った。

「そうだ、今日はお休みですか？」

真夕が突然千夏に訊いた。

「えっ、ええ。そうだけど」

真夕は、満面の笑みで「夕飯、一緒にどうですか」

「うまいっすね」

和弥が、ご飯を頬張った口でもごもごと言った。

「そんなに頬張らなくて、逃げないよ」

真夕の言葉に、思わず千夏も笑った。

真夕は、千夏を食事に招いたと言うより、夕飯を作ってもらったのだ。

「助かっちゃった。何作ろうか迷っちゃって」

「迷ったんじゃないくて、もうネタが無かったんじゃない……」

和弥の指摘に真夕がキツと睨んで「ああ、そんな事言うんだ」
思わず和弥が肩をすくめる。

「和弥ったら、ぜんぜんあたしの有り難味がわかってないんですよ」
真夕のぼやきに千夏は笑って「そんな事ないわよ」

言いたい事を何でも言い合える真夕と和弥を眺めていると、彼女はふと思った。

この2人の間には誰も入れない。

幼なじみ……いえ、お互いを信頼する気持ちはそんなものではない。おそらく、その思いはそれ以上……

彼は、彼としてのマユを以前から…… 和弥くん、あなたはそうだったのね。

あたしは真夕のいい友達、いえ、いい姉になろう。千夏は二人の弾けるような笑顔を見ながらそう思った。

微笑ましいその光景に、千夏の寂しさは無かった。

「じゃあ、お休みなさい」

千夏はそう言って、車の窓を閉めながらゆっくりと走り出した。

「じゃあ、俺も行くから」

「うん。お休み」

和弥は、門の前に立つ真夕の方を見ながら後向きにしばらく歩くと、片手を軽く上げて自分の家の方へ身体の向きを変えた。

「もしもし、チカさんですか」

「和弥くん。どうしたの」

和弥はその日の少し遅い時間に、千夏の携帯電話を鳴らした。

「今夜は、有難う御座いました」

「ふふっ、どうしたの。あたしの方こそ楽しかったわよ」

「すみません、こんな時間に」

「別にいいわ。まだ起きてる時間だし」

「チカさん。辛くないのかなって思ってた…… マユの事」

「あら、そんな事気にしてたの？ あたしは大丈夫。だって、彼だったマユはもう何処にもいないんですもの」

少しの沈黙があった。

「和弥くん……」

「はい」

「今のマユには…… いいえ、前からそうなのね、きっと。今日見て判ったわ。マユにはあなたが必要なのよ。そして、あなたにも」

「……はい……」

和弥は真面目な顔で肯いた。

その表情は、声の具合で電話の向こうの千夏にも見て取れた。

「あたしはイイお姉さんになるわ。何かあったら相談してね。いちお、こう見えても大人だから」

和弥は何故だか涙が込み上げて来て、うまく声が出せなかった。誰にも気付かれないように培って来た、本当は誰かに解かって欲しかった自分の気持ちの全てを、この瞬間に、彼女にだけは解かってもらえたような気がしたのだ。

彼は電話で話しているのに、ただ黙って何度も肯くだけだった。

震える息使いだけが千夏の耳には届いていた。

しかし、その姿も、千夏には目に見えるようだった。

千夏が何気なくカーテンをまくって見た秋の夜空には、驚くほど明るい満月が輝いていて、その優しい月華は何故だか彼女の目頭を熱くさせた。

【20】告白

土曜日の朝、真夕は久しぶりにカーゴパンツを履くと、プルオーバーのパーカーの上にMA-1ジャケットを着た。少し伸びた髪をかき上げて襟元を正す。

マウンテンバイクに跨り家を出ると、ちょうど和弥も出かける所で通りに出てきた。

「マユ。出かけるのか」

「えっ、う、うん。和弥は部活？」

「ああ、俺らは来年もあるからな」

和弥はそう言って笑うと、最近少なくなった彼女のカジュアルな服装を見て

「秀雄と出かけるのか」

「う、うん。ちょっとその辺に……」

真夕は、口元だけ笑っている彼の目が、何だか悲しそうに見えて思わず視線をそらした。

それ以上会話は無かった。県道の分かれ道まで二人は無言のまま自転車を走らせると、そのまま別れた。

「じゃあ」

和弥の声に、真夕も視線は合わせずに「うん。じゃあね」

真夕は、離れていく和弥の後ろ姿を一度も見ないようにして、自転車のペダルを踏んだ。

和弥は、遠ざかる真夕の小さな背中を一度だけ振り返って見つめた。

道端には背の高いススキが生い茂り、風に吹かれてゆらめいていた。照らし出す陽光と乾いた風が身体を抜ける心地よさ。それと同

時に、右に左にバンクを振るバイクのリヤシートで、真夕は不思議な感覚に包まれていた。

この感覚…… 以前このバイクに乗ったことがあるのだと彼女は確信していた。

「ねえ、何処まで行くの？」

「もうちょっと」

左手に松島タワーが見えた。

国道へ出て観光桟橋を過ぎると、水族館の横を抜けて短いトンネルを抜ける。

一瞬の暗闇で開いた瞳孔が、秋の陽射しに眩しさを感じて、真夕は目を細めた。

ファミリールレストランで軽い昼食をとり、海浜公園を散歩すると、真夕はデジャヴーに似た感覚に戸惑いを覚えた。

「ここ、覚えてない？」

秀雄が真夕を見て言った。

「ここ…… やっぱりあたし来たのね」

「覚えてるの？」

「わかんない…… 何となく。でも、それが何時の記憶なのか判らないの。最近のような、昔のような」

「じゃあ、俺と来た事を覚えているわけじゃないんだね」

真夕は秀雄の顔を見て

「秀雄と来たの？」

彼は、低い堤防に腰掛けながら正面に見える小島を指差すと

「あそこで、マユにキスした」

真夕は啞然として、彼が指差した島から秀雄の顔に視線を移した。

「キス…… したの？ あたしたち」

「そしてキミは、ここで、自分の秘密を俺に話したんだ」

秀雄はタバコを咥えると「ああ、向こうのベンチだったかな」

「あたしの秘密？」

真夕は何となく判っていた。秘密が何であるかは判らないが、自

分には何かあると感じていたのだ。

だからそんなに驚きはしなかった。この時点では。

「キミの秘密を知っている連中は、みんな、マユが自分で思い出さない限り口にしない事にしたんだ」

秀雄は片手で浜風を遮りながら、タバコに火をつけた。

大きく一息吸って煙を吐き出すと、風に煽られて、一瞬でそれは宙に消えた。

「でも、俺は違うと思うんだ。マユがたとえ自分の秘密を知ったとしても、今のマユはそのままだと思うんだ」

秀雄は後ろに手を着いて、空を仰いだ。

「俺は、どっちでもいいんだ。どっちのマユも好きだから」

「どっちの……って、どう言う意味？」

真夕は秀雄の隣に腰掛けて、怪訝な顔で彼を見つめていた。

「マユ…… キミは男だったんだよ」

真夕は目をぱちくりとしたまま動かなかった。

マスカラのついた睫毛が二回ほど瞬きをした。

汐風で髪が靡くと、そう言えば、しばらく髪切ってないな。など
と思ってしまった。

「えっ？」

真夕は思わず秀雄に訊き返した。

「マユは性同一性障害者だったのさ。それがカートの事故で、何故だかその部分がすっぽりと消えてしまったんだ」

「あたしが、性同一性障害……」

それが、どういう障害なのか彼女も知っている。しかし、自分がそんな障害を抱えて成長してきたと言うのだろうか…… 真夕には、俄かには信じられなかった。

「キミは、ずっと男の心を持ちながら、外見どおりの女性を演じて暮らしていたんだ」

呆氣に取られている真夕を見て、秀雄はそう言った。

「でも、小さい頃の記憶はちゃんとあるよ」

「それが、不思議なんだ。キミの昔の記憶は、おそらく性同一性障害の事実を回避して、うまく繋ぎ合わされているんだよ」

「和弥は？彼も知ってるの？」

「キミが小学生の時に初めてその事を打ち明けたのは、和弥だよ」

真夕は、秀雄が吸うタバコがかなり根元まで赤くなっているのをじっと見つめていた。

秀雄はポケットから携帯灰皿を出して、タバコを揉み消すと

「俺は、マユがそれを知ったからって、男に戻るとは思えないんだ。もし戻ってしまったとしても、それはそれで、仕方がないような気がする。だから話した」

「そう…… 今まで感じた違和感はそれだったのね」

真夕は立ち上がると、引き潮で大きく露わになっていた砂浜に足を踏み出した。そして振り返ると、屈託の無い笑顔で

「秀雄、話してくれてありがとう」

秀雄は立ち上がった真夕を、目を細めて見上げた。

彼女の笑顔が、秀雄には眩しかった。それは、高い逆光の陽射しのせいではないだろう。

「俺、和弥との約束を破っちゃったな」

秀雄が膝を抱えるようにして俯きながら呟いた。

「たぶん、秀雄が言わなかったら、和弥が言ってたんじゃないかな」
彼女は砂浜にしゃがんで、落ちていた貝殻を指で突いた。

「何でそう思うの？」

顔を上げた秀雄に、真夕は

「さあね…… 2人は似たもの同士だから……かな」

【21】亀裂

11月も下旬へと差し掛かっていたが、昨日にも増して陽射しは暖かかった。そんなひと月さかのぼったような小春日和な空の下、公園の片隅で頬を打つ悲痛な音が鳴り響いた。

「香織……」

日曜日の午後、真夕は香織に電話で呼び出されて、通学途中にある近くの公園に出向いていた。

「泥棒猫みたいにこそそそ秀雄とでかけないで！」

香織は真夕の頬を平手で強く叩くと、自分の頬を真っ赤にして怒鳴った。

「そんなんじゃないのよ」

「じゃあ、なに？ どうして、秀雄のバイクに乗って出かけるっての？」

香織は昨日の土曜日、駅前通りを走る秀雄のバイクの後ろに真夕が乗っているのを見たのだ。

そして、秀雄にもそれを追求した。

秀雄は言い訳はしなかった。「好き」と言う言葉こそ口には出さなかったが、自分が誘い出して出かけた事を認めた。

香織は判っていた。3人で同じバイト先で働いている時から、秀雄が真夕に気がある事を。

しかし、結果的には真夕は秀雄とは付き合わなかった。

香織はどうしていいのか判らなかった。秀雄の思いをどうやって断ち切らせればいいのか……

そう考えた時、真夕には秀雄に近づいて欲しくないと思ってしまったのだ。

秀雄の誘いに、一切乗らないで欲しいと思った。そして、秀雄に誘われるままついていった彼女に怨嗟の念をいだいたのだ。

「聞いて、香織。秀雄は……」

「親友だと思ってた」

香織は真夕の言葉を遮るように言った。

「あんたは他の娘みたいに上辺だけの人間じゃないって思ってた…」

香織の頬にはポロポロと涙の雫が零れ落ちた。

「あたしが傷ついていたら時に、暖かい手で支えてくれたのはマユだけだったから」

「香織……」

真夕は何も言葉がでなかった。

理由がどうであれ、秀雄と出かけたのは真実で、それが香織の心を深く傷付けてしまった事もまた事実なのだ。

「もう秀雄に近づかないで」

香織はそう言い捨てると、公園から走り去った。

真夕はしばらくその場から動けなかった。

G I Dの症状に苦しんでいた自分はどれだけ人に傷ついた事だろう。

今の真夕に実感はないが、その特異な症例にどれだけ自分が思い悩み、そして苦しんだかを想像した。

それなのに、正常な女性になった途端に、他人を深く傷付けてしまったのだ。

暖かな秋の陽射しが、今の真夕にはとてつもなく冷たく降りそそいでいた。

「朋子……」

和弥は言葉を呑みこんだ。

日曜日の部活が終わっての帰り、校庭の隅では何時ものように前原朋子が待っていた。

「帰ろう。買い物付き合って」

朋子は何時も通りの明るい笑みを浮かべた。

「朋子、俺……」

「早く行こう」

朋子が引つ張る手を、和弥は振り払った。

「朋子、俺、もうお前とは付き合えないよ」

「また何時ものやつ？」

朋子は歪んだような笑みを無理やりに浮かべて「また幻影がどうのって理由？」

「違うんだ…… もう幻影はいない」

その言葉を聞いた朋子の顔から、笑みは完全に消えていた。

「俺は、マユを支えていきたい」

和弥は少し俯いて

「いや…… 彼女はそんな事は望まないかもしれない。でも、傍にいてやりたいんだ」

「それは、男として…… って事？」

朋子が小さな声で訊いた。

和弥もまた、小さくそれに肯いた。

「もう寝た？」

和弥は顔を上げて、朋子の目を真っ直ぐに見つめると

「俺とマユは、もっとみんなの知らない深いところで繋がってるんだ。だから、寝るとか寝ないとか、そんな表面的な事は関係ないんだ」

みんなの知らない深いところ…… 朋子はその言葉に何も言い返せなかった。やはり自分が思っていた通り、和弥と真夕はただ事の関係ではなかった。

それは、セックスをしたからとか、そんなフィジカルな表現では到底勝つことの出来ない親密な関係。

「和弥……」

朋子の瞳には涙はなかった。

朋子にはわかっていた。

和弥は真夕が事故にあって1週間意識が戻らなかった時、毎日部活を休んで病院へ跳んで行った。

やっと勝ち上がった選抜の試合を捨ててまで。

その時確信していたのだ。

やっぱり和弥の心は真夕のものなのだと。

「何時でも戻って来てね」

朋子は命一杯の作り笑顔で和弥に手を振ると、そのまま正門を後にした。

涙が零れないうちに、彼の前から消えたかった。

これでよかったんだ。このままズルズルいたら朋子を余計に苦しめてしまう。和弥の心は複雑だったが、朋子とは別れなければならなかった。

午後の緩やかな陽射しが、少しだけ恨めしかった。

こんな日は大雨でも降って、全身をずぶ濡れにするくらいの仕打ちが欲しかったのだ。乾いたところが溺れるくらい水を吸って、呼吸もできないほどに苦しめて欲しかった。

知らなかった……人をふるってという事が、こんなにも心苦しい事だったなんて。自分から別れを告げることが、こんなに罪悪感に満たされる行為だったなんて……

帰り道の自転車のペダルは異常に重かった。ローギヤのままゆっくりと、帰宅しようと言う気持ちもないままただ漠然とペダルを踏んだ。

何時の間にか住宅街の入り口にある公園まで来ていて、和弥はふと目を止めた。

真夕が、ひとり佇んでいるのが見えたのだ。

「マユ！」

公園の入り口から和弥が声をかけると、真夕は振り返って微笑んだ。その微笑みはとてもぎこちなく、愁いに満ちていた。

【22】恋人

夕暮れまでにはまだまだ間があるのに、晩秋の陽射しは2人を薄っすらと黄昏色に染めていた。

「ちょっと出かけたただけだったんだろ。誘って来たのは秀雄の方なんだし」

和弥はこの公園に唯一ある遊具の、古びたブランコに腰掛けて言った。

香織に呼び出されてここへ来た経緯を真夕から聞いたのだ。

「ううん。あたしが悪いんだよ。もっと、香織の身になって考えるべきだったんだよ」

「香織だって、今のマユに気分転換が必要だって知っているだろうに……」

和弥が呟いた。

真夕は和弥の隣のブランコに腰掛けると

「でも、あたしと香織は、そんなに親しくなってたの？」

「マユは、彼女が妊娠して悩んだ時、唯一力になってあげたのさ」

「香織、妊娠したの？」

「彼氏が逃げちゃってさ、それで、彼女はそうとう追い詰められてたんだ」

「子供はどうしたの？」

「降ろしたよ。今の彼女にはそうするしかなかったし……マユは彼女の病院にも付き添って行ったんだ」

真夕は薄っすらと黄昏色に霞む空を仰いだ。

「あたし…… 男の時の方が優しかったんだね」

真夕の呟いた言葉に、和弥は息を呑んだ。

「マユ…… 思い出してたのか？」

真夕は静かに首を横に振って「昨日、秀雄に聞いた」

「秀雄の奴、喋ったのか？」

「怒らないでね。あたしは感謝してるし、和弥だって、何れは話そうと思ってたんじゃない？」

和弥は真夕に言われてハツとした。

彼もまた、何時までも真夕に黙っているよりも、彼女自身の事全てを話すべきではないかと考える事があったのだ。

「大丈夫、あたしはあたし。変らないよ」

真夕は俯いて「ただ、人の痛みがわからなくなっただけ……」

和弥は自分のブランコを降りて真夕の腰掛けたブランコの椅子に足を掛けると、大きく反動をつけて立ち乗りした。

「ちよつと……… 和弥？」

和弥は真夕を座らせたまま二人乗りのブランコをグングンこいで、大きく揺らした。

地面を遠く離れた身体は、揺り返しの瞬間浮遊感に包まれる。

真夕は突然の和弥の行動に、鎖を掴んだ両手に、ただ力を込めるだけだった。

「マユは、人の痛みを忘れてなんかないよ」

和弥は全身を使って、ブランコに大きな反動をつけながら

「きつと、誰よりも人の痛みを知ってる。心が男とか、身体が女とか、そんな事は関係なく、マユは、マユ。だろう」

真夕は、その言葉をどこかで聞いたような気がした。

和弥はさらにブランコを大きく揺らした。

住宅の屋根の向こうに傾いた夕日が眩しくて、なぜだか真夕は笑いが込み上げて来た。

「ちよつと、怖いでしょ。そんなに揺らしたら危ないってば」

「大丈夫だよ。昔はこのぐらい揺らして跳んだぜ」

このブランコは、小さい頃に真夕と和弥が、大きく揺すったブランコから何処まで遠くに跳べるか競った場所だ。

この辺にはまだ住宅は少なく、空き地に挟まれたこの公園がポツリと在った。

夕方の紅い陽射しを浴びながら、和弥と何時までも遊んでいたあ

の頃が懐かしかった。

その時、和弥は慌ててブランコを止めた。

気がつく、真夕の肩が大きく震えていた。

「ご、ごめん。怖かったか？」

彼女は首を横に振ったが、咽ぶ声が止まらない。

和弥は少なからず動揺していた。真夕が泣くのを見たのは、おそらくこれが初めてだった。

足を骨折しても強がっていた彼女の涙に、彼は戸惑った。

真夕自身も、何がどうしてこんなに涙が出るのか判らなかつた。堪えようとすればするほど、子供のように嗚咽が止まらなかつた。

和弥は、彼女の小さな身体を後ろからそっと抱きしめた。何も考えなかつた。彼の身体が自然にそう動いたのだ。

柔らかい髪の毛から、そして首筋から香る真夕の甘い香りが、和弥にはとても懐かしく感じた。

小学6年生の時、守ってやると約束したあの時から変わらない。和弥にとっての「恋する人」は刑部真夕なのだ。

今でもその思いは、あまりにも不自然なくらいに不変なものだった。

少し距離を置いた場所から見続けてきたからこそ、その思いは変わらないのかもしれない。

彼女の心が男だとか、女だとか……きつと、和弥が真夕を思う気持ちには関係ないのだろう。例え、こうして抱きしめる事が、一生でできなかったとしても……

和弥の手を握った真夕は、いつか繋いだその手の温かさを思い出した。それが何時かは判らないが、彼とは手を繋いだ事がある。そう確信した。

夕陽は民家の屋根に陰り、辺りはつるべ落としに暗がりを増して2人を呑みこんだ。

小さな街灯に照らされながら、和弥はそっと真夕に唇を重ねた。真夕は心地よい安らかな気持ちになって、頬を伝う涙は止まって

いた。

震える魂の全てを包んでくれるような、彼の温もりを感じながら。

【23】こころの扉

その身体はキミのものになりそうだね。俺はこのまま長い眠りに着く事にしたよ。

「あなたは、あたしの男の心なの？」

まあ、そんなもんかな。俺にもよくは解からないけど……

「この身体、あたしに返してくれるの？」

あはははっ…… 返す……か……。そうだな、その身体は元々キミのものだったのかもしれないな。無くした記憶を欲しいかい？

「記憶が戻ったら、あなたも戻るんじゃないの？」

そんな事はないさ。

記憶は頭の中、俺は心の中だからね。

「どっちでもいい。でも、友達との想い出は欲しいな」
少しずつ思い出すさ。

「ほんと？」

ああ、少しずつだろうけどね。じゃあな、その身体大切にしろよ。

「うん。ありがとう」

それから、その身体はもう……

「なに？」

いや。和弥はそんな事にこだわらないな。

……………

突然、槍を投げ込まれたような電子音。それが目覚し時計だと気付くのにしばらくかかって、真夕はベッドの上にムクツと上体を起こした。

「夢……」

彼女は思い出したように鳴り続ける目覚し時計を止めると、布団を跳ね除けてベッドから出た。

彼女は以前にも似たような夢を見たことを思い出した。「俺」と呼ぶ真夕に話し掛けられた夢を。

あの時は、それが何なのか判らなかったが、今は何となく判るような気がする。

自分の心の奥、その扉の向こう側には、きっと性同一性障害に苦しんでいた自分がいるのだ。

あたしの中の、夢でしか逢えないあたしのMemory:

真夕は白いブラウスに着替えてスカートを履くと、箆笥から取り出したハイソックスをベッドにひっくり返って履いた。

キッチンへ下りると、食パンをトースターに入れて、サーバーに残っているコーヒーをカップに注いだ。

朝食を終えると、洗面所で髪にムースをつけながら

「少し、髪切ろうかな……」

真夕は昨晚、香織にメールを送った。

秀雄とはなんでもなく、友達だと言う事。そして、自分が記憶を無くすまで性同一性障害だった事。

真夕が家の門を出てマウンテンバイクを走らせて行くと、和弥がちょうど家から出てきた。

和弥の顔を見た真夕は心臓が途端にドキドキと高鳴るのを感じたが、それが顔に出ないように必死で堪えた。

目が合った瞬間、和弥の視線も一瞬宙を泳いだ。

「あれ？和弥、朝連は？」

先に話し掛けることで、彼女の鼓動の高鳴りは次第に収まっていた。

「えっ、あ、ああ。寝坊したよ」

和弥はそう言いながら、自転車のスピードを早めて真夕の前に出た。

彼は昨晚、なかなか寝付く事が出来なかった。長年の思いを遂げたおかしな戸惑いと高揚感で興奮した気持ちは、何時までも続いて

いた。

完全に諦めていたことだ。

真夕と唇を重ねる日が来ようとは、夢にも、いや夢でしか味わえない事だと思っていた。

和弥の夢には何度か真夕が出てきた事がある。まるで今を予知していたようなまるつきり女性の真夕だった。ただそれは、和弥が無意識に作り出した幻想だと彼も知っていた。

だから、本物の彼女とは、ただのキスだけでこんなにも心が高鳴って、見るもの全てが鮮やかな彩りに見えるのだ。この先の事に対する不安を感じる余裕すら彼には無かった。

2人は並んで住宅街を駆け抜けると農道へ出て、自然にスピードが上がった。

空が蒼かった。空を見上げても、それが蒼いと感じた事はない。

空は青くて当り前だから…… 晴れてるとか曇ってるとか、そんな認識しかした事は無かった。それなのに、今朝空を見上げた時和弥は、こんなに蒼い空があることを初めて知った気がした。

「学校まで最短記録で行くぞ！」

和弥が大声で言った。彼も、彼女と会話をする事で、鼓動の高鳴りが何時しかペダルをこぐ動悸へと変っていった。

「どうせ、部活は間に合わないんでしょ」

彼女の言葉に和弥は笑って「それでもいいんだよ」

「もう… 運動バカなんだから」

真夕は小さく肩をすくめて呟いた

朝の冷たい風が、真夕にはとても心地よくて、少し火照った頬にはちょうどよかった。

「マユ、あんまりスピードだと、風でパンツ見えるぞ」

斜め後ろを走る彼女に、和弥が振り返って言った。

真夕はそれでもギヤを上げて「和弥ヤラシイ！」

違う答えが帰って来ても、それが真夕の言葉に变りは無い。

青い空が何処までも続く彼方には、大奥山脈が霞みに聳え、薄っ

すらと白い化粧が浮かんでいた。

和弥も、心地よい風に打たれながら、真夕に抜かれないうように自転車のスピードを上げた。

【23】こころの扉（後書き）

次回より、第2章です。引き続きお付き合いいただければ幸いです。

第2章―「1」迷走

鉛色の空が上空を低く覆い尽くして冷たい風が吹き付けると、枯れ草やコンクリートに包まれた景色は、まるでブリキ細工のように物寂しげに映し出される。

本格的な冬の入り口は、凍て付く空氣に閉ざされた人工物のように、全ての景色をうつくつしたもののへと変えてゆく。

「香織、もうアレやらないの？」

放課後の教室で、香織は隣のクラスの木村麻紀に声を掛けられた。「アレって？」

「アレはアレよ。もう直ぐ12月じゃん。お金無くってさ」
麻紀と一緒にいた、こずえが言った。

彼女たちは、春から夏にかけてとあるアルバイトをしていた。金銭的に余裕のある大人の男性とデートをして時間でお金を貰う。

地域密着型の携帯サイトの掲示板を使ってお客を募集して、数人で割り振ってそれをこなすのだ。大企業のない地方では、ほとんどが開業医や個人事業を営む連中が得意客だった。

もちろん、世間の狭い街だから、同じ市内の客はとらない。隣以上はなれた地域にお客を限定する事で、知り合いに出くわすリスクを削減するのだ。

身体の関係はご法度だから、そんなに大きなお金が動くわけではないが、普通に働くのがバカらしくなる稼ぎは充分にあったし、大抵の男は好きなものを買ってくれたりするので、そう言ったボーナスもあった。

香織は、その元締めのな役割をしていたのだが、自分が妊娠したゴタゴタで、ぱったりとやめてしまったのだ。

そう、香織はこの連中を以前は友達だと思っていた。でも、それは違っていた。

自分が妊娠し、その相手である彼氏が逃げてしまい途方に暮れた

とき、彼女はこの連中に相談しようとは思わなかった。

弱みを見せたら見下されると思った。仲間内でナメられたらお終いだと思った。

それは、香織自身が彼女達に心を開いていないからなのかもしれないが、相手も本心を打ち明けないのは同じで、お互いにそれらを感じながら仲良しを演じている。

ひとりは寂しいから誰かとつるんでいるだけなのだ。

「香織、最近ずいぶん大人しくなったし」

麻紀がそう言うのと、こずえが

「そうだよ。S高の男と付き合ってるんだって？急に止めちゃうから、あたし達大変だったんだよ」

「そんなに援交したきゃ、自分で掲示板に書き込めばいいでしょ」

香織はそう言って鞆を手にとると、教室を出た。

「あたし達、知ってるんだよ。あんたが妊娠した事」

香織の背中に向かって麻紀が言った。

「あんた、中絶したんでしょ」

香織はその言葉に、全身の血の気が引いていくのを感じて足を止めた。

「だったらどうだって言うの」

「学校にばれたらヤバイんじゃない」

ほらやっぱり。ひとの弱みに付け込む事ばかり……

「バラしたきゃ、勝手に言えればいいでしょ」

香織は冷たい笑いを浮かべて「証拠があるならね」

そう言って、廊下を歩き出した。

香織は秀雄と付き合うようになって、いや、真夕と友達としての絆を深めて以来、よけいに麻紀たちと一緒にいるのがバカらしくなった。

もともとお互いに信頼なんてしてない。クラスが違う連中とつるむのは、ヤバイ事を一緒にやる仲間だからだ。その方が、援交の事がもしバレた時でも、芋ズル式に全員が捕まる事を逃れられる。

それも、捕まった娘が仲間をチクらなければの話だが……

何故自分は妊娠した時、真夕に相談しに行ったのだろう。

香織は今まで考えた事が無かった。

真夕はカートの資金を稼ぐ為に、香織に強く誘われて数回援交デートをこなしている。

男と一緒にいるだけで金になるという甘味なシステムにも溺れる事無く、数回できっぱりと止めた真夕は、香織にとって少し遠い存在だった。

少し自分とは距離のある娘だから、かえって言い出し易かったのかもしれない。

しかし、彼女は思いのほか香織に対して親身になってくれた。

真夕の胸の中で、香織は安堵に満たされながら涙を流した。

そのマユが男だった？あの胸の温かさは男性のモノ？それとも僅かな母性の証？

違う…… あれはきつと、マユの暖かさそのものだ……

麻紀やこずえに会わなくても声を聞かなくても、別に何とも感じた事は無い。それなのに、もう真夕とは一緒に笑い合う事ができないのかと思うと、それだけで香織は胸の奥に出来た小さな空洞を冷たい風が吹き抜けて、ヒリヒリと疼くのだった。

どうして、こんな事に…… 香織はここ数日、何度も心の中でそう呟いた。

香織が学校の正門を出た時、通りの向こうに見覚えのある車が停まっていた。

赤色のステーションワゴン。

「こんにちは。久しぶりね」

香織が近づいていくと、運転席の窓が開いた。

「チカさん。お久しぶり」

「少し、ドライブしない？」

千夏は香織に向かって微笑んだ。

【2】こころの行方

冷たい潮の香りが、開けた窓から入り込んで香織の頬を撫で付けていた。

雲の多い空から時折覗かせる直射日光が海面に強く反射して、穏やかに揺らめく波が砕けたガラスのようにきらめいていた。

「寒くない？」

「大丈夫。海の匂いが気持ちいい」

香織を乗せた千夏車は、国道から産業道路を抜けて、海岸通りを走っていた。

海浜公園の小さな駐車場に車を止めると、フロントガラス越しには、防波堤の向こうに広がる薄汚れた砂浜と、そこへ打ち寄せて白いしぶきをあげる海が見えた。

少しの間、二人は黙ったままその寒々と荒涼な景色を眺めていた。引き潮で海面に突き出た岩場に、カモメの群れが集まって、黒い固まりになってうごめいている。

「最近元気が無いって、秀雄くん気にしてたわよ」

千夏は水平線に浮かぶ小さな貨物船を見つめながら言った。

「マユは性同一性障害だったって、本当ですか？」

香織がポツリと千夏に訊いた。

「誰に聞いたの？」

千夏は驚いた表情で香織を見た。

「マユがメールで……」

「そう」

千夏は少しためらいはしたが「本当よ。でも、事故の後遺症でその記憶そのものが消えたらしいの」

チラリと香織を覗いながら千夏は

「きつと、誰かに聞いたのね。お母さんか、和弥君か……秀雄君かも」

「秀雄も知ってたの？」

「確か、知っていたと思ったけど」

「でも、あたしは知らなかった。あたしには言ってくれなかったのね」

香織は少し俯いて、呟くように言った。

千夏は香織の顔を再び見つめると

「誰かにそれを言う事が、どれだけ勇気のいる事かわかる？自分の身体が女性なのに心が男だなんて……あなただったら、身近な人に言える？友達に言える？」

顔を上げて千夏を見つめる香織に、彼女はささやかに微笑んで

「誰が見ても女の容姿で、同性、異性に関わらず、みんなは当然女だと思って近づいてくるのよ」

香織は以前、真夕に援交デートのアルバイトを勧め、実際に自分と一緒にそれをこなした彼女を思い出した。

その彼女の心は男だった……最後まで気乗りしない様子で、何人かの相手をしたただけで早々と足を洗った真夕は、ただ真面目な女子高生なだけだと思っていた。

理由は他にあったのだ。だってそれは、いくら身体の関係は無しでお金になると言っても、男性に男と付き合えと言っていたようなもののだから。

その時の真夕にとっては、男同士で手を繋いで街を歩くようなものなのだから。

彼女の心を犯していたのは、あたしの方だった……

香織は、ただ黙って正面に見える水平線を見つめていた。

「マユは……辛い思いをいっぱいしたのかなあ」

「たぶん……あたしたちには想像が出来ないほど……」

千夏もあえて香織を見ずに、正面の海だけを眺めて言った。

「秀雄君も和弥君も、女性として付き合えないマユの心を、男同士として少しずつ支えてあげていたんじゃないかな」

千夏は少し開いていた窓を全開にすると、メンソールのタバコを

取り出して火を着けた。

「あたしって、心が狭いのかなあ」

香織は肩をすくめて目を細めると、雲のひしめき合う中途半端に青い空を見上げた。

「ひとの心は見えないものね」

千夏はそう言って笑うと、開けた窓から空に向かってタバコの煙を吹いた。

その煙は、空の雲に溶けるように、風に舞ってあっという間に消えた。

「あたしは、カート場に來た時からしかマユを知らないけど、彼女は今でもあの時のマユよ。元気で、明るくて……小さいのに逞しくて、負けず嫌いで……そして、ちょっと怒りっぽいけど思いやりだっちゃん」とある。彼女はそんな娘だと思うな」

千夏はそう言って、運転席の窓から外を眺めて

「あたしたちとの、この夏の記憶はほとんど消えてしまったけど……いえ、きっと彼女の心の何処かには残ってるわ。あたしはそう思ってる」

香織の頬から涙が伝って、すすり泣く声が聞こえた。

「あたし、マユをぶった。彼女の苦しみを何も知らないくせに……」その涙は、悔しさと後悔が入り混じった複雑なものだった。

知らなかったとは言え、一方的に彼女を傷付けていた自分が、真夕に対してかざした「親友」という言葉……それが急に遠くに霞んで、身勝手な自分の愚かな行為が恥ずかしかった。

「大丈夫よ。彼女はきっとあなたの事を怒ったり、恨んだりしないわ」

「でも、マユはあたしとの事ほとんど覚えてないから、あたしを親友だとは思ってないかもしれない」

「そんなことないわよ。あなたが彼女を思えばそれは通じるし、マユはそれに応えてくれるわ」

「そうかな……」

「そうじゃなかったら、わざわざ性同一性障害の事を話すかしら」
千夏は優しい笑顔で香織を見つめ

「あたしなら、どうでもいい友達にそんな事はいちいち話さないな」
「チカさんは、いつから知ってたの？」

「8月末頃かな」

千夏はシートを後ろにリクライニングさせると

「あたしね…… 男のマユに惚れちゃってたんだ」

香織は驚きの顔を隠せなかった。

いくら心が男だと言っても、真夕も外見は完全な女性なのだから。
「変だと思うでしょ。あたし自身がそう思ったもの。でも、あの瞳の奥にある男らしくて、どこか中性的な不思議な光に惹かれてしまったのね」

「じゃあ、今は……？」

「もうそれは感じないわ。だって今の彼女は正真証明女性だもの」

千夏は再びタバコを一本取り出して啜えると

「あたしの好きになった人は、遠くへ行ってしまったんだって思った」

彼女はパッとライターに火を点して「だから決めたの。あたしは彼女のお姉さんになろうって」

香織は自分のシートも倒して、千夏に並べた。

「みんな、それぞれにいろんな思いで生きてるんだね」

千夏は香織の言葉に微笑んで

「そうよ。見える部分だけがその人の全てじゃないから」

「あたしもチカさんみたいに大人の女になろう」

香織の顔にようやく笑顔が零れた頃、太陽は西の空に大きく傾いて、波間に光の帯を作っていた。

【3】傷跡

休み時間、和弥のところに朋子が現れなくなって3日が過ぎていた。それがどう言う事を意味しているのか、囁かれる噂と同時に真夕にも判っていた。

教室で和弥にそれを訊く者はいない。

得てして、男仲間とはそう言うもので、人前で大っぴらにそれに付いて和弥に問い質す者はいなかった。

「ねえ、三浦、彼女と別れたらしいね」

放課後の掃除の時間に、加奈が言った。

「あっ、うん……」

真夕はどう返事をしていいのか判らない。

和弥は、彼女と別れたから、自分にキスをしたのだろうか。それとも自分とキスをしたから朋子と別れたのだろうか。

順番がどうであれ、あたしの責任なのだろうか……

真夕は少なからず罪悪感を抱かずにはいられなかった。

自分のせいで、また誰かが傷ついたのかと思うと、胸の奥がキリキリと切なく疼いた。

真夕と加奈は他数名と共に、裏門の掃除当番だった。裏門の近くには焼却炉が在って、いたる生徒がゴミ箱を抱えて通りすぎる。

そこに朋子が教室のゴミ箱を抱えて通りかかった。

彼女と一瞬目が遭った真夕は、思わず視線をそらしてしまった。

今の真夕には、彼女の目を真っ直ぐには見ることが出来なかったのだ。

自分を選ぼうとしているのは確かに和弥だが、それを彼一人の責任に押し付ける事など、真夕にはできなかった。

「あれ、あの娘だよね。三浦の」

加奈が、小さな声で言った。その言葉は、真夕を素通りしていた。焼却炉にゴミを捨て終えた朋子は、再び真夕の前を通り過ぎた。

「と、朋子ちゃん……」

あたしって、バカだ。声を掛けて何を言うのか。あたしは彼女に声を掛ける資格なんてないのに。

朋子は振り返らずに、その場に立ち止まった。

「あの……何ていうか……」

真夕は言葉を詰まらせた。何か言葉をかけてあげたいが、何をどう言っているのか判らなかった。ただ、キュッと心がしばむ音がした。

「あたし……恨んでませんよ」

小さな声で、朋子はポツリと呟いた。

「えっ？」

朋子は振り返って小走りに真夕に駆け寄ると

「あたし、彼を繋ぎ止めて置けませんでした。あたしの力不足でした」

朋子はサバサバとそう言って「だから、先輩は先輩で好きなようにして下さい」

「でも……そんな」

朋子は強がりを言っているようには見えなかった。

それは、彼女のはつらつとした笑顔が物語っていた。

いくら頑張っても、どうにも離れていく心がある事を悟ったような笑みだった。それは、自分は精一杯頑張ったと言う悔いの無い笑みだった。

「誰かを奪うって事は、結局誰かが傷つくじゃないですか。あたしはそれをしたんだから、逆の立場も受け入れないと」

彼女はそう言ってペコリと頭を下げると、小走りに駆けて行った。

真夕は、朋子の言葉にハツとした。

誰かを奪うと、誰かが傷つく……それは、目に見えるばかりではなく、心の隅でその人を思っている人も含んでいるのだろう。

あたしは、彼女が和弥と付き合いだした時、傷ついたんだろうか

……

「今のって、どういう意味？」

加奈がそう言って、真夕の後ろで首を傾げていた。

彼女は他のみんなに比べれば真夕の傍に多いことが多い。だから、和弥も真夕もお互いに家が近所で幼なじみと言う意外、何もないと思っていた。

端から見ると、真夕と和弥はあまりにもサバサバした関係だったのだ。

そう、まるで同性の友達のように……

真夕は週に4日バイトに入っている。退院してから入り始めたシフトがそのまま続いている為、土日であっても以前のように通しで入る事はない。

今の真夕にはそれほどお金が必要なわけでもなく、それで充分だった。

彼女がバイトを終えて家に帰ると、珍しく母親が帰っていた。

リビングにもキッチンにもいないと思ったら、洗面所で髪を染めていた。

真夕は、洗面所に顔を覗かせると

「ねえ、お母さん」

「何？」

小夜子は髪全体に乳白色の液体を着けて振り向いた。

「あたしが事故に遭う前……G I Dのあたしって、どんなだった？お母さんとはどう接していたの？」

「あら、あなた記憶が戻ったの？」

小夜子は妙にあっさりした風に言った。それが彼女の性格だった。

真夕は、首を横に振って「秀雄って友達に聞いた」

「そう」

小夜子は何食わぬ顔でそう言うと、再び鏡に向かってカラーリン

グ溶液を髪に付け出した。

真夕は一瞬肩をすくめて「ねえ、親子二人、どうしてたのよ」

「何？急に。生活レベルの事は憶えてるんでしょ」

「そうだけどさ。お母さんから見てどうなのかなって思ってた」

「そうねえ……」

彼女は一瞬手を止めて「言われてみれば、別に今と変わらないわね」
小夜子は鏡越しに真夕を見て笑った。

「変らない？」

「そうよ。別に……そうか、今の方がずっと女の子らしいわね」
「だって、あたし女じゃん」

真夕は溜息混じりでそう言った。

「マユは、マユって事なんでしょ」

小夜子はそう言って、鏡越しに再び微笑んだ。

【4】クラスメイト

「よう、最近元気ないな」

「うるさいな、あっち行ってよ」

帰りの昇降口で近藤アツシは、目に留まった朋子に声を掛けた。

「三浦先輩と別れたんだって」

「別れたんじゃない」

朋子は靴を履いて、足早に昇降口を出た。

アツシはそれを追いかけてながら「じゃあ、なんだよ」

「振られたのよ。決まってるでしょ」

朋子は涙を堪えながら「もう、その話はしないで！」

和弥と朋子が別れた事は、アツと言う間に地を這う如く広まった。関係の無い者にとっては全くどうでもいい話しだが、女の子はこの手の話に敏感に反応する。

陣中見舞いを装っては、その経緯を聞こうとするクラスメイトに、朋子はウンザリしていた。

三浦和弥に多少なりとも好意を持つ女生徒、特に上級生達は、ザマア見ろと言わんばかりに、失笑しながら彼女を見た。

好きなように勝手な事を言っていればいいわ。あんた達なんて、道端に転がっている空き缶ほどこに、和弥の眼中にも無いんだから。誰も刑部真夕には勝てないの。あの二人は特別なのよ。

もう、どうでもいい……もう誰も好きになるもんか。和弥よりも素敵な人なんて、一生現れないわ。

「なあ、朋子」

朋子は、直ぐ後ろをアツシが歩いている事も忘れていた。

「あんた、部活は？」

「お前の帰る姿が見えてさ……うっかりここまで来ちゃったよ」

朋子は思わず、足を止めた。正門を出て学校前の通りをしばらく歩き、もう直ぐ国道へ出る所だった。

アツシは剣道をやっている。部活に行く途中だったのだろう、自分の胴着の入った大きな黒い一本背負いの袋を担いでいた。

「バツカじゃないの」

朋子は冷ややかに笑ってその姿を見つめると、再び歩き出した。

「なあ、どうせだから、これからどっか行かない？」

「なんであたしが、あんたと何処かに行かなくちゃいけないのよ」

「いや、だってさ……」

アツシは朋子のキツイ言い方に苦笑いを浮かべた。

「あんただって、マユ先輩が好きなんでしょ」

「好きって言っても俺の場合は、ファンみたいなもんだからな」

「バツカじゃないの。同じ学校の生徒のファンだなんて」

朋子は自分の鞆をアツシに向かって振り回した。

「だって、マユ先輩って、何となく普通と違うって言うか……」

その言葉に彼女は歩く足を緩めた。

「そうね。あの人……不思議な人」

朋子は国道へ出た所で、横断歩道を渡る為に立ち止まり「目を見て話していると、吸い込まれそうになった」

朋子は、以前音楽室で真夕と面と向かってやりあった事がある。

と言っても、和弥の事で話を聞いてもらっただけ。のようなものだ。

その時彼女自身、真夕の不思議な瞳に、膝が震えたのだ。それは、緊張から来るものではなかった。彼女から感じたのは女のそれとは違う意思の強さ、それともあれが女の強さだったのだろうか。

しかし、真夕が事故で入院し、そして退院して学校へ来た時、何かが違っていた。そう、あの瞳が、あの力強い瞳が優しい輝きに満ちていたのだ。

朋子は、それが病み上がりのせいだろうと思った。

しかし、結果としては、その変化こそが和弥の心を奪い取ったのだと思っている。

いや、和弥との関係に変化があったからこそ彼女は変わったのかも

しない。

朋子はそれを考えると、いつも同道巡りを繰返し、底なしにはまっつてしまうのだ。

「ま、済んじまった事をくよくよ悩んでもさ」

アツシが朋子の肩を叩いた。

彼女はハッと振り返り「あんた、まだいたの……」

朋子はい、アツシの存在を忘れていた。

青になった横断歩道を渡りながら

「あんた、マジで部活行かないの？先輩に怒られたって知らないよ」

「もう、ここまで来ちゃったし」

アツシは子供のように笑って言った。

「だいたい、あんたの家こっちじゃないでしょ」

「だからさあ、どっか遊びに行こうぜ。このまま家までついて行くぞ」

「ストーカー行為は止めてください」

アツシの言葉に、朋子は振り返らなかったが、その顔には少しだけ笑みが零れていた。

【5】発熱

12月に入ると間も無く期末考査が始まった。朝方には晴れていた空は、昼を過ぎると重苦しい雲に覆われて、何時雪がちらついてもおかしくは無かった。

真夕の体調は、その空模様のように急変して、テストが終了して下校する頃には、悪寒で身体が震え、思うように動けなかった。

「真夕、顔色悪いけど、大丈夫？」

一緒に帰ろうと近づいて来た加奈が、心配そうに言った。

和弥も真夕の顔色には気付いていたが、あえて声はかけず、ただ遠目に心配していた。

「うん。風邪かな……早く帰って寝る」

真夕は加奈にそう言っ一緒に校門を出た所で別れた。
ふらふらと自転車に乗って走っていると

「おい、大丈夫か」

和弥の声が後ろから聞こえた。

少し息を切らしているのは、真夕に追いつく為に全力で自転車を走らせたのだろう。

「うん。死にそう……」

真夕は冗談っぽくそう言って、か弱く微笑んだ。

和弥は真夕の乗るマウンテンバイクのハンドルを片手で掴むと、自分の自転車で引っ張った。

「ちょっと、危ないよ」

真夕が慌てて、バランスを立て直す。

「大丈夫、大丈夫。転ばないようにしろよ」

そう言って、和弥はグイグイと真夕の乗る自転車を引っ張った。
無事家に辿り着いた時には、和弥はこれでもかと言うぐらいにゼエゼエと息を荒げていて

「どっちが病人だか判らないね」

と、真夕は青白い顔で笑った。

夕方からみるみると上がり始めた真夕の熱は、翌朝になっても下がらず39度に達していた。娘の具合を見た母親は、会社と学校へ連絡を入れ、真夕を病院に連れて行った。

母親の小夜子にはピンと来ていたのだ。思った通り、真夕はインフルエンザに感染していた。

病院から帰った母親は会社へ出かけたが、真夕は勿論学校で試験を受ける状態ではなかった。

ああ、今日でテストが最後なのに……　ついてないなあ。改めて受けさせてくれるかしら……　真夕はそんな事を考えながら水枕に頭を擡げて、日中の淡い陽射しの注ぐ部屋で眠りについた。

真夕が再び目を開けたのは、もう夕方だった。水枕もだいぶぬるくなっていたが、病院の注射が効いたのか熱は少し下がったようで、身体が楽になっていた。しかし、全身の節々が軋むように傷んで、寝返りをうつのさえひと苦労だった。

いそいそと起き上がってトイレに行って来た真夕は、汗をかいたので着替えをしてから再びベッドに入った。すると直ぐ、ドアを叩く音が聞こえた。

「お母さん？」

自分以外に家にいるとすれば母親しかいない。

仕事を早く切り上げたのかしら……　でも、あまりに早すぎる。時計に目をやると、まだ夕方の4時半。

この季節、窓の外はすっかり暗がりに包まれてはいるが、母が帰れる時間ではない。

「俺、和弥だけど……具合どうだ」

「か、和弥？」

「様子を見に来たんだ。入ってもいいか？」

「えっ、ええ。大丈夫よ。服は着てるから」

真夕は笑ってそう応えた。

小夜子が和弥の携帯に、出来たら様子を見に行つて欲しいと頼んだのだ。

勿論、和弥は快く了解して、ここに来たと言うわけだ。

「でも、玄関のカギかかってなかった？」

「植木鉢の下にカギがあるって言われた。5つあるうちのどれかだつて」

和弥はそう言って笑うと「おばさんも、どの植木鉢の下か忘れたつて」

「お母さんらしい……」

和弥は買ってきた果物や、ヨーグルト、プリンなどを取り出して

「何が食べたい？」

「ずいぶん買ってきたのね」

真夕はとりあえず、プリンを手を取った。

和弥は真夕の要望で、水枕の水を補充してくると、タオルを巻いて彼女の頭の下に入れた。

入れたばかりの水が冷たくて、頭の芯から透き通るように心地よかった。

頭の位置と水枕を調整する為に、おのずと二人の顔と顔が近づく。和弥は熱で火照った真夕の顔に、さらに近づいた。発熱で火照った真夕の体温が、空気を通して和弥に伝わっていた。

「ダメ。インフルエンザだよ。移ったら大変だよ」

冗談でも、お惚気でもない。インフルエンザは、ただの風邪に比べても感染力に長けている。

真夕は、和弥の肩に手を当てて、軽く制した。

「大丈夫だよ」

和弥はそう言って、少し強引に真夕の唇を塞いだ。

ただでさえ火照った自分の身体が、尚の事熱くなるのを真夕は感じていたが、抵抗することはなかった。

身体が心地よく溶けていくような錯覚を感じて、全身を取り巻く節々の痛みが、ほんの少し、和らいだ気がした。

「マユ……プリンの味がする」

唇を離した和弥は、そう言って笑った。

「バカ。当り前でしょ、今食べたばかりなんだから」

真夕の頬が真っ赤に紅潮した。

和弥は何時もより弱々しい彼女を見て「大丈夫だよ、寝込みを襲ったりしないから」

真夕も、一緒に笑いなが「安心した。お腹が減って動けそうに無かったから」

「ああ、そうだ俺、千夏さんにお粥の作り方聞いて来たんだ」

そういつて、パタパタと部屋を出て行く彼に向かって真夕は

「和弥…… お粥の作り方知らなかったの？」

【6】友達

翌日から学校は試験休みに入ったが、寝込んでいる真夕には実感はまるで無かった。

具合が良くなったら、直ぐに最終日のテストを受けさせてもらえらしく、ひと安心したものの、普段滅多に風邪をこじらせる事が無い彼女には、この状態はかなりの苦痛だった。

怪我で入院した時でさえ、もっとラクだった。

さっき、和弥が部活に行く前に会いに来て、昼に千夏が来てくれると言った。

その言葉通り、昼過ぎに千夏がやって来て、美味しいおじやを作ってくれた。

「ああ、めっちゃ美味しかった」

「良かった。食欲があるなら大丈夫ね」

千夏はそう言って、柿を剥いていた。

「和弥ったら、お粥の作り方も知らないなんて」

真夕がそう言うと、千夏はプツと吹き出して「仕方ないわよ。男の子なんてそんなもんよ」

どんな方程式も二次関数も、すらすらと難なく解いてしまう和弥が、たかがお粥の作り方を知らなかったとは、真夕はそうとう驚いたらしい。

「ねえ、あたし、この光景見たような気がする。前に何処かで」

柿を剥く千夏を見て、真夕が言った。

彼女の言葉に、千夏にはピンと来た。

千夏が夏風邪で寝込んだ時に、彼女は、当時は彼だが、こうして自分の横で果物を剥いてくれたのだ。

それが、今の彼女自身とオーバーラップしているに違いない。

その記憶が少しはあるのだと思うと、千夏は嬉しくて笑みが零れた。

「そうね……」

千夏は小さく呟いた。

なかなか収まらなかった熱が引くと、忽ち身体は快復して、真夕は寝込んでから5日目の朝、まだ微熱はあったが学校へ行ってテストを受けた。

あまり日数が経つと、せっかくやった試験勉強の記憶が無くなつてしまいそうだったから。

試験休みに入った校舎は閑散として静まり返り、微かに吹奏楽部の練習の音が聞こえるだけだった。

彼女がテストを終えて、教室から外を眺めると、サッカー部の練習風景が見えた。

野球部の練習は、どうやら休みらしい。校庭も何だか殺風景で、木枯らしに舞う枯れ葉が妙に寂然として見える。

和弥が、教室の窓辺に立つ真夕に気が付いて、ほんの少しの間こちらを見たので、真夕は遠慮気味に小さく手を振った。

昇降口を出て、外の風に当たると、まだ背筋に悪寒が走った。

真夕は肩をすくめるとPコートのボタンを全部留めて、マフラーを襟の隙間に詰めるように押し込んだ。

自転車に乗って校門を出ると、真夕は思わずギュッとブレーキをかけて止まった。

「香織……」

香織が立っていた。彼女は少し俯いて上目使いに真夕を見つめると「今日…… 追試だってきいてさ」

気まずい空気に、一瞬の沈黙が流れた。

自転車を降りた真夕は、久しぶりに会った香織に笑みを送ると

「追試じゃない。風邪で休んで受けられなかった分を受けてたのよっ」

そう言って、じゃれつく仔犬のように身体ごと香織に体当たりした。

「きゃ」

よろけながら、途端に香織の顔にも笑顔が溢れた。

「あんた、病み上がりでしょ」

「まあね。でも、早く受けないと、テスト勉強の内容を忘れちゃうじゃない」

「じゃあ、帰りはあたしが運転してあげる」

香織はそう言って、真夕のマウンテンバイクに足をかけて「うわっ、乗りにくい……」

「香織、パンツ見えてるし……」

「うるさい」

何とか自転車に跨った香織を見て真夕は

「大丈夫なの？」

そう言って少し不安げに、後ろのステップに足をかけて立ち乗りました。

「まかせなさい」

香織がペダルを踏んだ自転車はふらふらと動き出すと、農道の横の細い水路に向かってよろけた。

「ちよっと、香織もっと左、左」

「大丈夫だよ」

そう言いながら、今度は左の畑にまっしぐら……

「ちよっと！真っ直ぐ走ってよ」

「大丈夫、大丈夫だってば……でも、なんか変」

「香織、加速したらギヤ変えて」

「ギヤって？」

自転車は、真夕の奇声と共に、終止右にふらふら、左によろよろ……真夕は、病み上がりの悪寒など何処かへ飛んで行ってしまうのだった。

【7】補導

「おい、秀雄。千円貸してくれ」

「何だよ」

秀雄は訝しげに応えた。

「頼む、やっと見つけたMAGICのCD、今買わないと…」

秀雄の学校も試験休みに入っていた。彼は学校の友達と一緒にあちこちで洋服などの買い物をした後、リサイクルショップに立ち寄っていた。

「千円ねえのかよ」

「さっき、スタジャン買ったお釣りが562円……」

秀雄の友人はそう言って笑って見せた。

「しかたねえ。すぐに返せよ」

秀雄はそう言って、友達に千円を手渡すと、店の奥に目を止めた。店内は古書の立ち読み以外、それほど人が多いわけではなかった。最近流行りの総合リサイクルショップの奥には、スノーボードや釣具などの中古品が展示してあった。それを物色している色黒の男。以前金髪だったその男は黒髪になっていたが、秀雄にはそれが誰なのか直ぐに判った。

「あいつ……」

秀雄は足早にその男に近づいて行った。

レジで精算を終えた秀雄の友達は、店の奥の騒ぎに気付いて振り返った。フロアーにいる店員が数人走って駆けつけているのが見えた。

何かとその先に視線を移すと、陳列棚の影で誰かが激しく揉めて、掴み合っている。店員は何とか止めようとしているが、二人の男は激しく絡みあって離れない。

レジにいた女性は、その光景を見て、蒼白な顔をして震えていた。

その日の夕方、バイト先へ向かう真夕の携帯電話が鳴った。彼女は、自転車を走らせたまま器用に電話に出たが、その内容に急ブレーキをかけて止まった。

「秀雄が警察に？　なんで？」

「知らないよ。誰かを殴ったらしいんだけど……」

電話を掛けて来たのは香織だった。

警察で事情聴取を受ける秀雄は両親の名前を言わずに、保護者として千夏の名前と連絡先を出したらしいのだ。そして、警察から千夏の所へ連絡が行き、千夏から香織へ連絡が入って、今の状況に至る。

「とにかく、これから行くんだけど……マユも来てよ」

「あたしが？」

「だって、心細いよ」

「わかった。じゃあ、あたし出先だからこのまま行くよ」

真夕はバイト先に連絡をいれると、そのまま警察署へ直行した。

真夕が警察署に着いた時、千夏と香織は既に駐車場で待っていた。

「とりあえず、あたしが行って来るから、二人は待っていて」

そう言って、千夏が香織と真夕を残して署内へ入っていった。

「大丈夫かな、秀雄」

心配そうに呟く香織に、真夕は

「大丈夫だよ。何かよっぽどの理由があったんだよ」

二人は、少しの間外にいたが、入り口で直立不動の警察官の視線に耐え切れず、中へ入って近くの長椅子に腰掛けた。

「香織ちゃん？　だよね」

同年代風の男が声を掛けて来た。

香織は真夕と共に彼を見上げた。

「前に一度……」

香織は一瞬記憶を巡らせて「ああ、秀雄の友達の」

「今日、一緒だったんだ」

「秀雄は何で？」

真夕が横から声を挟んだ。

「俺にもよく判んないんだ。気付いたらゴツイ男と取っ組み合っていて……」

「そう……」

香織はそう言って、肯くと

「ここは、あたし達がいるから平気よ。何時出られるかわかんないし」

「でもさあ……」

「大丈夫だよ」

「じゃあ、俺塾あるから行くよ。秀雄が出てきたら電話くれって伝えて」

「わかった」

香織が肯いて笑みを送ると、少し安心したのか彼も小さく笑った。

「じゃあ……」

秀雄の友達はそう言って、申し訳無さそうに出口へ向かって歩いて行った。

【8】約束

不快な喧騒に満ちたその場所は、妙に落ち着かない空間だった。何処を見ても警察の制服がウロウロと何かをしてる。一見役所のような仕事さばきだが、紺色の制服が余計な緊張感を生むのだ。

「たかよう、最近のガキは何考えてんだか」

香織と真夕が椅子に腰掛けてしばらくした頃、二人の前を一人の男が通りかかった。

「マサヤ……」

香織が男の顔を見て、急に立ち上がった。

「おっ、何だ香織か。久しぶりだな」

色黒の男はそう言って笑うと「何やってんだよ、こんな所で」

「別に、ちよつと用事」

香織は素っ気無く言う「あんたこそ、薬でも見つかったの？」

「おいおい、バカ言うなよ。俺は被害者だぜ。被害者」

マサヤは自分の腫れた頬を指差して言った。

「被害者？」

「ああ、今日変なガキがいきなり俺に飛び掛って来てよ、お前なんか知らねえっての」

マサヤは再び笑うと「店の店員に速攻捕まって、今この上にいるんじゃないの」

そう言って、天上を指差した。

「ま、俺も最近は温厚になったから、傷害の被害届は出さない事にしておいたけどな」

彼は自分の事だけ喋ると、濁った瞳で笑って「じゃあな」と、足早に署内から出て行った。

“上にいる男”が秀雄の事だと、香織も真夕もすぐに気付いたが、香織だけは秀雄の殴りかかった理由が判った。

マサヤこそ、香織を妊娠させた男なのだから。

冗談だと思っていた……秀雄は本気だった。

秀雄は香織が中絶した直後の病室で彼女と約束したとおり、彼をぶん殴ったのだ。

街中で見かけたマサヤに、秀雄は躊躇する事無く飛び掛ったに違いない……自分が進学校の生徒だと言う事も顧みずに……

香織はマサヤの事なんて、もうどうでもいいと思っていた。何処かではったり出くわしたとしても、冷ややかに笑い飛ばしてやろうと思っていた。

あんなチキンヤローの事なんて、考えるだけ時間の無駄だと思っ
たし、しっかり前を向けばそこには秀雄がいたから。

でもあの男には、香織に対して何の罪の意識も無かった。悔悟の
欠片も無い……

まるで何事も無かったように声を掛けてくるマサヤの心情が信じ
られなかった……

香織は煮え滾る気持ちを何とか押し沈めて、マサヤの後ろ姿を無
言で見送った。

「あれ、誰？」

「元彼」

香織は真夕の問いかけに素っ気無く応えて、再び長椅子に腰を降
ろした。

「じゃあ、秀雄が殴った相手って……」

「そうね。あたしを妊娠させてバックレたダサ男」

香織はそう言ってやるせなく笑った。

この時、真夕にも秀雄がどうして自分から手を出したのかが理解
できた。

それにしても、妊娠させて逃げた相手に、あんなに気軽に話し掛
けて来るものなのだろうか…… 真夕にも、マサヤの神経が理解出
来なかった。

「あんなシヨボー男放っておけばいいのに…… 秀雄もバカだよ」

香織は、笑い飛ばすようにそう言って俯いた。

それは、秀雄が香織の事をそれだけ大切に思っている証拠だよ：
真夕はそう言いかけてやめた。

香織の瞳に涙が滲んで、それを一生懸命堪えているのが判ったから。

一階のフロアーは交通課の窓口になっているらしく、引っぱり無しに人の出入りがあって、時折違反キップの事で窓口の婦警と口論している声が聞こえて来た。

緊急通報か何かで、裏口へ駆け出す警官の姿も見えた。直ぐにパトカーのサイレンの音が外に鳴り響いて、あっという間に遠ざかって行く。

香織も真夕も、何だか重苦しい空気にほとんど言葉を交わさないまま、時間だけがゆつくりと、しかし何時の間にか過ぎていった。

二人を包む時間の波は、とてつもなく暗たんとして、周囲から聞こえる混沌としたざわめきだけが耳に響いていた。

香織と真夕が再び硬い長椅子に座って1時間以上が過ぎた頃、二階の階段へ通じるドアから千夏に連れられて秀雄が出てきた。

香織は秀雄の姿を見ると、弾けそうな心を堪える事が出来なかった。

彼に駆け寄って思い切り抱きついた。何事かと周囲の人間が振り返ったが、そんな事は彼女には関係無かった。

「あんた、S高行ってる割には、けっこうバカなんだね」

彼女はそう言って、秀雄の身体に力いっぱいしがみ付いた。

千夏はその光景を少しだけ羨ましく思った。真夕は、目の奥が途端に熱くなった。

「おいおい……なんか俺、出所した気分だな……」

秀雄は周囲の視線を感じながら、苦笑いを浮かべて呟いた。

【9】衝動

空は青色を見せているのに、朝からチラチラと小雪が舞っていた。大奥山脈上空から、遙々冷たい風に乗ってやってくるのだ。

「はぁ……」

真夕の隣で加奈が深い溜息をつく。今日、彼女の悩ましげな溜息を何度聞いたことか……

「何よ、さつきから」

堪り兼ねた真夕が言った。

「だってさ、また今年のクリスマスもいい事ないなあって思うと、溜息も出るじゃない」

今日は冬休み前の終業式。そして明後日はクリスマス・イヴというわけだ。

「加奈は選り好みしすぎるんだよ」

「でも……晴香みたいに誰でもいいって訳にも……」

「失礼な。誰が、だれでもいいっての？」

横で何気に聞いていた晴香が言った。

「ええっ、だって成沢でしょ……」

加奈が言った。

晴香は成沢正人と言う、隣のクラスの男の子と付き合っている。

特にたいした特徴もない極々普通の男子生徒だが、何だかんだと付き合い出してもう半年にはなる。

「何よ。正人優しいんだよ。ねえ、真夕」

「えっ……」

あまり記憶の定かでない自分に振られても困る…… 真夕はそう思いながらも

「う、うん」と肯いた。

「明後日の晩、ウチでパーティーやるけど、加奈も来る？」

「えっ、いいの？」

「もちろん」

「でもさ、みんなカップルだったらやだな……」

「大丈夫だよ。和弥とか、香織とかだし」

「そうなんだ」

加奈は、笑顔を取り戻して「他は？ 男の子いっぱい来る？」

終業式が終わって、掃除の時間。真夕たちの班は図書室掃除の当番だった。ほとんど終わって加奈と真夕は一緒にゴミ捨てに行った。その帰り際

「せ・ん・ぱ・い」

真夕はその声の主が誰であるか、直ぐに判った。

「亜希子ちゃん」

「久しぶり、マユ先輩」

相変わらず細い身体で、彼女は笑っていた。

「あのう、ちょっと相談があるんですけど」

「えっ、あたしに？」

「後で、音楽室で待ってます。掃除が終わったら、来てください」
亜希子はそう言って、さっさと行ってしまった。

「あ、あの……さ……」

もう遅かった。

真夕は加奈と顔を見合わせた。

「ねえねえ、前にもこんな事あったよね」

掃除が終わって教室に戻り、帰り支度をしながら加奈が言った。
真夕も、4階へ通じる階段を上りながら、同じ事を考えていた。

「朋子、明後日のイヴどうするの？」

朋子は帰り支度をしながら、教室で友達と話していた。

「さあ、どうしようかな」

「あたし達、パーティーやるけど、あんたも来る？」
友人の梨歩が言った。

「ううん…… 遠慮しとく」

朋子の態度に梨歩は「あんた、まさか、もう他の……」

「さああ」

朋子がそう言って悪戯っぽく笑って見せるのを、教室の隅で帰り支度をしていたアツシは、一人で顔を紅潮させながら盗み見ていた。朋子と利歩が教室を出て階段へ向かっていると、スッと一瞬真夕の影が見えた。

4階へ向かっている彼女の姿だった

「あ、あたし、ちょっと……」

朋子がそう言おうとした時

「あ、ごめん、忘れ物」

梨歩がそう言って、教室へ引き返して言った。

朋子は、真夕が気になりながらも、とりあえずその場を動かかなかった。

【10】：G I D

真夕が音楽室のドアを開けると、亜希子はまだ来ていなかった。

「なあんだ、急ぐ事なかった」

彼女はひとり、呟いた。

すると直ぐに、亜希子が音楽室へ入って来た。

彼女は後ろ手にドアを閉めると

「マユ先輩は、三浦先輩と付き合ってるの？」

「何よ、いきなり」

亜希子はそのまま真夕に近づいて「どうなの？付き合ってるの？」

「別に、あなたには関係ないでしょ」

真夕はそう言って笑顔を作ると「それより相談って？」

まさか、今度は亜希子が和弥を好きだなんていうんじゃないまい

…… 真夕は少々不安になった。

「相談っていうのは… つまり……」

亜希子はそう言って、真夕に勢いよく抱きついてきた。

真夕はあまりの突拍子も無い彼女の行動に、身をかわす事ができなかった。

「ちょっと、なに」

亜希子は真夕のブレザーのボタンを無理やり外して、ブラウスの上から胸を掴んだ。

「ちょっと、何なの」

真夕は思い切り彼女を突き飛ばした。

「あんた、何なの？どう言うつもり」

真夕は息を荒げて言った。

彼女は後ろへ下がりがりながら、何とか音楽室から出ようとしていた。しかし、出口は亜希子の背中側に位置している。

何とか迂回して、あのドアから廊下へ出なければ。

真夕は異様な恐怖に打ち勝とうと、何とか冷静な思考を巡らせた。

「マユ先輩が好きなんです」

亜希子は肩で息をしながらそう言って、再び真夕に抱きついてきた。

「ちょっと、やめてよ」

華奢だと思っていた亜希子は、意外なほど力が強く、今度はなかなか彼女を振りほどけなかった。

なんなの……何なのこの娘。レズなの？

彼女の思考は混乱するばかりだったが、この状況から何とか逃れなければ。無意識にそれを考える事は出来た。

真夕は右に左に身体を移動させようとするが、それもうまくいかない。

もがいているうちに、亜希子は真夕の後ろへ回る形になり、両腕もガッチリと抱えられてしまった。

亜希子は、真夕の身体を弄りながら、頬にキスをしようとした。

「ちょっと、やめなさいってば」

真夕は身体を斜めにしてそれを避ける。

「何やってるの！亜希子」

ドアがバンツと開いて、朋子が駆けて来た。

朋子はそのまま亜希子の後ろから彼女を捕まえて、真夕から引き離そうとした。が、なかなか思うようにいかない。

3人は、だんごのように繋がったまま、教室の中をぐるぐると動き回る。

「離れなさい！亜希子」

朋子が喚きながら、必死に真夕の身体から亜希子を引き剥がそうとしていた。

「じゃまするな！」

亜希子は朋子を強く突き飛ばした。

「きゃあ」

朋子は、そのまま勢いよく床に跳んで転がった。

「朋子ちゃん」

真夕は亜希子に身体を抱えられたまま叫んだ。

亜希子は朋子突き飛ばす際に、真夕から右手を離していた。それによって、真夕の右腕は一時自由だった。

「いいかげんに、しろ！」

真夕の拳が、亜希子の顔面を捉えた。

大の男にはそれほど効かない真夕の小さな拳も、女同士なら充分威力を発揮した。

亜希子はパンチの衝撃と、それを繰り出した真夕に驚いて、朋子の隣に転がった。

真夕は無意識だった。拳で殴る気はなかった。それなのに、彼女の防衛本能は完璧に働いたのだ。

「いってえ…… 普通、女がグーで殴るかよ」

床に身体を起こした亜希子が、頬を擦りながら言った。

その言葉を聞いた真夕は、ふと思い当たる事があった。

「あんた…… まさかG I D」

【11】FtM-GID

「どうして、GIDなんて言葉しってるんだ」

亜希子は、目を丸くして真夕を見上げた。

「GDI?なに、それ?」

亜希子の隣で、朋子が言った。

「GDIじゃない、GIDだよ」

亜希子の言葉に朋子は「うるさいなあ、変態。ああ、頭痛い……」

「大丈夫、朋子ちゃん」

真夕は朋子の傍にしゃがんで、彼女の身体を支えた。

朋子は、亜希子に突き飛ばされた時に、頭を床にぶつけたらしい。

「いったあい。もう」

朋子はしきりに自分の頭を撫でて「亜希子。あんたどういうつもりなの?」

亜希子は、言葉を詰まらせていた。

「なんとか言いなさいよ。マユ先輩のこと襲ったりして」

朋子は亜希子の異常な行動に、どうにも納得がいかない様子だ。

「朋子ちゃん、ちょっと、二人で話させてくれない」

真夕は、朋子を宥めるように言った。

「えっ……でも、危ないです」

不安げな朋子に、真夕は「大丈夫よ。たぶん」

そう言われて、朋子はいそいそと音楽室のドアを開けた。

「朋子ちゃん」

真夕が、出て行く朋子呼び止めて「助けてくれて、ありがとう」

「さて、いったいどう言う事なの?」

真夕が亜希子の隣に座って言った。

「どう言うって、こう言う事さ。僕はマユ先輩が好きなんだ」

亜希子は、少しふて腐れたそぶり、そっぽを向いて言った。

「あなた、女性でしょ？それなのに、あたしがいいの？他の男の子は？」

亜希子は首を横に振った。

「僕は、たぶんFtM—GIDだと思う……」

「たぶんって？」

「ちゃんと検査を受けた事ないから……」

「そう…… 他にあなたの事を知っている人は？」

亜希子は再び首を大きく横に振った。

「誰にも言った事ないよこんな事」

「じゃあ、GIDの事は、自分で調べたの？」

亜希子は、真夕を見つめると

「だって、こんな……こんな異常な事、誰にも言えるわけ無いじゃないか」

声を荒げる亜希子の目には、今にも涙が溢れそうだった。

「でも、だからって女の子を襲っちゃだめよ」

真夕は出来るだけ、優しく微笑んで言った。

「判ってるけど、触らせてって言って、触らせてくれるもんじゃないだろ」

「そりゃ、そうだけど…… そんなに女の子に触りたいの？」

亜希子はこっくりと肯いた。

「自分の身体も、女の子なのに？」

「それは、関係ないと思う。だって、好きな人の身体に触りたいって言うか、温もりを感じたいって言うか……キスしたいって、言うか……」

亜希子の声が尻すぼみに小さくなっていった。

これが、性同一性障害なのか…… 真夕は、目の前にいる亜希子の姿が、人事ではなかった。

自分の自認する異性を異常に欲する亜希子の性質は、真夕のそれとはまた別なのだが、彼女はそんな事までは知らない。だから、以

前の自分の事を考えると、何だか怖気付くのがあった。

「まさかあなた、前の学校でも……」

真夕のその言葉に、亜希子は俯いたまま

「だって、どうしようもないんだ」

亜希子のその表情は、切なさにあふれていて、真夕は彼女を責める事が出来なかった。

「とにかく、自然にそういう事が出来る女性に会うまで我慢しなさい」

真夕には、他に言える言葉が見つからなかった。

「レズを探せて事？」

「いや、そう言うわけじゃ……例えば、MtF—GIDとか……」

真夕も、自分の症例を秀雄と和弥に聞いてから、少しだけGIDについて調べたのだった。そして、以前診察してもらったクリニックへも行った。

「ヤダ。女の身体をしてなきやイヤダ」

亜希子が強く言った。

ずいぶん勝手なこと…… 真夕にはそれを口に出す事はできなかった。

「でも、それだと肉体的に結ばれないんだよ」

「それでも、女の身体がイイ」

「そ、そう……」

亜希子の言葉に、真夕はそれ以上何も言えなかった。

本当に、自分には亜希子に何かを言う資格があるのだろうか……

「ねえ、と、とりあえず、お母さんとかに相談してみれば？」

「ダメだよ。ウチ、スゴク厳しいんだ。小さい頃から何時も女の子らしくしろって叱られてた。おかげでタバコ吸うのも一苦労だよ」

「いや、タバコは何処の家もうるさいと思うけど……」

真夕は思わず苦笑して「じゃあ、クリニックで検査だけでも受けてみれば？」

「何で、そんなに詳しいの？」

「えっ？」

「普通は、G I Dなんて言葉知らないし、クリニックって？」

真夕は、その場を回避する為に、洗面所へ行きハンカチを濡らして亜希子の頬に当ててあげた。後は、ただひたすら笑ってその場を凌ぐしかなかった。

【12】性癖

真夕が3階で亜希子と別れて、自分の荷物をもって昇降口へ来ると、朋子が待っていた。

「先輩…… 大丈夫だった？」

「うん。大丈夫よ」

真夕はそう言って笑って見せると

「ねえ、今日の事は誰にも言わないで」

「でも……」

「あたしは大丈夫だったし、朋子ちゃんは頭ぶつけてムカついてると思うけど」

「あたしは平気です。でも……」

「彼女は…… 亜希子ちゃんは、なんか悩みがあるみたいだから」

「はあ……」

朋子は不に落ちない顔をしていたが「マユ先輩がそう言うなら……」

「ありがとう。それと、助けてくれて本当にうれしかったよ」

朋子は面と向かってそう言われ、思わず頬を紅くしてしまった。

「じゃあ、もう帰ろう」

そう言って促す真夕に朋子が

「でも、結局は先輩の右ストレートが決めてだったんですね」

「あ、あれは…… たまたま出した右手が当たっただけよ」

「そうなんですか」

朋子がそう言って笑うと「あつ、先輩、ブレザーのボタン。一個取れてる」

笑い声と共に、外へ出た二人は、風の冷たさに思わず同時に身震いした。

「さっむう」

真夕は、開けていたPコートのボタンを慌てて全部留めた。

「朋子」

昇降口を出た校舎の影から、アツシが声を掛けて来た。

「アツシ。どうしたの？」

「どうしたのって…… あ、マユ先輩、こんちわっす」

と言って再び朋子に向かって「今日、一緒に買い物する約束だろ」

「ああ、ごめん。忘れてた」

「梨歩が一人でいたから訊いたんだよ。そしたら4階に行っただけだから、待ってたんだよ」

「ああ、ごめんごめん」

「じゃあ、あたし、先に行くから」

真夕はそう言って、二人の間から抜け出した。

真夕はひとり自転車を走らせながら、あのまま亜希子の思うままにされてたら、自分はどうなっていたのだろうかと思うと、何だかぞっとして、それを想像する自分が少し怖かった。

「へえ、亜希子って娘がねえ」

真夕の話を聞いた和弥はそう言って肯いた。

夕方、和弥は真夕に呼ばれて、彼女の家に行った。

誰にも言わないように朋子には言ったが、真夕は和弥には話しておこうと思ったのだ。

彼は真夕本人以上に、FtM－GIDを客観的に見て来ているのだから。

「和弥、亜希子ちゃん知ってる？」

「一度、朋子と一緒に歩いているの見たかな。髪が短くてスゴク線の細い」

「多分その娘だよ」

真夕は、リビングのソファに座った和弥にコーヒーを差し出して「なんか、シヨックだった」

「そりゃあ、いきなり女の子に抱きつかれりゃあな」

和弥がそう言って、コーヒーを口に運んだ。

真夕は、小さく首をふって

「違うの…… あたしもあんな感じだったのかと思うと、心が締め付けられて……」

和弥はコーヒーカップをテーブルに置くと

「マユは、もっと淡泊な感じだったけどな」

「た、たんぱく？」

「そう。そんなに、異性に、つまり女性に対してギラギラしてなかったぜ」

「そ、そう……」

真夕は、和弥の言葉にホッと息をついで、自分もコーヒーを飲んだ。

「マユは他にやる事いっぱいあったから、もんもんとする暇が無かったんじゃないか？」

「そ、そうなのかな……」

真夕は、なんだか和弥に自分の性癖を分析されているようで、気恥ずかしかった。

「それに、俺がついていたしな」

和弥は冗談半分に笑って言った。

亜希子に比べて、のびのびと育った真夕は、性同一性障害に対して前向きな考えを持っていた為、比較的ストレスが少なかった。

そして、何時もそばにいた和弥の存在が、もちろん時には思い悩む原因にもなったが、それは真夕にとってとても心強かったのは確かで、亜希子には無いものだった。

真夕は、和弥の冗談半分で言った言葉に、何故か共感した。おそらく、記憶のずっと奥にある何かが、そう感じさせたのだろう。

じっと和弥を見つめる真夕に、彼は「な、なんだよ。そんなに見

るなよ」

そう言っで、コーヒーを口にして、カップで視線を遮った。

【13】憩いするとき（前書き）

時期が大幅にずれていますが、避けては通れないクリスマスのお話です。

【13】憩いするとき

冷たく澄み渡る夜空には、絵に描いたような北斗七星が浮かんでいた。

「ほら、和弥それもって行って」

真夕の言葉に和弥が

「へいへい」

そう言って大皿をテーブルに並べながら「千夏さんまだかな」
加奈は、ひとりソファで寛いでテレビを観て笑っている。

「おい、加奈。お前も少しは動けよ」

「だって、あたしなあんもできないよ」

加奈の惚けぶりは、和弥相手でも変りは無い。

「しょうがねえなあ」和弥が肩をすくめた。

そう言っていると、チャイムが鳴った。

和弥が玄関を覗くと

「こんばんはあ！」

香織のやたらと通る声が、キッチンの真夕にも届いていた。

和弥は香織と秀雄を見て「役に立たないのが先に来ちゃったな」

「な、なによ、それ」

香織が口を尖らした。

「まあまあ、半分は当たってるし」

秀雄が笑って言う。

再びチャイムが鳴った。

「こんばんはあ」

今度こそ千夏の声だった。

「こんばんはあ」

リビングに入ってきた千夏に向かって、真夕、和弥、香織、秀雄の4人はほとんど同時に声を返した。

クリスマス・イヴ。今夜は真夕の家でパーティーをするのだ。

料理があらかたテーブルに並んだ頃、再びチャイムが鳴った。

「誰だろう」

和弥が真夕を見てそう言いながら、玄関へと歩いて行った。

「こ、こんばんは……」

ドアを開けると、耳が半分出るくらいのショートカットの娘が、小さな顔で笑っていた。

それは、三田村亜希子だった。

「マユ先輩が、暇だったら来いって、言ってたから」

「あ、ああ、そう。どうぞ、入って」

和弥は、その一見華奢で可愛い彼女、というか彼を招き入れた。

「あら、亜希子ちゃん来たんだね」

「ちゃん。っていうの、やめてもらっていいですか……」

「どうしたの、目の下にアザ作って。彼氏と喧嘩？」

香織の声に亜希子は、真夕を襲って殴られたとも言えず

「いや……ちょっと、階段で……」

リビングからはそんな会話が聞こえて来た。

ドアを閉めようとした和弥は、再び外から声がするのを聞いて振り返った。

「よう、三浦」

「えっ？」

玄関口には影山の姿があった。

「マジで、来ちゃったんですか……」

終業式の帰り、和弥は影山に呼び止められた。

「明後日って、刑部はどうしてんのかな」と、彼は言った。

「ああ、彼女の家で、みんなでパーティーなんすよ」

「へえ、そりゃ楽しそうだな。何人くらい来るんだ」

「5〜6人すね」

「ほお、それで、何時から」

和弥は軽い気持ちで、訊かれた事に応えていた。

真夕からも、影山本人からも、二人がどうなったのかは聞いていなかった。ただ、最近は真夕の傍に現れない影山を、完全に諦めたものと思っていたのだ。

「心配すんなよ。ほんと、遊びに來ただけだから」

影山は、不安な顔をする和弥を見て笑った。

彼は、リビングに入ると

「これ、俺から」

そう言って、いきなり真夕にプレゼントを渡した。

「か、影山さん……」

いきなり現れた影山に真夕は目を丸くした。

「ちよつとあんた、今日この場ではみんなクジでプレゼント交換するのよ。一人だけ勝手にしないで」

香織が何時もの口調で影山にそう言ったので、和弥と真夕は焦った。

「か、香織。彼、和弥の部活の先輩だから……」

「へえ、そうなの」

こうして、星降るイヴの夜は楽しく？ 更けていった。

【14】星の瞬き

年が明けた。

真夕と初詣に行き、小高い丘の上の小さな公園から初日の出を一緒に見た。

周囲の雲を焼き尽くすような真っ赤な朝陽は、全ての景色を茜色に染めて、僕はその真紅の中で彼女を抱きしめた。

ダウンジャケットの表面が、あたりの空気に冷やされて冷たくなっていた。

彼女の体温を感じる事は出来なかったが、その時重ねた唇からは、真夕の確かな暖かい温もりが伝わり、僕も彼女への熱い思いを唇から直接伝えた。

それは、言葉ではどう表せばいいか判らないほどの想いなのだと思う。だから、「好き」と言う言葉が、あまりに軽く感じて彼女へ伝える事が出来ない。

もちろん、他の言葉なんて思い浮かばない。

だから僕は真夕を抱きしめる。僕にしがみつく彼女の腕の力の強さが、同じ思いを示しているのだと信じて。

これからの二人はどうなって行くのか…… 考えるのが不安で、僕は時々こうして夜空を見上げようになった。

焦らなくていい。

永遠に続く星の輝きのように、僕たちの時間はこれからもずっと続いていくのだから。

二人の時間の帯びが、まだまだ何処までも伸びているのだから。

和弥はベランダへ出て、眩暈のしそうなほどに広がる満天の星空を見上げていた。

澄んだ空気は枯葉の大地を宥め、紺青の空は銀河の星を抱いてい

た。

時間と空間の認識を麻痺させるほどに広がる頭上の景色は、混濁した全ての思いを吸収して、ろ過してくれそうな気がした。

「和弥、ちょっといい」

階段の上り口からだろう、母の呼ぶ声が聞こえた。

「いま、行く」

彼はそう言って、部屋を通過して階段を降りて行った。

『僕は考えても見なかった。

今この目に届く星の輝きも、既に消え去っているかもしれないと言う事を……』

学校が始まってすぐ、今年初めての大雪が降った。田畑の全ては白い布で覆ったように僅かなおうつを残してのっぺりとした景色に変わる。

農道は何処までが歩道で、何処からが田んぼなのか境目がまったく判らなくなる。

止まっている車は一回りも二回りも大きくなって、ただの白い塊と化していた。

「和弥ああ」

和弥が家の門を出ると、ちょうど白い息を吐く真夕の姿が見えた。積もった新雪に自転車が思うように進まず、悪戦苦闘している。

「今日は、自転車は無理じゃないか」

和弥はバスに乗るつもりで、徒歩で家を出ていた。

大量に積もった新雪は、自転車の車輪が埋まって、うまく回らなくなるのだ。

「ダメかなあ」

和弥の前にやっと辿り着いた真夕が言った。

「農道もかなり積もってるぜ」

和弥は、遠くの方を見渡すようにして「ぜったい、学校まで着かないって」

「じゃあ、置いてく……」

真夕はそう言って自転車を降りた。

「ウチに置いていけよ」

和弥はそう言って、真夕のマウンテンバイクを自分の家の庭に引き入れながら

「今気付いてよかったな」

二人は県道へ出て、バス停まで歩いた。車道は車に踏み固められてそうでもないが、歩道の雪は所によつては真夕の膝辺りまで積もっていた。脇を通っているはずの水路も、全く識別できない。

「自転車置いてきてよかった」

真夕はそう言って笑うと「バス、ちゃんと来るかな」

二人はできるだけ、誰かの足跡を辿るようにして歩いた。普通に歩くだけでも困難で、白い息が次から次へと吐き出されては宙に消える。

「かなり遅れてそうだな」

和弥がそう言った時、後ろから来たバスが二人を追い抜いた。大きな鎖の巻かれたタイヤが、車道の雪を耕すように回転して凄い音を立てていた。

「やべ、一本前のが今来たんだ」

和弥は思わず走り出した。

「えっ、ちょっと待って」

真夕も誰かの通った跡にはお構い無しで新雪の中に足を踏み出して走るしかなかった。

「早く！」

和弥が真夕の手を掴んだ。

バス停はもう目の前だったが、雪が邪魔をして、そう簡単には辿り着かない。二人の踏み出す足で、積もった雪が飛沫のように舞い

上がった。

停車したバスのドアが開いて、バス停で待っていた人が数人乗り込んだ。

「乗ります」

和弥は思わず声をだした。

二人の走る姿をバックミラーで見ていたバスの運転手は、そのままた待っていてくれたので、二人も何とかバスに乗り込む事ができた。
「ああ、よかったあ」

息を切らして真夕が言った。

二人共足元は雪まみれだったので、それが溶けないうちに必死で払い落とした。

和弥はふと真夕を見て、舞い上がった雪が髪の毛に着いているのに気付き、さりげなく払い落とした。

【15】沈黙

翌日の空は晴れ渡り、広大な田んぼ一面の白と空の蒼が絶妙なコントラストを醸し出していた。

光と共にレンズから入ったその景色は、ペンタプリズムを通してファインダーへ映し出される。

構図を確認しながらシャッターボタンを半押しすると、視線の移動に、視線入力の赤いランプがそれを追って移動する。

AEROックを使って、そのまま構図の三分の二を空に向けてシャッターボタンを撫でると、ミラーアップの微かな反動がその両手に伝わる。

真夕は久しぶりにカメラを手に使っていた。

デジカメの方が重宝するから。そう言って母親がくれたEOS 1N。彼女の小さな手には少し大きいし、カメラとしてもかなり重い。しかし、真夕は銀塩カメラが好きだった。

シャッターボタンを押し込んだ瞬間の微かなミラーの振動と音は、風景を切り取ったと言う実感が湧く。

道路の雪は粗方踏み固められていたが、相変わらず田んぼの雪はまっさらだった。野鳥や獣の足跡だけが小さく点々と付いている。

「今朝は早かったんだな」

通学途中の農道で写真を撮っていた真夕は、学校へ向かう途中の和弥に声を掛けられて振り返った。

「あれ？朝連は？」

「今日は無い事になったよ」

「そうなんだ」

真夕はそう言って、カメラのレンズを和弥に向けた。

和弥は、ふざけてカッコをつける素振りで右の親指を立てて見せたので、彼女はシャッターを切った。

「俺、先に行くぞ」

「えっ……う、うん」

和弥は再びペダルを踏み込むと「遅刻すんなよ」

最近和弥の様子がおかしい……何が、とは言えないが、何処と無く変だと感じるのだ。

前だったら、このまま一緒に学校に行ったような気がする。

あたしが勝手に甘えてるだけなのかな……

真夕は遠ざかる和弥の後ろ姿をファインダーに納めると、ズーミングしながら連続でシャッターを切った。

朝の陽射しが逆光になって微かなフレアを作り出し、まるで映画の最後に凛々しく画面に消えて行く主人公のように見えた。

ファインダーを覗きながら真夕は、何だか胸の奥がキュツと締め付けられた。

以前はこんな事考えなかったのに……

クラス委員の中里ユリカとニコやかに何かを話す和弥。それに加わる美樹。何を話しているのか判らないが、笑い声だけは聞こえて来る。

隣のクラスの、確か遊佐かすみ……和弥に何の用だろう……何だか楽しそう。

智弘と修一の3人でまたバカな話で盛り上がっている。和弥は成績の良し悪しに関係なく友達を選ぶ。その基準はきつと「いい奴」なのだ。

放課後の廊下で一年生の女の子に声を掛けられていた……また、手紙でも貰ったのだろうか。はにかんだ彼女は足早に走り去る。

真夕は最近和弥の行動をつい視界に捕らえようとしてしまう。以前はそんな事なかった。誰と話そうが、誰と笑おうが、自分と和弥の距離はそう対して変わるものではなかったから。

以前の距離を越えた時、それは少しづつでも近づき続けるのが当

然だと思った。

しかし、それは違っていた。あまりに近づき過ぎた距離は、お互いに干渉して反発力を生むのかもしれない。

些細な事で不安が過ぎる。いや、些細な事なのだろうか。

何だか和弥の様子がおかしい…… 真夕がそう感じる日々は続いていた。そして、そんな不安を抱く自分が、真夕は堪らなく嫌だった。

「和弥、明日部活休みでしょ」

金曜日の放課後、部活に向かう和弥に真夕は声を掛けた。

「ああ」

「映画でも行かない？」

「ごめん。智弘たちと出かけるんだ」

「そう。うん。じゃあ、また今度ね」

真夕はそう言って笑って見せるが、寂しさが湧き出てしまった。

「ああ、わるい」

二人は一緒に昇降口を出て、真夕は駐輪場へ、和弥はグラウンドへ向かって歩き出した。

少し歩いて直ぐに、和弥は振り返って「マユ！」

「なに？」

真夕も振り返った。

「あ……あ……悪いな。今度埋め合わせするから……」

「うん。じゃあ、今度和弥のオゴリね」

真夕はそう言って笑うと、小さく手を振った。

和弥はそれに応えるように右手を上げると、グラウンドに向かって駆け出した。

【16】笑顔

「和弥！ボール」

仲間の部員の声が聞こえた。

「えっ？」

宙に舞ったサッカーボールが、バウンドしながら和弥の横を通り過ぎた。組になって、センタリングからのシュート練習をしていたのだ。

「何ボーっとしてんだよ。お前らしくも無い」

「わりい、わりい。西日が眩しくてさ」

和弥は小さく頭を振って、気を取り直すと

「どんどんやってくれ」

冬至を過ぎると夕暮れ時は少しずつ遅くなるが、それでも5時には真っ暗になる。ナイター設備はあるが、大会の近い時しか使用は出来ないのも、普段は日暮れと共に部活は終了する。

和弥はこの頃部活に身が入っていない。いや、全てに身が入らないと言った方がいいのかもしれない。

あくまで自分自身の問題が根本にあるのだが、それは同時に真夕との問題でもあった……。しかし、その事実を、和弥は誰にも話していない。

心の中は何処か空虚で、迫り来る時間の壁が彼の心に重く押し掛かってイライラだけが募り、それを抑える事で精一杯だった。

和弥は帰宅途中の真っ暗な農道で、自転車を止めると

「クソッ！！」

飲みかけのペットボトルを思い切り電柱に投げつけた。

俺は……。どうすればいいんだ……

大きな運河沿いには遊歩道が設置されて、犬の散歩やジョギングコースになっている。

日曜日の朝、真夕はカメラを手にその遊歩道へ来ていた。午前中の低い陽光が、松林や木立に影を作り出して、何となく陰影のついた画になる風景を作り出す。

河の水面にはカモも浮かんでいて、パンくずを投げ入れるとバシヤバシヤと集まって来たりする。

一息ついた真夕は川岸の傾斜ブロックに腰掛けて、缶コーヒーを飲んでいた。履いているのは勿論ジーンズで、上はネルシャツにダウンジャケットだ。

活動的になるときは、以前から持っている衣類が重宝する。

「マユ」

頭上から声が聞こえた。真夕が見上げると、遊歩道から和弥の顔が覗いていた。

「和弥。部活は？」

「午後からさ」

そう言いながら、彼は低い柵を乗り越えて、傾斜ブロックを降りてきた。さっき和弥からメールが来たので、この場所で写真を撮っていると伝えたのだ。勿論、彼が来るなんて思ってもいない。

「寒くないのか？」

「じっとしていると少しね」

「髪、切ったんだな」

和弥は真夕の横に腰を降ろすとポケットから缶コーヒーを取り出してプルタブを引いた。

「昨日は暇だったから。でもちよつと頭が寒い」

真夕は昨日久しぶりに髪を切った。後ろは首がギリギリ隠れるくらいの長めのショートだ。

和弥は自分の被ってきたニットキャップを脱ぐと、徐に真夕の頭

に深く被せた。

真夕はちよつと照れくさくて、無言でそれを手直した。

和弥はコーヒーを口にしながら

「今度の土曜は空いてるけど、マユは？」

「ああ、あたし、その日は加奈と……」

「そっか……」

和弥はそう言って俯いた。が、ふと真夕の顔を見返すと、やけにニコニコしている。

「ウ・ソ」

真夕は、そう言って白い歯を見せて

「別に予定なんて無いよ。最近和弥がツレないからちよつと意地悪したかっただけ」

「なんだよ、俺は別に……」

和弥はホッと息をついて一緒に笑った。

「何処行く？」

「お前、映画見たいんだろ」

「別に、映画じゃなくてもいいよ」

真夕がそう言って笑うと「この帽子あったかいね」

和弥は、彼女の笑顔を久しぶりに正面から見た気がした。

今年は雪が少ない。いや、近年の冬はこんなものか…… 昨シーズンが異常な大雪となった為、何だか余計に雪が少なく感じるのかもしれない。

1月も半ばを過ぎると、さすがに風は身を凍らせるような冷たさだが、晴天が多く太陽の日を浴びていればそう寒さは感じなかった。和弥と真夕は隣県にあるニュージーランド村に来ていた。が、しかし、広大な駐車場には従業員の車と思われるものしか無く、閑散としている。

「おいおい、やってんだろうな……」

送迎バスを降りて、その敷地に入った時和弥が言った。

「お正月以外は休み無しって書いてあったよ」

真夕がそう言って、るるぶを取り出して見せる。

チケット売り場で無事チケットを購入した二人は、ホッと息をついてゲートに向かうと、さっきチケット売り場にいた女性が駆け足でチケットを切りに来た。

ゲートを入ったメイン通りは、まるで荒野のゴーストタウンのよう閑散として、風が吹き荒んでいた。ニュージーランド風の演出の為に置かれた、大きな無人の幌馬車が、余計にそう感じさせるのかもしれない。

「誰もいないじゃん……」

和弥が遠くを見渡すようにして言った。

「いいじゃん、別に」

真夕はそう言って笑うと、ベンチに腰掛けてカメラを取り出した。彼女が写真を撮りに行きたいと言ったので、和弥がお供して遙々ここへ来たのだ。

「最近、よく写真撮るよな」

「うん。久しぶりに撮ったら、何だか楽しくて。それに、冬は空気が澄んでるから綺麗な画が撮れるんだよ」

「そういうもんかね」

和弥は、そう言いながら建物の向こうに目を止めて「おっ、羊がいる」

動物ランドという看板に誘われて行った建物には、羊の他に、ウサギとラマしかいなかった。

【17】決断

広大な山間の土地を切り開いて造ったニュージールランド村は、やたらとアップダウンが多く、歩くだけでも一苦勞だった。しかも、建物が少ない為、吹きさらしの高原の風が容赦なく身体を叩いた。

「寒いよ、何か飲もうぜ」

「運動部でしょ。だらしないなあ」

「グラウンドで走り回ってるのとは訳が違うぜ」

和弥は売店を見つけて足早に近づく。「うわ、やってねえじゃん

……」

「自販機で我慢しよう」

気を落とす和弥の肩を、真夕が叩いた。

「村」と言うだけあって、教会や集会場、ホテルやレストランと言った具合に、建物の全てが意味のある形をしている。このテーマパークが異国にある一つの村を表しているのだ。中はほとんどが食事をとったりお土産を買ったりする造りになっていたが、そのどれもが今日は営業していなかった。

「しかし、これだけウロウロして誰にも会わないってのも、妙だな」

和弥が缶コーヒーを片手に、辺りを見回した。

「なんだか、この世にあたしと和弥の二人しか存在しないみたいだね」

真夕がそう言って笑うと和弥は

「じゃあ、俺たち、ここではアダムとイヴだな」

そう言って真夕に抱きついた。

「あっ、少しは暖かいね」

真夕はこの寒さの中で抱きしめられて、感じたままを言葉にした。その途端、和弥がパツと身体を離れた。建物の影から、人の声が

したのだ。

「チヨ―誰もいないじゃん」

「こんなん、入場料取るなっつての」

一組のカップルが見えて、真夕たちと視線が合った。思わず笑みを返した真夕と和弥に向こうも、やっと人に会えたと言う不思議な笑みを浮かべて通り過ぎた。

コーヒ―を飲み干した和弥は

「一枚くらい一緒に撮ろうぜ」

「えっ、あ…うん」

石像の土台にカメラを設置してセルフタイマーをONにし、ピントを合わせて被写界深度を見ながら絞りをF4にセットする。シャッター速度は速めの方がいいだろう。

直立する和弥は落ち着き無くキョロキョロしている。

その姿をファインダー越しに見つめる真夕は、クスッと笑って、もう一度ピントを合わせ直してからシャッターボタンを押した。

「早く早く」

ピント合わせの対象として初めからその場所に立っていた和弥が、真夕を手招きした。

「そんなに焦らなくても大丈夫。マンガじゃないんだから」

真夕は笑いながら、教会の前に立つ和弥の元へ小走りに駆け寄った。

ギョッと和弥に抱き寄せられた瞬間に、シャッターは切れた。

眩い陽の光の中で、二人は満面の笑みを浮かべていた。

帰りは再び、バスと電車を乗り継いで家路に着いた。

西日が強く差し込む帰りの電車で居眠りをする真夕は、完全に和弥の肩に寄り掛かっていた。彼は、彼女の寝顔を見つめながら、これからの事をひたすら考えていた。

もう直ぐ2月になる。いかげん言わなければ。

ギリギリまで伸ばして、突然いなくなるのもいい。でも、それで本当にいいのか……

悔いは残らないのか……しかし、今言ったからってそれがどうなる……

地元の駅に着いた頃には、もう完全に日は暮れていた。

「ちよっと、いいかな」

二人が和弥の家の前に来た時、彼が言った。

「何？」

「ここじゃあ、ちよっと。真夕の家、いいか？」

「うん。いいよ。お茶でもしようか」

二人は和弥の家を通り越して、真夕の家に向かった。

小さな街灯だけが、物憂げに二人を照らしていた。

【18】星月夜

「今、なんて言ったの？」

真夕は自分の耳を疑って、再び和弥に訊いた。

聞き取れなかったわけではない。願わくば、聞き違いであって欲しいと思った。

「ウチ、引越す事になったんだ」

「うそ……」

真夕の言葉に、和弥は小さく、ゆっくりと首を横に振った。

「どうして？ 学校は？」

「転校するよ」

「だって、あと一年だよ」

真夕の心は無意識のうちに取り乱していた。

「和弥だけ残れないの？」

「俺も考えたよ。でも、父さん、この前の怪我でイマイチ心配でさ。母さん一人じゃ大変だろうし……」

「そうだよね…… 家族だもんね。一緒に暮らすのが当たり前だよね」
真夕は俯いたまま

「ごめん……」

彼女は湧き出る感情を精一杯噛み殺した。

「そんな事ないよ。俺だって……出来ればここで高校を卒業したい」
真夕は和弥の言葉が、まるでテレビの向こう側から聞こえるような気がした。

平常心を保つ為に、今この時が現実ではないような、そんな気持ちで彼の言葉をおぼろげに聞いていた。

「何時行くの？」

「親父の辞令が、2月の20日付らしいから、15日には」

「けっこう急だね……」

「ああ…… ごめん」

和弥はいかにも自分に非があるかのように申し訳けなさそうに俯いた。

「和弥が謝るのはおかしいよ」

真夕は一瞬言葉を選んで

「ほら、急なほうがバタバタしてるうちにいなくなるって言うか、別れられるって言うか……」

少しの沈黙が流れた。それが真夕には果てしない時間に感じた。

和弥は、きつと彼なりにこうして打ち明けるまでもにずいぶん悩んだのだろうと、真夕は察した。

和弥はこの事を隠していたんだ…… 様子がおかしかったのはこれだったんだ。

「和弥は、何時から判ってたの？」

「……年明けて直ぐ……」

「やっぱり」

「ごめん…… でも、まだ誰にも言ってないんだ。学校には親から連絡が行ってるけど、とにかく最初に言わなくちゃいけないのはマユだと思った」

「うん。判ってる……」

真夕は自分が無表情になっている事に気付いて、あわてて笑みを浮かべた。

「じゃあ、俺、そろそろ帰るわ」

和弥はそう言って立ち上がると、真夕の家から出た。

庭の草木の影には、何日か前に降った僅かな雪が白く残っていて、吹き荒ぶ風の冷たさがやたらと身にしみて、和弥は首を窄めて自分の家まで走った。

ここで終わって欲しい。電源を切るみたいにプツリと終わって欲しい。この先の半月の間、別れる彼女との思い出はもう欲しくない……

和弥は太腿が攣るほどの猛ダッシュで走った。

真夕は今日撮影したフィルムをカメラから取り出して、教会の前で写真を撮った時、彼に抱き寄せられた温もりが、ふと蘇えった。

和弥がいなくなる…… ずっとずっと一緒に同じ時間を過ごして、同じ空気を吸って来た彼があたしの目の前から消える……

姿は見えなくても、何時も感じていた彼の姿は、何時でも会える距離で生活を共にしているからに他ならない。

その彼が、遠くへ行ってしまう…… 千葉……って、どんな所だろう。

今日会いたくなって、明日手を触れたくても、どうにもならない距離。それはきつと、彼を感じられない距離だ。

気まぐれに偶然を装った学校帰りの道、彼と自転車を並べて風を切ったあのひとは、遠くに霞んで思い出だけになってゆく。

真夕は窓のカーテンを開けて、星空を見上げた。

この星空のように、何時までも変わらない二人の関係が、真夕には当り前のように感じていた。

それは突然打ち砕かれて、何も無くなってしまふのだと改めて痛感して、暗たんとした思いだけが心の中にしみじみと広がる。

急激に込み上げる涙を堪える事は出来なかった。

真夕の吐いた息が、ガラスの表面を白く曇らせていった。

零れ出した涙は、もう止まる事を知らなかった。

冷たいガラス戸に額をぶつけながら、彼女は手足が震えるほどに涙に咽た。

「和弥……」

性同一性障害で苦悩する自分を支え続けてくれた和弥……その記憶が欲しい。GIDを除外して勝手に再構築されたものでは無い、彼との本当の記憶。

呼吸が苦しくなるほどに大きな塊となって、その悲しみは何処ま

でも膨れ上がった。

そのまま膝を着いて崩れる彼女の頬から流れる雫は、河のように顎を伝って止め処なく滴り落ちていた。

その湧き乱れる悲しみと涙の量に、彼女はそれを拭う事さえできなかった。

月明かりのように優しく輝く明るい星空が、沈黙と静寂に包まれながら何時までも彼女の姿を見下ろしていた。

【19】臆病

カーテン越しの外の光は何時もより白く光っていた。
雪だ。

真夕はその明るさに、ベッドから起き上がった。
雪の降った朝は空気が違う。それは、冷たさとか寒さではない。
透き通るような澄みきった雪の匂いが、ガラス戸を通り抜けて部屋
の中に入り込んでくるのだ。

カーテンを開けると、青空から照りつける太陽が真っ白な景色に
反射して、その眩しさに真夕は目を細めた。

全てを呑み込んだ白銀の世界と澄み渡る青い空…… 今の真夕に
とって、それはあまりに酷なほど清々しい風景だった。

「真夕、三浦さんそこ、引っ越しですってね……」

真夕がキッチンへ下りると、珍しく、母親がまだコーヒーを飲んで
いた。

「うん。聞いたよ。千葉だって」

「でも、お父さんの仕事、部署が変わって身体にはラクになるらしい
わ」

「うん……」

真夕は俯いたまま、小さく肯いて、自分のカップにコーヒーを注
いだ。

「そんな顔しないで。人生いろいろあるんだからさ」

小夜子は、そう言って真夕の背中をポンと叩いた。

「うん」

真夕はなんとか平常心を心掛けようと

「お母さん、今日はずいぶんゆっくりなのね」

「この雪だから、道路が混んで、急いでもしかたないでしょ」
そう言って、小夜子は、バックを片手に玄関へ向かった。

真夕は何となく、母が自分と話をするために、今までここにいたような気がした。

「いってらっしゃい」

真夕は、キッチンから顔を出して、玄関の母親に言った。

「で、どうするの？」

香織が言った。

「どうするも、こうするも、どうにもならないでしょ」

真夕は精一杯の強がりを含めた無理めな笑みを浮かべて応えた。

二人は国道沿いのファミレスで久しぶりに一緒に夕食を共にしていた。

秀雄に和弥の転校の事を聞いた香織が、真夕を食事に誘ったのだ。

「そうじゃなくて、彼と…… まだなんじゃないの？」

「ま、まだって…… 何が？」

「もう…… あんたねえ。和弥が向こうに行ったら、今度は何時会えるか判らないんだよ」

香織はイライラした様子で、ホットココアを口にした。

「そ、そんな事言っただけ……」

真夕もコーヒーを手にして、チビチビと口へ流し込んだ。

「和弥がどう言うつもりなのか……」

「和弥はマユを大切にすぎるんだよ」

香織はそう言って、ドリンクのおかわりを取りに行った。

真夕にも判っている。

再び会えるかさえ判らない今、今度何時会えるのかなんて想像も出来ない。それに、向こうでもっともっと素敵な女性に巡り会えるかもしれないのだ。

「あんた、まさか和弥が向こうで素敵な娘と出会うかも……なんて考えて無いでしょうね」

おかわりのココアを手にも、座りながら香織は言った。

真夕は思わず、口に入れたコーヒーを戻しそうになって、慌てて飲み込んだ。

香織は小さく肩をすくめると

「朋子ちゃんって娘、どうだった？」

「どうって？」

香織の不意をついた質問に、真夕は怪訝そうに応えた。

「秀雄の話じゃ、けっこう可愛い娘だった」

「うん。可愛いイイ娘だよ」

「和弥はその娘を振って、あんたの傍に来たんだよ」

真夕は言葉が出なかった。

そうだ…… あたしは相手を思いやるふりをして自分の臆病さを誤魔化してる……

朋子が傷ついた分、きっと自分には頑張る義務があるんだ。

香織は、真夕の瞳が少しだけ輝いたのを見て、子供を見るように微笑んだ。

【20】誰そ彼れ

和弥は2月13日で学校を後にした。

その翌日、真夕は出来るだけ何時もと変わりなく過ごそうと努力した。和弥もそうだったから。

何も変わり無いのだと自分に言い聞かせて、学校へ行った。

しかし、教室の和弥の机はもう無かった。

何時もと同じハズの教室の中が、とてつもなく広く感じて、彼一人がいらないだけのはずなのに、そこが自分の居場所では無いような気がした。

「三浦、明日発つんだって？」

休み時間、晴香が真夕に言った。

「あいつ、元気だったから寂しくなるね」

加奈がポツリと呟いた。

「でもさ、大学こっちに来るかもしれないし。また会えるよね」

晴香と加奈がそんな話を話しているのを、真夕はぼんやりと聞いていた。

帰り道、真夕は和弥の家の前で立ち止まり、何となくその家屋を見上げた。

小さい頃に我が家同然に出入りした家。中学の頃からあまり来なくなり、高校へ入ってから数えるほどしかその敷居を跨いでいない。

二階にある和弥の部屋の窓には、青空と太陽が映り込んでいた。

真夕は、何故か、その窓に映り込んだ空をじっと眺めていた。

「ミュ」

玄関の扉が開いて、和弥が出てきた。

何日も顔を合わせない事なんて、今までだっていくらでもあったはずなのに、1日ぶりの彼の姿が、真夕には何だかとても懐かしく感じた。

「明日、何時？」

真夕は笑顔で訊いた。

和弥は、真夕の家のリビングで、コーヒーを口にしていた。

「7時には出るよ。向こうに昼前に着きたいらしいから」

和弥は少し笑って「今日の昼間トラックが来て、殆どの荷物を持って行ったから、なんだかもう自分の家じゃないみたいさ」

「だ、大学……」

「えっ？」

「大学、どこ行くとか、決めてる？」

真夕は唐突に和弥に訊いた。

和弥は少しの間を置いて「志望校は変らないよ。仙台の大学を受けるつもりさ」

「じゃあ、また会える？」

「ああ、俺が大学落ちなければね」

和弥はそう言って笑うと、コーヒーを飲み干して

「そんな時は、バイトしてアパートでも借りるさ」

真夕は自分の鞆から包みを取り出して、テーブルの上に広げた。

「和弥が来ないから、みんな今日は困ってたよ」

広げた包みはバレンタインのチョコプレートだった。真夕は何人かの友達や後輩に、和弥に渡してくれるように頼まれて来たのだ。

真夕はその中の一つを手にとって

「これ、朋子ちゃんから」

「そっか」

和弥は少しだけ懐かしそうな目をして、それを見つめた。

「彼氏には内緒なんだってさ」

真夕はそう言って笑うと、再び鞆から小さな包みを取り出した。
「これは、あたしから」

「えっ？」

和弥はあまりにも驚いた表情を一瞬見せた。真夕がくれる初めてのチョコレートだ。

「なによ……」

「あ、ごめん。毎年貰った事なんて無かったからビックリしたよ」

和弥はそう言って笑うと、嬉しそうに包みを手に取った。

当然の事ながら、男性の性自認をしていた真夕は、バレンタインのチョコレートを誰にもあげた事は無い。

周りの雰囲気の流れされて、中学の時に一度は買いに言った事はあ
るが、そんな自分に気持ち悪さを感じて結局買わなかった。

女性の性自認をしている今の真夕には、もちろん、ちよつとの恥
ずかしさはあるがチョコレートを渡す事に抵抗は無かった。

和弥は他の包みもひと通り眺めると

「明日の道中、食料には困らないな」

黄昏の僅かな夕日がりビングの大きな窓から入り込んで、サイド
ボードのガラスに眩しく映り込んでいた。

「か、和弥……」

彼女の声に、和弥は顔を上げた。

真夕は、突然ソファから立ち上がると

「あたしの部屋に……行こ……」

そう言って、そっと手を差し伸べた。

微かに震える彼女の白くて小さな手。

和弥は笑顔で彼女を見つめると、優しくその手をとった。何時も
は冷たい彼女の手が、少しだけ熱く感じた。

真夕は、和弥に手を捉まれた瞬間、氷が溶けるように緊張が解け
ていくのが判った。

陽が落ち切る夕間暮れの中、二人が向かった真夕の部屋に、明か
りが燈ることはなかった。

【21】 雫

大気は白く煙り、草木は冷たいコートを纏う。屋根の庇から伸びた氷の剣は、朝の太陽に照らされて透明な光の輪を発していた。

翌朝、凍てつく寒さの中、和弥達の一家を乗せた車は、静かに住み慣れた我が家を後にした。

「父さん、右から行って」

和弥が言った。

「でも、遠回りに……」

母親がその言葉を遮るように「あなた、そうしてあげて」

微かに残った路面の雪が凍って、それをタイヤが踏み締める乾いた音が、朝の冷たい空気に響いていた。

和弥は、真夕の家の前を通ったとき、彼女の部屋をそっと見上げた。

閉ざされたカーテンが微かに揺らいだように見えた。

その時、玄関のドアが開くのが見えた。

「あら、小夜子さんだわ」

和弥の母親がそう言うと、父親は車を止めた。

真夕の母親が、玄関からサンダル履きで駆け出して来たのだ。

「元気でね」

「たまには連絡頂戴ね」

母親どうして笑顔を交わすと、小夜子は「元気でね、和弥くん」

和弥は車の窓をいっぱいに開けながら強く頷いて「お世話になりました」

小さい頃は、何だか母親が二人いるような気がしていた。

あまり家にはいない真夕の母親だったが、何だかとてもお洒落で、会うといつもイイ香りがして、よく自分の母親と交換したいなどと勝手に思った事があった。

車が走り出すとき、小夜子は

「またね！」

笑顔でそう和弥に言って、手を振った。

路地を抜けていく車の姿を、真夕は部屋の冷たいガラス窓に手を当てて、カーテンの細い隙間から静かに見送った。

彼の前に出れば、涙が止まらなくなってしまうと思った。そして、自分の涙に和弥は困惑してしまうだろう。

「明日はこっそり見送るね」

真夕は昨日、夕間暮れのほの暗いベッドの中で、和弥に寄添いながらそう言った。

「ああ、それがいいかも」

和弥は、何時ものように優しく微笑むと

「俺、決めたよ。ぜったいに、また逢いに来る。マユに逢うために戻ってくるよ」

真夕は和弥の胸のなかで、それを聞いていた。

「でも、もしも……俺よりいい奴が見つかったらさ……」

真夕は顔を上げて和弥の瞳を見つめながら、自分の人差し指を彼の口に当てた。

たぶん……絶対に、和弥よりあたしを判ってくれる人はいないよ。

真夕はそう言おうとしたが、結局言葉に出さなかった。

でもそれは、和弥に届いたような気がした。

薄明かりの中でも、二人の瞳の輝きは、お互いにはっきりと確認する事ができた。

車影が消え、走り去るその音も小さくなって、朝の澄んだ空気に呑み込まれてゆくと、再び凍てついた静寂だけがそこには残っていた。

「またね、和弥」

真夕は小さく微笑んで、そう呟いた。

東よりの低い太陽が真夕の頬を眩しいくらいに照らし出して、一粒だけ流れた雫が唇の端に触れると、

寂しさと切なさと……ちょっぴり希望の味がした。

.....
.....
.....
.....

ロングメール

D A T E .. 6 / 4 [2 3 :: 4 3]

T O [K A Z U Y A]

T i t l e [R e .. 元氣かあ]

T e x t

『私は元氣だよ。』

相変わらず自転車を走らせて、学校へ通っています。

そうそう、今日は帰りに急な雨に降られて、ずぶ濡れだったよ。

そしたらタイヤがパンクして…もう散々…

昨日、私はカートに乗りました。

私の所有する自分の紅いカートです。

変だよね。自分のカートなのに、気持ち的には初体験で…

物凄いスピードで、ビックリしたよ。

ハンドルが重くて、今日はちょっと筋肉痛です。

とりあえず、私はハマりそうにはないですが、一緒に連れて行った

亜希子がどうやら夢中になったみたい。

もう少し上手になったら、私のカートを譲ってあげるつもり。

そのお金で、一緒に旅行にでも行きたいな。

最近、初夏の暖かい風に吹かれながら青い空を見上げていると、少しずつつ々な事を思い出します。

和弥と二人乗りで自転車を走らせた事とか、一緒に防波堤に座って

海を見ながら潮風に吹かれてた事とか。

でも、何でかおっきなカラスがそこにいて、ゴミをあさってるんだよ。

何だか記憶はとても断片的で意味不明のモノもあるけど、私の記憶は確実に増えています。

なんか変だよね。

携帯電話で何時でも声が聞けるはずなのに、こうしてメールばかり打って…

でも、時間を気にせずに済むからいいよね。

夏休みに会えるのを楽しみにしています。

MAYU』

送信……

エピローグ

春の風は、暖かな陽の光に温められて、穏やかに甘く麗かに吹いていた。

アスファルトのひび割れから強く伸びたタンポポの周りを、二匹のモンシロチョウがヒラヒラと風を受けながら、踊るように舞っている。

サヤカは、それを楽しそうに見つめて微笑んでいた。

「あら、お出かけ？」

「はい。近くの歯医者さんへ検診に」

真夕は近所の主婦に声を掛けられて、そう応えた。

「定期検診はしておいた方がいいものね」

主婦は笑顔で「いつてらっしゃい」

24歳になった春、マユは結婚した。

隣町へ引越し、小さなメゾネット風のアパートで暮らしていた。

地元にいるよりも、その方が亭主の職場が近かったからだ。

程無く子供が生まれ、一家は3人になった。

「ほら、大丈夫よ。検診だけだから」

「だって、ワルイ所があったら痛くされるんでしょ」

「悪い所を放っておいたら、もっと痛くなるでしょ」

マユは娘のサヤカと目線を合わせるように屈み込んで

「それに、ここの歯医者さんは、痛くしないから人気があるのよ」

「ほんと……？」

「うん。だから、心配ないわ」

マユは娘のサヤカを連れて、家から程近い歯科医院の前に来た。

サヤカは今年5歳。名前の「さやか」は、何故かマユの頭に最初に浮かんだ名前で、どうしてもそれを娘につけたかったのだ。

それは以前出会った、車椅子に乗った直向な少女の記憶が、彼女の中に残っている証なのだろう。

12歳で命を落したあの少女の笑顔の記憶は、真夕の心の中に確かに刻まれているに違いなかった。

二人は歯科医院の入り口ドアを開けた。

受付には可愛い女性の水色の白衣を着て微笑んでいる。

受付を済ませて、ロビーのソファへ腰掛けると、早速サヤカが本棚から絵本を取り出してきた。

マユはサヤカと少しの間一緒に絵本を眺めていたが、診察室から出てきた他の患者の気配に顔を上げた。

「あ、マユ」

「ああ、久しぶり、香織」

診察室から出てきたのは、香織だった。香織は何処かの証券会社でOLをしていると聞いてはいたが、会うのはマユの結婚式以来だった。

「マユもここに通ってたの？」

「ううん、今日はじめて。サヤカの検診でさ」

「ここ、評判いいからね」

香織を見上げるサヤカに彼女は

「こんにちは」

「こんにちはあ」

笑って挨拶するサヤカと真夕を見比べて「やっぱり親子って似るのね」

「痛くなかった？」

サヤカが香織を見上げたまま訊いた。

「うん。全然。お姉ちゃんも痛い嫌いだもん」

安堵の笑みを浮かべるサヤカに、香織とマユは思わず顔を見合わせて笑った。

すると、サヤカの名前が呼ばれたので、真夕は立ち上がって娘の手を取り診察室へ向かった。

「じゃあね香織、今度電話するよ」

「うん、シテシテ。和弥は元気？」

「毎日元気」

「和弥にも宜しくね」

香織はマユが診察室に入ってドアを締め切るまで、手を振り続けた。

「今日は検診ですね」

歯科医師が優しく微笑んで言った。

しかし、サヤカに付き添って横に立っているマユの顔を見ると、医師は視線を止めた。

「刑部マユさん？」

「は？あ、はい。今は三浦ですけど、旧姓は刑部です」
マユは、自分を見つめる医師に

「あの…… なにか？」

その医師の瞳は、中年男性にしてはやけに綺麗で澄んでいた。

「あ、いや、何でもあります。可愛らしいお子さんですね」

長岡歯科クリニックの医師は、そう言って再び微笑むと、サヤカに向かって

「はい、お口あけてね」

「あああん」と声に出して口を開けるサヤカの姿に、真夕は目を細めて微笑んだ。

T H E E N D

D e a r G i r l | G i r l s M e m o r y 完結

エピローグ（後書き）

これで刑部真夕の話はお終いです。一作目はマユの心の動きが中心だった為一人称で書きましたが、二作目は困惑する周りの心情を大事に描きたかった為、三人称方式を取りました。違和感が無ければ幸いです。前作から長々と読み続けていただいた皆様には、大変感謝いたします。まだまだ未熟な作品ではありますが、ご感想はお気軽にお書き込みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3009b/>

G i r l s M e m o r y （Dear Girl続編）

2010年10月8日13時27分発行